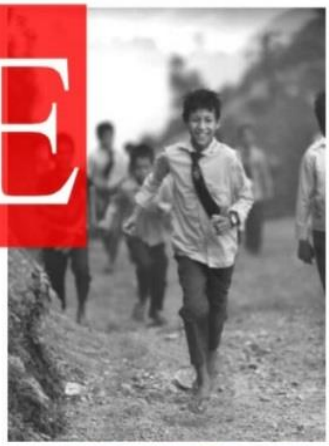
AAEE

Asia Association of Education and Exchange



２０１６年度
学生交流プログラム
報告書

2016 年 12 月 1 日発行
発行：AAEE, 一般社団法人アジア教育交流研究機構
東京経済大学関昭典ゼミナール
制作協力・報告書執筆
2016 年度ＡＡＥＥ国際学生交流プログラム参加メンバー
Vietnam-Japan Exchange Program 25 名
Nepal-Japan Exchange Program　　21 名
Vietnam-Japan Youth Exchange(東京経済大学関昭典ゼミ主催）２６名
編集　2016 年度東京経済大学　関昭典ゼミナール一同
編集統括　畠山涼介（東京経済大学経済学部３年）
曽　子傑　（東京経済大学経済学部２年）

2016 年 AAEE 活動記録

＜具体的な取り組み＞

１．NJEP（Nepal Japan Exchange Program）

８月下旬の２週間にかけてネパールにおいて行われた学生交流プログラム。貧困層の村でのホームステイや、現地小・中学校訪問を通じて、特に貧困問題に焦点を当てた活動を行いました。

２．VJEP (Vietnam Japan Exchange Program)

８月下旬の２週間にベトナムにおいて行われた学生交流プログラム。伝統文化継承についてリサーチ活動を行い、現地の高校や大学で結果と考察を発表しました。また、枯葉剤被害者グエン・ドク氏（ベトちゃん、ドクちゃんとして知られている）の講演を通じて戦争についても議論しました。

３．VJYE (Vietnam Japan Youth Exchange)

９月上旬の２週間にかけてベトナムにおいて行われた学生交流プログラム。ホーセン大学と共催しました。大学での講義や市内のゴミ拾い、公園での自作のゴミ箱設置活動など、特に環境問題に焦点を当てた活動を行いました。

４．Mero Sathi Project

2015 年４月２５日に大地震に襲われたネパールの復興の一助となることを目指して日本の大学生が主体となって立ち上げ。ネパールや東南アジア地域の大学生と協力して取り組むプロジェクトです。アジア教育交流研究機構（アジア地域における学生交流推進を目的とする一般社団法人）、東京経済大学、上智大学、啓明学園中学校高等学校（文部科学省スーパーグローバルハイスクールアソシエイト指定校）、が趣旨に賛同し積極的に支援をしました。

＜具体的な支援活動＞

- 地震当日にネパールに応援メッセージ配信
- 「ネパール緊急支援プロジェクト」を開催
- 募金活動
- 大学生協での Mero Sathi リストバンド販売
- 被災地からの状況報告
- 被災地支援＋学生交流プログラム

５．グエン・ドク氏を招いた講演会

ベトナムで行われた VJEP・VJYE のプログラムの一環としてグエン・ドク氏をお招きし、講演会を開催しました。戦争被害者という目線から、ドク氏自身の体験談や平和への思いなど、貴重なお話を伺うことができました。

６．「JICA 地球ひろば設立 10 周年記念感謝祭」参加

５月に JICA 主催で開催された当イベントにて、セミナーを開催しました。当機構の目的や活動内容の紹介、２月に行われたネパールでの学生交流プログラムの活動報告をさせていただきました。

７．「JICA 地球ひろば設立 10 周年記念　国際協力団体応援企画（ファンドレイジング編）＆交流会」参加

10 月に JICA 主催で開催された当イベントにて、当機構学生メンバーより当機構の概要と、VJEP の活動紹介をさせていただきました。

講演では国際協力団体が活動する上で不可欠であるファンドレイジングについて多くの学びを得たとともに、他団体と活動の情報交換も行うことができとても有意義な時間となりました。

８．定例勉強会

８月・９月のネパールやベトナムでの現地活動に向けて、４月から定期的にメンバーで自主勉強会を行いました。現地について知識を深めるだけでなく、プログラムに参加するにあたってのマインドセットなどについても学び、議論しました。

９．中央線内の広告掲載

東京経済大学の紹介として、当機構代表理事が指導する東京経済大学関ゼミナールがJR 中央線にて一カ月間にわたり掲載されました。当広告ではゼミナールの活動内容として昨年 AAEE と共同で活動していた Mero Sathi Project も紹介されました。

当機構の活動詳細はホームページ及び Facebook ページをご覧ください。

ホームページ

http://aaee.jp/　（日本語／英語）

Facebook ページ

https://www.facebook.com/AsiaAssociationOfEducationExchange/

（英語版のみ）

＜Nepal-Japan Exchange Project＞

Nepal-Japan Exchange Program (NJEP) 2016

日本人大学生が１３人、ネパールからは現地の大学生が９名参加し、合計２２名で８月にネパールで実施しました。日本人メンバーは、４ヶ月前より事前勉強会を開始し、出国２ヶ月前にはネパール人メンバーとインターネット上で交流を始めツアーへの準備を計画的に進めてきました。

ネパールに到着後、空港に出迎えてくれたネパールメンバーと合流し約１０日間の行程で３つの地域を訪れます。首都カトマンズ、第２の都市ポカラ、そしてマイダン村という農村部ある小さな村です。交通インフラが整っていないネパールでは移動時間が長く、スケジュール的にも非常にハードです。そんな中でも、日本・ネパール両国のメンバーは常に明るく元気に振る舞い、毎日みんなで歌を歌ったりしながら楽しく過ごしている姿が印象的でした。

プログラムの醍醐味でもあるパルパ県マイダン村でのホームスティ・プログラムのためには、バスとジープで２日間かけて村に辿り着かなければいけません。マイダン村はネパールの中でも特に生活条件が厳しく、電気は数年前に通じたあるものの水道がない

ため村人は毎日２回水汲みを行っています。私たちはマイダン村に４日間滞在し、メンバー全員がネパール人学生と一緒に村人のご家庭にお世話になりました。昼間はみんなで村の学校で子供達と遊んだり、日本の鯉のぼりを子供達に体験してもらう活動を行なったりするなど、村の生活を満喫しました。この３日間での全てが日本では経験できないようなことばかりでしたし、都会暮らしのネパールメンバーにとっても驚きの連続でした。極め付けは村人が私たちのために企画してくださったお別れパーティーです。村で飼育していた豚を私たちのために広場で屠殺し、その場で調理して食べさせてくださいました。豚の屠殺を見る機会など日本では中々ないですが、多くのメンバーが涙し、私たちが毎日のように食べている肉や生き物に改めて感謝するきっかけとなりました。

毎日が衝撃の連続で、言葉では表せないほど充実した日々でした。それは、ツアー中何があっても一緒に過ごしたネパールメンバーのおかげでもありました。日本メンバーにとって慣れない環境の中、彼らは常に私たちに寄り添い、冗談を言い合って笑いあったり、メンバーの誕生日にはみんなでサプライズパーティーをしたり、彼らとの思い出は星の数ほどあります。最終日の朝、お別れ会をしたときはみんなが涙を流して別れを惜しみました。「このツアーはもう終わるけど、私たちの友情は永遠だ。」ネパールメンバーの一人が最後に私たちにこう言ってくれました。その言葉の通り、私たちはいつか再開することを互いに約束して１０日間のツアーが幕を閉じました。時を越え、国境を越え、私たちの友情は永遠に生き続けることでしょう。そしてその友情こそが、このツアーで私たちが得た何よりの学びだったのだと、帰国して数ヶ月が経った今ひしひしと感じています。

《参　加　者　報　告　書》

「またネパールへ行く」

埼玉県立本庄東高校2年
田中和磨

現地での 2 週間は、私に『またネパールへ行く』という決意を固めさせてくれる経験だった。それは、心温まる体験、考え方についての大事な発見、得たいことを得きれなかった不完全燃焼による決意だ。

まず、不完全燃焼である理由は、言語と期間だ。ネパール人メンバーとの英語での会話で、言われることを全ては分からなかったので当然自分の考えを表現しきれなかった。だから、彼らが伝えてくれるリアルなネパールの人々の慣習や 文化を理解しきれなかった。また、異文化同士の会話で生まれるであろう、新たな考えも少なかった。英語だけでなくネパール語もだ。メンバー以外のネパール 人との関わりの中で得たいことがあるなら、現地の言葉を知らないと気持ちまでは分からないからだ。さらに、そうした気持ちまで理解したいなら、かなりの 期間も必要だと感じた。現地の人々との関係を少しでも密にしながらでないと、 良いことも悪いことも本質は見えてこないと思う。ただ事前にいくつものネパール語の表現を覚えたこと、英語が分からなければ別の表現を求めて分からないふりをしなかったことで、面白い発見や良い関係作りに繋がったのは良かった。そうした経験から次回はネパール語をある程度学んでから、もっと長い滞在をしようと思うし、これからは必須の英語については、自分なりに努力していく。

話は変わるが村では大きな発見があった。というより、これは違うのではないかと思っていたことが、やはり違ったと言ったほうが正しいかもしれないそれは、日本の人々からすると村の人たちは”恵まれない”と言う部類に判断されて しまうことだ。この考え方は自分の中にある意識や数値などで全く知ら

ないことを結論付けてしまうことから起きると思う。私は村の方々と過ごし、幸せであろう部分をたくさん見つけた。確かに、直接お互いが分かる言語で話せなかった 分、潜在的な問題は発見できなかったかもしれないが、安易に恵まれないと言えるわけではないと感じた。街を歩けば他国の方がいる今の世の中では、一度自分 の価値観や基準を疑ってみることが大事だと思う。そこから新たな考えが生まれてくるだろう。そう思える経験だった。

最後に 1 つエピソードがある。自分はメンバーの中で唯一怪我をして病院へ行った。しかし、この怪我は大事な怪我だった。結論から言うと、ネパールメンバーとの距離を縮めることができたのだ。 海外で初めての病院であり、骨折かもしれないという不安もあった。（結局肉離れだった）。そんな私に、付き添ってくれたネパールメンバーたちが『何も心配するな俺たちがついてる』と何度も言ってくれた。ネパールでは終始、仲の良い人を家族のように扱う温かさを感じていた。ここでも、彼らのおかげで安心でき た。また、日本人、ネパール人メンバーの中で最年少だった自分は完全には心の距離を縮めることが出来ないでいたが、それ以来ネパールメンバーとより多くの会話をした。

NJEP のメンバーたち

現地で『経験が人を大人にする』と言われたことがあったが、まさしくネパー ルでのすべての経験が私を成長させてくれた。この最高の経験が様々な形で最 高の結果を生むように行動していこうと思う。すでに学校ではプレゼンをした。さらにこれから新たな経験へと向かい、いつか社会に、人に影響を与えられるよう努力したい。

「異文化交流の先にある、わたし」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科一年
蓑島周

やりきれなかった。そしてやりきった。二つの思いが今も私を取り巻いている。次々と現れる困難を乗り切れるか否かは、きっとほとんどがそこに至るまでの準備で決まるのだな、と思った。

最初にそう感じたのはネパール人との会話においてである。日本人の中には日常会話程度なら難なくできる者もいたが、海外旅行経験さえなかった私は、拙い英語と大袈裟なボディランゲージでおどけることしかできなかった。どうやって気の許せる仲をつくることができるか考えた結果であった。ネパールメンバーは優しく応対してくれたし、自身も安堵感があったが、実のところは満足できていなかった。異文化交流において本当に相手を理解するためには、お互いの政治や経済、ひいては関心の深い分野まで話をするべきだと考えていたために、そのレベルの交流ができるだけの準備をしなかったことを悔やんでいた。

ツアー全体を通してもそうであった。私はツアー全体の活動日程や構成、さらには現地の情勢等の情報さえ把握しようとせず、期待に胸を膨らませた状態でネパールへと渡った。結果は一目瞭然。ポカラで記者会見が開かれた際には、緊急に代表が不在となった私たちは満足に質問に答えることができず、おそらくほとんどの記者には NJEP の活動意義を伝えきれずに終わってしまったように思えた。私は NJEP の一員であるにもかかわらず、どこかで他人任せにしていたのである。

そんな私にも良い出来事があった。首都から車で一日半かけ山の上にあるマエダン村に行き、村唯一の小さな学校に訪れると、そこには村中の人々が集まっていた。話しかけると照れてしまうシャイさを持つ、なんとも可愛らしい子供や大人がそこにはいた。言葉が通じない彼らと仲良くなりたい一心で、私はこれ以上ないほどにふざけた。思いつく遊びをとことん導入し、近づく私を嫌がる子供を容赦なく追いかけていく。後先も考えず全力でぶつかったことが功を奏し、のちに村人は私を「スー」と呼ぶようになった。なんだか認められたような気がして、素直に嬉しかった。それが“小便”を意味すると気づいたのは次の日だったが。

しかし仲良くなってしまえばこっちのもので、それから三日間は私が何もしなくとも向こうから寄ってきて、自然豊かな村を案内してくれるようになった。こんなところがあるよと、目をキラキラさせて寄ってくる彼らが愛おしくてたまらなかった。そして私は、こういう場所で子供と触れ合う時間が私にとって真の幸せなのかもしれないと思うようになった。今では子供と関わることまで視野に入れ、将来を見据えるようになった。

ネパールという異土で五感を通して学んだこと、感じたことは、心の内に秘め、先の人生に生かしていかねばならない。そして失敗は、二度と繰り返してはならない。そのためには自覚と覚悟をもった“準備の鬼”になることが必至である。そしてそう気づかせてくれた仲間たちに心から感謝したい。

「文明と心の豊かさの綱引き」

立命館大学国際関係学部2年
奥山りつ

本レポートでは、ネパールツアーから二か月経った今、一番頭の中に鮮明に残っているツアー中盤で訪れたマイダン村での 3 日間のホームステイでの自分の中の「幸せ」の認識の変化について記したい。

マイダン村にはお風呂はもちろんシャワーはなく、トイレは何軒かで共有していた。それに加え、動物のフンがそこら辺中に落ちていたりしてお世辞にも衛生的とは言えなかった。ではなぜそんな場所にいて幸せを感じたのか。それは夜日が暮れると家に帰り、朝は鶏の鳴き声で起きるといったように自然と同居して暮らすといういわゆる原始的な生活に自分が癒されていたからだ。村の中で生活している限り、多くの部分は物々交換で賄える点や、家畜を屠殺した際も血や気管に至るまで無駄にすることなく食べ尽くし、村中に均等に配分する点で、金銭ではなく、生死のサイクル・人の繋がりがよく活用されているのを実感した。

普段日本でかなり恵まれた生活を送っている私にとって、もしくはカトマンズやその他の都市で大学まで通って教育を受けているネパールメンバーにとっては、このような村での生活は十分非日常だといえる。私に限らず、このような非日常には多くの人が魅力を感じるだろう。ではその魅力を感じる心の根底にあるものは何なのか。マイダン村での生活に惹かれるのには、自分の日本での生活への不信や疑問が少なからずある。物質的な豊かさに恵まれ、さほど苦労せずに育ってきた私にとって、思い描く「幸せ」な生活の送り方は一つの決まったモデルがあった。しかし、その生活を実践しているにも関わらず、どうも精神的に満たされておらず、常に時間と追いかけっこしているような感覚に陥って焦っている。そこで全く違った環境に身を置いてみると案外精神的に安心している自分に気づいたのだった。疑いもしなかった自分の「幸せ」な生活のモデルが必ずしも絶対的なものではないということを自覚した瞬間だった。自分で自分を一つのモデルに縛り付け、気づかないうちにそれ以上考えるのを放棄していたのだった。

私はネパール行きを決めた際に、この村でのステイを心待ちにしていたが、その理由を自分でもはっきりとは理解できなかった。今振り返ると、マイダン村には日本での生活では得られない癒しの要素が存在していたのだった。1つには、住んでいる人達の温かさだった。現地の言葉を理解できない私に対して、伝わらずとも話しかけ、挨拶してくれる村人たちは無条件によそ者の私たちを受け入れてくれただけでなく、おもてなしの精神に溢れていた。2つ目に、連絡取ることが全くできないことが大きかった。いつもアイフォンを持ち歩いていることで少なからず意識がそちらに向いていたが、マイダン村にいる間は全く使うことができず、鎖から解き放たれたような気持ちになっていた。つまり、自分が図らずも享受している物質的な幸せから一旦距離を置き、違った生活様式を持つコミュニティに飛び込んでしまうことで、その贅沢から一時的に解放され、実は自分もそれを切に望んでいることに気づく機会を得たのだ。

これは OK Baji さんの言葉を借りれば、文明と心の豊かさの綱引きといえる。物質的に豊かすぎると、ない方に不満を感じることが多くなりがちになる。一方で、小さいことに幸せを感じることができると幸せを感じる回数が自然に多くなるために幸せな気持ちでいる間が長くなるという話だ。これは実際にマイダン村滞在のあとに訪れた他の町のホテルでシャワーや洋式のトイレがあることに対してメンバーの何人もがとても幸せな気持ちになったことからもわかる。

ただ、私が幸せだけを感じることができたのは、あくまでも3日という短期間であったからという可能性もある。山奥の村ならではの問題点が数多くあった。警察も病院もなく、一度けがなどしようものなら何時間もかけて山間の道をゆっくり進んでいくしかないという不便さは、心の豊かさがどうこうで済まされる話ではない。

おそらく日本での生活に慣れ親しんだ私が、こうした「非日常」を「日常」にするのは容易なことではない。大切なのは、彼らの「日常」をこちら側の視点で勝手に「非日常」にしてしまうのではなく、「日常」の延長線上で心の豊かさを失わずに彼らの目線で発展していくことだ。

「ネパールがもたらしてくれた出会いと幸せ」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科二年
志牟田まりな

何が決め手かわからないけれど、NJEP への参加を決めたのは私の人生において大きな 成功の一つになったことは間違いない。私は周りの参加者のように途上国に対する意識が高いわけでもなく、国際協力にも無縁な私だったので、特別な目的意識を持っていたわけではなかったが、ここでの 10 日間は実に濃かった。もともと私は人と関わることが大好きな人間 なため、今回のメインが国際交流であったことはとても参加しやすい要因だった。人との関わり、またネパールでの 10 日間が私の心にもたらしてくれたものは今の私の考え方や生 活に影響を与えている。

ネパールでの 10 日間、多くの人や景色など様々な出会いがあった。シャムロック学校、マイ ダンの村の子供たちをはじめ、ポカラにステイしていたバックパッカーの人々、もちろん NJEP メンバーの全員。彼らの笑顔は底知れぬ美しさで、温かくて私に本当の「幸せ」とは 何かをつくづく考えさせた。これについては、またあとで触れる。そして、はじめて自然の偉大さを本当に感じさせてくれたヒマラヤ山脈やバス移動の窓の向こう側に見える山々や夕焼けなど、多くの自然との出会いがネパールにあった。これらは日本でも感じられることなのかもしれない。しかし、生活を朝から晩まで共にしている仲間と不安や期待の繰り返しの日々の中で、「完全ではないネパール」だったからこそ、物理的な豊かさ以外のところに目が行き、感動する心 が敏感になり、その美しさも日本にいるとき以上に濃い感動に結びついていたのだと思う。

先述したが、NJEP メンバーでもよく話し合う「幸せ」について。人間は死ぬまで「幸せ」 を求めて生きていく。決してこれが絶対に幸せなんだ！！と述べるつもりはないし、様々な 見識や経験を積むこと

で考え方も変化していくものだと思う。しかし、幸運なことに、私はたった 10 日間 ではあるが、「幸」について毎日考える機会をネパールで得た。OK バジさんの言葉を借りれば、「無いものに目を向け始めると、不足に対して文句を言うようになり、幸福感が薄れる」ということを身を持って感じた。「足るを知る」という言葉があるが、まさに私は我々日本人のような先進国に住む人々において薄れている感覚をネパールで自分の中に落とし込めたと思う。「自然がこの地球にもたらしてくれる一瞬一瞬の美しさに敏感になり、それを体と心で目いっぱい感じること（大袈裟ではなく）。 」また、「 自分のいるコミュニティや毎日訪れる出会いに対して感謝の気持ちと幸せを感じること。」挙げればきりがないが、この2つの感覚を自分の中で大切にするようになったことで、物事をものすごくシンプルに捉えられるようになり、自分の気持ちにより一層向き合えるようになった。もちろん複雑な問題は山ほどあるが、自分の身の回りで起きている1つ1つの小さなことへの感動や感謝ができるようになり、自分の生活がさらに明るくなった。この感覚を覚えたとき、私はなん だかぞっとしたのを覚えている。この感覚を薄れさせたくない。

綺麗なものや便利なものばかりを追い求めるのではなく、そこら中に溢れているようで少ない人間くささ、人としてのアツさが自分は大好きなんだということを知れた。そして、そこからあふれ出てくる真の楽しさや仲間と共に生み出す「心に残る幸せ」「心の底から湧き出てくる幸せ」を大切に、自分の近い目標とその先にある目標のためにさらなる体験をす るべく、自分から一歩踏み出していきたい、今回 NJEP に参加したように。そのように日々 過ごしていった結果、気づいたら、人として女性として成長していたらいいなと思う。こう思えたのもこのツアーのおかげだ。ここで出会えたすべての人に感謝してもしきれない。

来年の春には、ラオスにて職業技術教育の分野でのフィールドワークが決定している。NJEP と はまた一味違った刺激を求めて行ってきます！！

～ネパールという地で～

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科2年
中村渚

"Dhanyabaad."

「ありがとう」を意味するこのネパール語は、今でも私の口から無意識のうちに出てしまう。それくらい強烈な印象を与えた約 2 週間のスタディーツアーを通して、自分が何を学び、考え、感じたのかということを、正確かつ自分の言葉で人に伝えることがいかに難しいことかをひしひしと感じる日々を過ごした。今回のツアーのテーマは学生交流。ネパールと日本の学生が 10 日間共に過ごす中で、異文化理解や同世代の横のつながりを大切にしていくことが最終目標であった。私にとっては初めてのアジア。海に囲まれた島国の日本とは異なり、山に囲まれた内陸の国ネパールで、自分の目で見たこと、自分の鼻で嗅いだもの、自分の口で味わったもの、自分の耳で聞いたこと、自分の手で触ったもの、その全てがネパールでどれもが私にとって初めての連続だった。「人間が人間らしくいられる場所」と言うには大げさにしても、私にとってはまさに非日常の日々であったことは事実である。このレポートではそのいくつかを紹介したい。

まず、なんといってもネパールの街。これは、どの街に行ってもそれぞれ異なる魅力に溢れていた。ネパール到着直後に滞在した首都のカトマンズは、日本にいては体験することがないであろうほどの吹き荒れる砂ぼこりと、脳裏にこびりつくくらいの鳴り響くクラクションの音に包まれた街だった。建物同士も近く、まさに「ごちゃごちゃ」という言葉がぴったりな場所だった。一方で、ネパールでも特にオリジナルなライフスタイルが人々の生活に今なお息づいているマイダン村では、日の出とともに活動し日の

沈みとともに休まるという生活を送っていた。村の長老たちのおしゃべりや家畜の鶏の鳴き声で目覚め、外に出ると、寝起きの体をキーンと包み込む朝のさわやかな風と太陽の光に包まれるだけで心が豊かになっていくのを感じた。そして街全体をゆっくりと時間が流れているポカラでは、映画のセットのようなハイカラな雰囲気を醸し出している店や雄大なヒマラヤ山脈を一望できるスタンドなど、個人的に最も好きな街だった。目の前に広がるヒマラヤ山脈を一望しながらのサンライズは、まさに格別だった。島国に生まれ、海から名前の由来を受け継ぎ、両親の影響でマリンスポーツばかりやっている私にとって、普段から山に行く機会が少なかったため今まで山に対しての興味がさほど湧いていなかったが、今回生まれて初めて雄大なヒマラヤ山脈を目の前にして、なにか話しかけたくなるような、自分が心から相談したくなる兄のような存在に思えた。毎回海に行ったときは波の音を聞いて心を落ち着けて物事の整理をしているが、山に対して前述のような気持ちに自然となれたことには自分でも驚きだった。

日本では忙しさに駆られて過ごす日々。自分が思う「素の生活」をこのツアーの中で過ごせていた。個性的な雰囲気を持つ街、と普段では気づくことができないかもしれない自然への感情を発見できたネパールという場所は、そこに行くたびに自分に何かを問いかける、もしくはヒントを見つけられる場所となるかもしれない。目に見えない小さな幸せを、心から喜び愛おしいと思える日々を過ごせた今回のスタディーツアー。きっとここでの経験はこれからの私の生活の中で、ふとその時の自分に何かしらのサインとなるものになるであろう。そう気づいた瞬間が、今回得た学びが活かされたことを意味するのかもしれない。

「求めよさらば与えられん」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科2年
阿部　充紘

ネパールで何をしたのか。報告書という時、そこに書くべきものは僕自身にあったのか。考えた結果→なし。

たった 2 回目の渡航にもかかわらず、一歩引いたところでメンバーを支えていようといき過ぎた経験者面をした私は、そこで起こる事にただ浸り、流された。私の姿勢は、「そこにネパールがある。ネパールの文化や世界観があり、ネパール人がいる。」それだけだった。どの瞬間にも、新しく刺激的なものがあるのにそれらは自分からは隔絶された世界の中にある玩具でしかなかったのだろう。

そしてこうしてネパールでの経験を振り返ると、今年のネパールで何も出来なかったことを知り愕然とする。それはきっと上述のように私の虚栄心によって作り出された、いき過ぎた経験者面によるものだろう。一歩引くあまり、そこにあるリアルを食べて自分の血肉とすることをしなかった。

このスタディツアーはなんだったのだろう。もちろんリーダーを任された私はその役目に対する自らの未熟さ、一方である程度の手応え、それらが今後の課題となっていること、幸福と発展の意味についての考察、自らの生活への懐疑などを得ることはできた。つまり全くの手ぶらで帰ってきたわけではないが、それでもなおネパールでのあの十日間を思い出すたびに掴み所のない虚無感？迷い？恐怖？のような感情が自分の中を曇らせるのを感じていた。

私は特別な何かを望んでいたようだ。それも「自分の価値観を変えてくれるような壮大な何かをネパールという刺激に満ちた世界なら無条件に与えてくれる」と、無意識のうちに考えていたようなのだ。い

き過ぎた経験者面をして目の前で起こっている出来事の味だけを確かめて吐き出していた。全く馬鹿馬鹿しいだろう。自分を大きく変えるまでのものが空からポっと落ちてくるはずもないのだ。

「求めよさらば与えられん」という言葉があるが、全くその通りだと思う。求めるとはこの場合ただ指をくわえて待つのではなく、自ら進んでいくことを言う。自ら進んでいかなければ欲しいものは手に入らないのだ。

やや逆説的だがこのことを考えてみると、このスタディツアーでは何も学ばなかったということから学べたのだろう。這いつくばって、しがみついて、悩んで、そうして欲しいものは手に入るのだろう。そうして目の前の出来事から何かが得られるのだろう。八月の私はかなり怠け者だったようだ。

そうしてみると私が欲するその漠然とした何かはきっと日本のそこら中に転がっているのかもしれない。「求める」かどうか。

また、ネパールに渡ってみようと思う。その時は本当に「求めて」みようと思う。

「私には何ができるのだろうか」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科2年
東　未久

はじめに、私は１９年間生きていた中で、まだまだ知らない世界が広がって いるとしてもそれがどこまで続くのか、広さはどれくらいなのか全く想像がつかなかった。そんな小さな世界で生きてきた私にとって、今回のネパールは、限りなく無限に世界を広げられ、綺麗なマイダン村の星空の下、同じ世界にこんなにも日常からかけ離れた素敵な世界が広がっているのかと心が踊り、身が 震えた。そんな１５日間のネパールの旅を振り返るにあたり、私の心の中に強く残ったことをこの場にて報告させてもらう。

ネパールでは様々な場所に行ったが、中でも印象的だったのは、マイダン村であった。この場では語り尽くせないほどの、私にとっては衝撃的な世界がそこには広がっており、人々の生活、食事、学校、家、どれも実際に訪れてみなければ分からない想像もつかない世界であった。

そんな土地で滞在をし始めて二日目、私たち日本人が鯉のぼりプロジェクトをしていた時ことである。絵の具の管理を担当し、屋外で手に絵の具をいっぱいつけていた私は、汚れた自分の手を見 つめ、「汚いから後で洗おう。」と考えていた。

その時のこと、ふと私の手よりもはるかに小さな手が私の手の上に舞い降りてきてきた。そして私の名前を可愛い声で呼びながら、手を取り、その小さな手の小さな爪で私の手を掻きはじめたのである。少し痛くて、こそばゆい感覚に驚いたが、みるみるうちに私の手についた絵の具が取れていった。私の大きな 2 つの手に小さな手が８つもあり、取り合うように私の手を綺麗にしてくれ、反対に小さな爪には絵の具の汚れがついていく。私はされるがままその小さな手を見つめて、子供たち の手が動き回る感覚を感じていた。

しばらくして小さな手の動きは止まり、私の手を撫でながら「beautiful」といって くれた。手を撫でられるという慣れない感覚にまたこそばかったが、青空の下、 私は自分の手を太陽の光にかざしてみた。ところどころに絵の具が残っており、爪には土が詰まっている。日本では「洗ってきなさい」と言われる「汚い手」な のであろうが、子供たちが掻いてくれている感覚が抜けていない私の手は、普段の手よりもずっと綺麗に輝いて見えた。

この子たちに私ができることは何であろうか。その時、初めて真剣に考え、答えを求めた。し

かし、授業でも国際協力を学んできたはずなのに私にはすぐ思いつかなかった。国際協力というものは、私たち先進国といわれる国に住む人が途上国の人々に何かをしてあげるものだと考えていたが、今回のネパールでは、私が子ども達からしてもらってばかりであった。必ず何かをしてあげなければならないと強い思いに駆られたが、何をすべきなのか、何をしたらベス トなのか、全くわからなかった。もしかしたらそこに、正解はないのかもしれない。

マイダン村から去った後、私のジーンズのポケットに子供たちにプレゼントとして持って行った風船が３枚渡しそびれて入っていた。もしこの風船 を渡せたら３人の子ども達に楽しみを与えられたかもしれない。しかし、渡しそびれた風船はその役目を果たせず、私のポケットの中でゴミとなってしまった。その３枚の風船をみて、私には何ができるのだろうか考え続けたが答えはそう簡単には見つかりそうになかった。だからこそ、私はこれからも学んでいかなければならないことがたくさんあり、学ぶことができ、考え続けられるのであろう。もしかしたら、そのことが子ども達の幸せを考える上で、国際協力 を学ぶ上で一番大切なものかもしれないと思った。

「私は私でしかない」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科1年
小笠原杏佳

ネパールとタイでの暮らしは、毎日が驚きと発見の連続で、心臓が止まるくらいドキドキとワクワクでいっぱいだった。何をするにも“自己判断”で、“自己責任”そして、常に危険と隣り合わせだった。正直、私はこのスタディ・ツアーに参加して、明確に何が変わったかはわからない。だが学んだことは数え切れないほどある。

その中で最も大きな学びは**「私は私でしかない」こと**に気づけたことだ。そのことについて以下に述べる。

私には、小学生の頃から国際協力をしたいという夢がある。それを実現するために、留学、高校受験、大学受験、プロジェクトなど様々なことに挑戦してきた。だが「そもそも私はなぜ国際協力がしたいのか」という根本的な問いに自分で答えることができないでいた。また優柔不断で、周りの目を気にするし、自信がない自分が嫌いだった。そして、このままでは誰からも認めてもらえず、大切にしてもらえないと思い、変わりたかったし、変わらなければならないと思っていた。

今回のスタディ・ツアーを通して、私にとっての国際協力の意味を知りたかったし、これをきっかけにして自分の嫌いな部分を変えたかった。しかし、実際に参加して様々な経験をしたり、メンバーと交流し

たりしたが、国際協力することの意義は見出せすことはできなかったし、私自身が大きく変わったと感じることもなかった。この観点では、「分からないし、変わらない。」それが自分の出した答えだった。

一方で、自分は誰かの笑顔が大好きなこと、自分のことは嫌いではないこと、そして感謝すべきことがたくさんあること、に気づいた。また、今までは批判されたり、傷つけられたりしない「誰もが思う普通」でいることが最も良いと考えていたが、ネパールやタイでの様々な体験を通じ、誰もが思う普通など存在しないことに気づかされた。さらに、私たち人間には「自分には価値があり、特別な存在となり、認められたい、愛されたい」と思う自己承認欲求があるが、私にはその欲求が高いという新たな発見をした。

以上のことから、他人にどう思われるかを気にしすぎず、自分のやりたいと思うことをまっすぐに、全力で取り組んでいきたいと考えられるようになった。今の私には、自分の目標を実現させるのに必要な十分な知識や経験も、時間、資金も足りない。しかし、だからこそ自分には成長の伸びしろがあり、絶対にやってやる！というハングリー精神を強くもてるのだと考えている。正直、完璧だと思ったら、それ以上の成長はないと思うし、また、自分のやりたいことをはっきりと伝えなかったり、遠慮したりして謙虚になりすぎては何も変わらない。

人生はストーリー作り。これからは、やりたいと思ったことは、とりあえず挑戦し、成功したり失敗したり試行錯誤しながら必死に努力し、思わず手にとって読んでみたくなるようなページを日々作っていきたい。私は今回のスタディ・ツアーを通じ、これから生きていく上で大切なことに気づかされ、大切な仲間たちに出会うことができた。お世話になったすべての皆さんに心から感謝したい。

「見つめる」

上智大学総合人間科学部
教育学科
１年　笹川千晶

今年の８月、約２週間、私はネパールスタディーツアーに参加した。ご縁があって今回のツアーに参加することとなったが、初めはネパールが地図上でどこに位置するのかさえ定かではなかった。だが、ネパールで過ごすうちにどんどんネパールに惹かれていった。何を得たのかときかれると、正直答えに困ってしまう。スタディーツアーだからといって、何かを得なければいけないという決まりなどはないと私は思う。ただ、そこに行って暮らすことで必ず自分にとって大切な「何か」は感じることができる。かの有名なサン•テグジュペリがいった、まさに、「本当に大切なことは、目には見えない」のだ。

私がネパールで感じた大きなものは、「愛」と「豊かさ」だった。ネパールには、ものの充足ではない、なにか他の幸せの視点が存在しているのだと実感した。そのことについて、ネパールでの日々を振り返りながら、この場をかりて伝えたい。都会で育った私にとって異国すぎるその国は、私を常に「考える」人間にさせた。「幸せ」とは？「生きるとは」？「愛」とは？難題を突きつけられたときその答えはいつも、ネパールにあった。カトマンズは様々なものであふれ、立ち止まることさえ許されない。一瞬たりとも鳴り止まない車のクラクションはそこにあるすべてのものの指揮者のようで、私の思考を疲れさせるには十分すぎた。だが、同時に居心地の良さを感じた。複雑なものに溶け込むことに、自由を感じたのかもしれない。ネパール人メンバーとの共生にも戸惑った。異なる背景を持っている人とうまく折り合いを付けていけるだろうと思っていたが、価値観や文化の違いを前に無気力になってしまうことさえあった。そこから生じる問題を「文化の違い」と簡単にまとめてしまうことはできる。だが、それはあまりにも浅はかな考え方なのではないか、と実際に異文化の背景を持つ仲間と共生する中で実感した。人はそれぞれ違うのに、お互いの違いを享受することは苦手だったりする。それは人間である以上、様々な感情があるわけで、仕方のないことであるが、大切なのは、自分は相手に対して先入観やある決まった価値観を抱いているということの認識を前提にそれらの人と向き合うことだと思う。そうすることで、相手を受け入れる自分の中の袋に余裕を与えてあげられるのだ。そして、異なる部分ではなく、共通した部分また、差異から得られる新しいものさらに、相手の持つ良さや魅力に気づくことができるのだとツアーを通じて実感した。

心が豊かなことは、気持ちが豊かなことである。東京の騒がしく、めまぐるしく、そして自分中心な街で生活をしていると、時の早さに追いつかなくなってしまうことがある。心の安らぎ、小さなことへの気遣い•感謝も気づかぬうちに消え去っていく。だからこそ、人は「豊かさ」を求め、外へ出るのかもしれない。少なくとも、私はそうだ。3 日間ホームステイをしたマイダン村での日々は特に「豊かさ」に溢れていた。朝はニワトリと子どもたちの声で目が覚める。小さなドアを開けると、太陽の光と子どもたちの笑顔が真っ暗だった部屋を照らす。そして、お母さんが温かいバッファローのミルクとビスケットを届けに来てくれるのだ。それを食べたら、歯を磨きに、顔を洗いにいく。山の絶景を見渡せるその場所は私のお気に入りの場所だった。ついつい太陽に向かって伸びをしたくなる。植物になったみたいに。目を覚ましてからの時間をこれほどまでに味わい尽くせたのはいつぶりだろうかと思った。確かに村での生活は過酷であった。だが、それ以上に魅力的であり、美しかった。私のホームステイ先のお母さんは「愛することに理由はない。ただ、そうしたいと思っているからそうしているだけ」と言った。私たちは「愛」について考えるとき、どうしたら愛されるのかについて考える。「愛する」よりも「愛される」ことを望む。「愛する」ことは時に大きな辛さを背負い、時に負担になってしまうと私たちは知っているからだ。しかし、「ただ、そうしたいからそうしているだけだ」と素直に真っすぐに言ったお母さんの心に涙がでそうになった。私は「愛する」人になれているだろうか。

このツアーで最も自分にとって大きかった出来事がある。それは、生きているブタの首を切ったことである。これを聞いた人は一体どう思うだろうか。残酷だと思うだろうか。たしかに、残酷である。生きているブタの首を自分の手で切って殺すなんて生きている中でするとは思っていなかった。だが、実際、私はなんの躊躇もなくそれをした。小さなナイフでブタの首をきったときのブタの悲鳴や感触や感覚は今でも鮮明に覚えている。生き物の「生」と「死」を自分の手で、目で感じ、見たのだ。これこそ、文明の格差だ。あまりにも、原始的なやり方だった。かわいそうと嘆く声もきこえるが、今日もどこかで私たち人間が生きるために動物が殺されているのだ。「生きるとは、こういうことなのだ」と痛いくらいに突きつけられ、考えさせられた。私がしたことは残酷だ。だが、あの頃の私にとっては必要な経験だった。自分の強さを知った。そして、弱さを知った。

ネパールスタディーツアーを通して、人の温かさを知った。これ程までに最高のメンバーに恵まれている自分が幸せだった。どこまでも「愛」に満ちた人たちなのだ。そして、自分の無力さも知った。私は無力だ。ちっぽけだ。だが、こんな私にもできることがある。そう教えてくれたのもこのツアーだ。知らないことは怖いこと。だが、知らないことを知ろうしないことはもっと怖いことだ。この世界は無情で、自分らしさなど守りきれない、なんて生きづらい世界なのだろう、そう感じることもある。だが、そんな世界にも、見つめれば、たしかに「豊かさ」は存在しているのだ。だからこそ、私はそんな世界には負けず、強い私でいたい。そして、今の私がこれから歩く未来はきっと誇れるものにしたい。「真っすぐな幹に、美しい花は咲く。」そんな真っすぐな自分で在り、移ろいやすく、儚く、ささやかなものを捉え見つめることのできる、そんな豊かな心でいたい。本当に大切なものはその先にある、と私は思っている。

「私にできること」

東京家政大学こども学部１年
北原　咲希

写真を見返すたび、心の奥がぎゅーっと締め付けられる。キラキラ笑顔の子どもたち、エネルギーに満ちた仲間たち、生を感じさせてくれた美しく荘厳な自然、クラクションの鳴り響く道路、目を背けたかったあの光景…。ネパールでは、当たり前に続いている日常であるのに、一つひとつが“思いで”に変わってしまうことが怖くてたまらない。

「私にできることってなんだろう」ネパールでも常日頃考え続けていたことだ。目の前にある、変えていかなければならない現実と、変わってほしくない現実とが入り混じり、結局、私は無力であり、自分にできることはないのかも知れない…。そんな結論に至ってしまっていた。

そんな私を変えてくれたのが、村の子どもたちである。このツアーで唯一胸を張っていえるのが、誰よりも子どもたちと思いっきり遊んだということだ。この村の子どもたちの為に、自分だったら何ができるか。そんな苦しい問いと無力感から逃れ、全てを忘れたくて無我夢中で遊んだ。シャイな彼らが一瞬見せる笑顔と、賢そうな眉をクイッとあげて私を見つめる瞳がまた愛おしくて、時間と我を忘れ、一緒になりはしゃいだ。

子どもたちの無邪気な笑顔を見つめているうちに、ふと気づいた。これでいいのかも知れないと。私は、「自分にできること」を支援という枠組みの中で、形式的な型にはめ込もうとしていた。正解なんてないのだとわかっているつもりであったが、無意識のうちに求めてしまっていた。答えがないことは、確かに辛いことだ。しかし、目の前の子どもを笑顔にできなくて、何の支援ができるのだろうと考えると、これこそが今の自分にとっての最高の支援の仕方であって、それが始まりなのだと思う。言語の違う子どもたちとどのようにコミュニケーションをとったらよいか悩んでいたが、一緒に同じ目線になって遊ぶことが、こんなにも言語の壁を越え、心

の距離を縮め、お互い笑顔になれる魔法なのだということをも、彼らが教えてくれた。素敵な笑顔と、大切なことを教えてくれた子どもたちに、心から感謝したい。

また、私はこのツアーで、幸運にもネパールの CBRO（Community Based Rehabilitation Organization）の施設を特別に見学させて頂ける機会を頂く事ができた。障がいをもつ子どもたちの通う Day care center である。

私は、大学で特別支援教育を学んでおり、途上国の障がい児教育に大変興味がある。しかし、途上国の障がい児支援を本やインターネットで探してみても、あまり情報はなく、どういう支援を行っているのかというよりは、障がい児・者の状況や、問題点が多く語られていた。なので支援団体や施設があっても実際にどのような人が関わり、支援や教育をしているのか全くわからなかった。

今回施設に実際にお邪魔し、一番感じたことは、とにかく先生方があたたかい、ということだ。途上国の障がいを抱えている人に対しての周りの目線は、ひどいものである。そんな思い込みが脳裏に張り付いていたが、CBRO の先生方は、一人ひとりの能力を把握し子どものしたい、やりたい、という主体性を尊重し、向き合っているように思えた。

もちろん、全ての人が同じ考えではないし、支援の仕方や環境に問題点や改善点も見られたが、それ以上に、障がいをもつ子どもにかかわる人々のあたたかさを感じられたことが、実際にお邪魔させて頂けたからこそ感じられたことであると思う。これまで、脳裏にあったネパールのマイナスイメージが完全になくなり、希望に変わった。私が見たのは彼らの生活のほんの一部であるが、もっともっと関わり彼らの未来を一緒につくりたいと本気で思った。

最後に、これらの経験は、ただただ、「行きたい！」「分からないので、全て感じて見てきたい！」という私の思いに、関先生を始め、青年海外協力隊の隊員さんや元隊員の方、ネパールで実際に活動されていた方…多くの人がたくさんのアドバイスやサポートをして下さり、実現できたことである。初めての地で、不安なく充実した時間をすごせ、私のこれからの人生に、大きくつながるような学びを得られたことは、多くの方々の協力があってこそ経験できたことで、決して自分ひとりでは得られなかった。だからこそ、支えてくださった方々の思いを無駄にはしたくない。これらの学びを“思いで”にするのではなく「今、自分にできること」「これから自分がしていきたいこと」を常に考え行動し、繋げていけるように、これからも学びを深めていこう。

「心の壁を崩す」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科2年
関　愛生

２０１６年夏のNJEPスタディーツアーは、生涯忘れることの出来ないほどよい思い出となった。高校時代の一年間をネパールで過ごした私にとって、ネパールという国は人生の原点とも言える場所だ。中学３年時、高校受験前の最後の夏、受験勉強に勤しむ周囲の人々をよそにネパールに旅行に出かけ心底ネパールに惚れ込んだ私。帰国したその日に両親に頼み込みネパールの高校に進学することを認めてもらった。今考えてみると、当時の私はとんでもない決断をしたと我ながら驚いてしまうが、そこでの経験こそが私の人生を大きく変えた。

毎日長時間停電し、水不足で水道がほとんど使えなかったりなど、日本で生まれ育った私にとって生活面で苦労したこと多々あったが、それ以上にネパールの人々と毎日一緒に過ごし、語り合う中で多くのことを学ばせてもらった。毎日が忙しく時間との戦いである日本とは対照的に、ネパールでの生活は緩やかで時間に追われることはほとんどなかった。そんな環境だからか、ネパールにいると私は毎日のように人生を振り返り、自分自身についてゆっくり考えることが多い。不思議なことに、日本では全く気づくこともなかった私の心の奥底にある想いにふとした時に気付けたりするのだ。そういった意味では、私にとってネパールという国は自分に一番正直になれる場所で、だから日本に帰国してからも毎年のように通っているのかもしれない。

大学生になってからは、スタディーツアーの企画者、そして一参加者としてネパールを訪れている。私たちの企画するスタディーツアーの最大の特徴は、日本の大学生と現地の学生との交流に最も重きを置いているということである。ネパールに到着した日から帰国日まで、約２０人の両国の学生から成る私たちのチームは、ツアー中はどんなことがあっても一緒に過ごす。朝起きる時も、ご飯を食べる時も、真剣に話し合う時も、冗談を言い合うときもいつも一緒だ。ここまで学生交流を重視しているスタディーツアーだからこそ、仲間の存在が何よりも重要となる。私にとって、企画段階から中心的に関わるのは大学生になってから2度目だったが、幸運なことに今回も最高の仲間に恵まれた。日本側のメンバーは、メンバー募集開始からなんと2日も経たずに決まり、高校生から大学生まで驚くほどに個性豊かなメンバーが集まった。ネパール側からは、壮絶な受験戦争を勝ち抜いてきた優秀な大学生がメンバーとして顔を揃えていた。

ツアー初日、ネパールの空港で初めて顔を合わせた両国学生は、最初はぎこちない雰囲気になるかと思いきや、空港から宿泊先に向かうバスの中ですでに、みんなで日本やネパールの歌を歌って大騒ぎするほどになっていた。そんな最高の仲間たちと過ごした2週間で出来た思い出は星の数ほどあるが、その中でも私にとって一生忘れることのないだろう思い出をここに書きたい。

ツアーの最中、日本人学生の一人が誕生日を迎えた。その時私たちは、2日間をかけて辿り着いた山奥の村でホームステイをしていた。その日の朝、村の公民館に集まってきたメンバーのひとりが今日がその日本人学生の誕生日であること、そして何かしらの方法で祝いたいということを誕生日である本人にバレないようにみんなに伝えた。すると、ネパール人学生たちが「ネパールで誕生日を迎えたのだからネパール式の誕生日の祝い方をしたい」と言い出し、リーダーシップをとって私たち日本人に指示を出しながら壮大なサプライズパーティーの準備を進めてくれた。誕生日である本人にバレないように、両国の学生が一体となって何時間も夢中になって準備したそのサプライズパーティーは、絵に描いたように上手くいき見事大成功に終わった。その瞬間、日本とネパール両国の学生の間にあった壁が一気に崩れ、私たちは本当の意味で一つのチームの仲間になれたと感じることができた。

全く違う環境で育ち、全く違う文化や習慣を持った人同士が心の底から打ち解けられるようになるのは簡単ではない。今回のツアーでは両国の学生が出会ったばかりの頃から一緒に歌い、多くのことを話して表面的には仲良くなったように見えても、やはり最初は、お互いの違いを受け入れることが出来ず衝突することもあった。それでも長い時間を共に過ごし、様々な喜びや苦悩を共有することで初めて「心の壁」を崩すことができたのだと私は考えている。**サプライズが成功したあの感動の瞬間にこそ、計り知れない価値があるのだ。一度心と心で繋がった友情は、国境や時間を超えて繋がり続ける。**

日本で生活していると、グローバル人材という言葉を聞かない日はない。ではグローバル人材とは何か。私の知る限り、日本ではグローバル人材＝語学力と単純に結びつける風潮があるように思う。確かに国際社会で活躍する上で語学力が重要であることは間違いない（例えば僕の場合、ネパール語を介せることのメリットは計り知れない）。しかし、語学力だけでは不十分である。私のこれまでの経験からグローバル人材になるために最も重要だと思うことは、**世界の人と触れ合う時にその人と自分との差異を感じ取り、受け入れ、その上でその人を尊重できるようになるということ**だ。それが出来て初めて、相手の心に入り込み互いの気持ちを共有できるようになるのだと思う。 私を含め今回のツアーに参加した両国の学生は、このことを見事に体得出来ていた。そして今回の経験は参加者にとって、今後、国際協力、ビジネス、政治、どの道に進むにしても大いに役立つだろうと信じている。

私自身は、今回のツアーを通じ、企画者の観点でいくつかの改善点も見出したので、次回に向けて構想を練り直し、さらにレベルアップしたプロジェクトを実現したい。SNS で世界中の誰とでも情報交換できる今の時代だからこそ、世界で活躍することを志す多くの若者にこのツアーの存在を知らせ、参加してほしいと願っている。そして世界中の仲間と切磋琢磨しながら、よりよい世界を目指し自分たちにできるアクションを起こし続けていきたい。

＜Vietnam-Japan Exchange Project＞

VJEP2016 活動報告書

私たちは８月 14 日から 27 日の２週間にわたりベトナムに行き、ホーチミン市とダラットという村で、日本ベトナム両国大学生 10 人と、５人のベトナム人学生コーディーネーターの計 25 人で学生交流活動を行いました。私たちの活動は、４月からオンライン上での会議やプレプログラムミーティングなどを行い、プログラムに向けてすべて学生の力で準備活動をしました。その際、ツアーのテーマとして 2030 年に達成目標を目指す、国連によって昨年採択された SDGs（持続可能な開発目標）の 17 項目あるうち、以下の２つのゴールを軸に活動をしてきました。

NO.16　平和と公正をすべての人に

NO.17　パートナーシップで目標を達成しよう

私たちの活動の３つに焦点を当てながら、これらの目標と絡めて説明していきます。

～枯れ葉剤の被害者グエン・ドク氏による講演～

NO.16“平和と公正をすべての人に“に基づき、枯れ葉剤の被害者であるグエン・ドク氏のお話を伺うことで戦争と平和について考える貴重な機会をいただきました。この目標のもと、「持続可能な開発」に向け、平和で包括的な社会を目指すことが定められています。ここにある「包括的」は障害者も健常者も同じように、一人の人間として活躍できるような平和で公正な社会、そしてそれを達成するための法制度の構築を意味しています。ドクさんのお話の中では、身体的な不自由を持っている人が仕事に就き、社会で活躍することが難しいという現状が触れられ、若い世代である私たちがこの目標達成のために何ができるのか深く考えさせられました。

～ダラットでの伝統文化継承策プロジェクト～

続いて、ダラットという村にメンバー全員で赴き、伝統文化の継承策を立案する VJEP のメインプロジェクトを行いました。このプロジェクトは、この活動は NO.17 “パートナーシップで目標を達成しよう“を意識し、最終的に大学での発表をゴールとして活動を行い、事前活動として、日本メンバー・ベトナムメンバーそれぞれで自国の伝統産業やその状況について調査し、相互に発表を行いました。現地では日本・ベトナム混合チームでグループに分かれ調査し、各チームでの議論をプレゼンにまとめました。調査では、ダラット村内の、伝統産業をビジネスとして成功させている工場とさせられていない工場を何種類か訪れてインタビューなどを行いました。この経験から、私たちは将来を担う世代である私たちが今後の社会的課題を他国の人と話し合い解決していく「グローバル・パートナーシップ」の意義について学び、将来の世界の国際協力体制の強化に貢献することができました。

←グエン・ドク氏と日本人メンバー

←ベトナムメンバーの通訳を介して伝統繊維工場で働く女性にインタビューをする日本人メンバー

←フィールドワークの成果発表後、他大学のベトナム人学生を交えてさらに議論を進める様子

～本音トーキングで深まったベトナムメンバーとの友情

プログラム中盤、ダラットへの移動中のベトナムメンバーが乗せてくれたバイクで起こったほんの小さな事故によってベトナムメンバーとの間に大きな亀裂が入る事態となってしまい、本音ミーティングを急遽開くこととなりました。結果的に、このミーティングが私たちのパートナーシップをより強固なものにしたと言えるのですが、文化や価値観そして言語の壁は私たちが想像する以上に大きなものでとても越え難いものでした。プログラム序盤はうまく協力体制を築けたと感じていた私たちですが、実はこの学生交流はただの上辺だけの関係性で見かけ上の友情を築いていただけだったのです。私たちはこの本音ミーティングを通してお互いに思っていることすべてを包み隠さず全て言葉にし、相手の学生に伝えました。パートナーシップの意義を見つめ直すとともに、その難しさにも直面し、だからこそ築けたこの友情は一生モノであるのだと私たちは思います。

←バイク事故が原因で両国学生に入ってしまった大きな”亀裂“

←本音ミーティングのおかげで本物の友情を築くことができ、パートナーシップを育むことができました。

《参　加　者　報　告　書》

「オープンマインドになること」

青山学院大学文学部フランス文学科１年
諏訪部　茉莉

中央が私、諏訪部茉莉

私はこのツアーに関して不安しか抱いていませんでした。不安材料はたくさんありました。日本人メンバーとの勉強会への出席率が低いため、自分以外のメンバーとモチベーションや知識の差を感じていたこと、メンバーとの仲もそこまで深まっていなかったこと、初めての東南アジアで環境や食事に適応できるか、体調は壊さないかなど様々な不安を抱えたまま、成田空港に向かいました。

ツアーが始まって私は日本にいるとき以上に内向的になってしまいました。慣れない環境、英語しかコミュニケーションのツールがないこと、ベトナム人メンバーのフレンドリーではあるけれど多少ついていきづらいノリなどに圧倒され、初日からメンタルがボロボロになり、一人で日本に帰ろうと思いもしました。

この報告書で取り上げたテーマは、オープンマインドになることですが、私は元来自分はオープンマインドな人間だと思っていました。中学高校では様々な意見を聞き、自分の意見と違うからといって拒むことはしなかったし、学校の方針上、他人の意見を尊重することの大切さを身につけてきたつもりでした。また、様々な文化や宗教には偏見を持っておらず、適応できる自信がありました。そのため、向こうに行ったら向こうに合わせる、ベトナムに行ったら絶対にアウェイな状況下に置かされるから覚悟しておいたほうがいい、という関先生の言葉について、何の不安も抱いてはいませんでした。しかし、このツアーを振り返る中で、私に欠けている部分は、コミュニケーションにおけるオープンマインドネスだと気が付きました。そして、日本では感じることのなかった感情がなぜ生まれたかと思い返してみた時、日本では、自分にとって嫌なことは無意識に排除して自分と関わりのないものにしていたからだと分かり

ました。しかし、このツアーでは、まる2週間同じメンバーと過ごさなければいけないし、途中で帰ることも逃げ出すこともできないため、自分の中から排除することはできず、自分にとって嫌なものに立ち向かわなければいけませんでした。

私にとってその点でオープンマインドになるにはとても時間がかかりました。英語だけではなく、移動のバスの中で始まったちょっとしたゲーム、ランチ中の遊びなど、少し苦手だと捉えてしまい普段は避けがちなことも、現地ではそのような態度を取っていると、ベトナムメンバーに疲れているのか、眠いのか、と悲しそうな顔で尋ねられ、このままではだめだ、向き合わざるをえない、と思う時が何度もありました。その度、自分には英語以上に乗り越えなければいけない高い壁があるのだと感じました。

コミュニケーションにおいては特に、あまり英語を得意としていないけれどベトナムメンバーととても親しくコミュニケーションを取っている日本人メンバーを見た時、コミュニケーションにおいて重要な事は言語ではなく、相手を受け入れてどんな手段を取っても相手と接し続けることだと感じました。少しでもネイティブに近い英語を話そう、相手が言っていることを一発で聞き取ろう、と考えてしまっていた私は自分の英語力の無さに消沈するだけで純粋にコミュニケーションをとることができなくなっていたように感じます。

無理だ、いやだ、と拒んでいたものを受け入れられることができるようになってきたのは、ベトナムメンバーと仲が深まった後だと思います。その国の人と親睦が深まるにつれ、その国のことを受け入れられるようになったのかもしれません。不思議なほどに吹っ切れ、またフィールドトリップ先のダラットからホーチミンに戻る頃にはベトナムの環境に適応できるようになっている自分がいました。

実は、私はダラットに移動した後でもベトナムメンバーとの仲が深まったとは思っていませんでした。初日にショックを受けた英語でのコミュニケーションの難しさを思い出しては、どうせ喋れないなら喋らなければいいという内気な考え方になってしまっていました。初日からこのようにネガティブになっていた私を救ってくれたのは日本人メンバーと関先生でした。自分の英語力の無さ、自信が持てないこと、ベトナム人メンバーとうまく話していけないこと、ベトナム人とコミュニケーションを取れない腹いせのようにベトナムという国自体を素直に受け入れられないこと、早く帰りたいということなどたくさんの愚痴を

聞いた上で彼らは意見をくれました。正しい英語で話そうとしているから自分は英語を話せないと思っているのではないか、単語だけでもいいからもっと構えないで話してみてはどうか、というアドバイスや、言葉や環境の壁に直面して辛い思いをするのは、大抵みんなが通る道、それを早く感じたということはみんなよりも早くにこの状態から抜け出して楽しめるかもね、というお話を頂き、ここで逃げ出さずに辛いけれど、もう少しふんばってみようと思い直すことができました。

多くの助言を受けて、コミュニケーションにおいて自分の態度を変えてみる内に自分の中で何かが変わった気がしました。だんだんと精神的にタフになっていく自分を感じることができたし、少しずつこのツアーを楽しむことができていることを実感することができました。しかし、本当にベトナムメンバーとの距離が近くなったのはやはりダラットでの生活を通してからだと思います。ダラットではホーチミンのように昼間だけの活動ではなく、修学旅行のように朝から夜までずっとメンバーと共に生活しました。しかし、夜になるとシャワーから眠るまでの間、ベトナムメンバーと日本メンバーで別れて話してしまいがちで、お互いがお互いの母語を使って話すため、完全に二つのグループに分かれてしまうという事態が起こっていました。また、ある夜、日本人とベトナム人が完全に分離してしまうことがありました。これを機に、日本人とベトナム人が考えていることを言うミーティングのようなものが開かれ、少しシリアスな状況で話し合う機会が与えられました。日本人のシリアスになりすぎてしまう国民性とベトナム人のフレンドリーな国民性におけるギャップもあり、この話し合いは未消化に終わった気がしました。しかしこれ以降、私たちはなるべく英語で話すよう、また、少しでも分からないことや、心配なことがあればベトナム人メンバーに聞くように心がけるようにしました。小さい心がけではありましたが、だんだんと国民性を超えて交わることができるようになりました。

後になってあるベトナムメンバーから言われたことは、日本人はシリアスになりすぎだ、ベトナム人はもっとフランクに思ったことを話し合いたいと思っている、ということです。私は、国を超えることで最も難しいことはお互いの国民性を理解することだと感じました。どんな言語ツールを使ったとしても、また、どんなトピックを話しているのだとしても、国民性が違うことでそれぞれ受け入れ方が異なるため、そこに差が生じてしまい、お互いが何かを我慢しあってしまうことがありました。このことは、日本人だけのツアーでは起こりえなかったことでしょう。なぜなら私たちはコミュニケーションのツールに困ることもないし、相手を理解することに頭を悩ませる必要もないからです。実際、ベトナムメンバーが言っていたことを言葉通りに受け止められていたかはわかりません。私たちは母語ではなく英語というお互いにとっての外国語を使うしかコミュンケーションをとることができなかったので、細かいニュアンスは母語のように理解することは不可能でした。しかし、だからこそ表情やボディーランゲージを駆使して伝えたり理解したりの繰り返しだったのだと思います。そしてこれはこのツアーを通さなければ考えることもなかったことです。最初の頃は本当に辛かったこのツアーが最後には別れを惜しむほど大事なものになったのは、自分が心を開いて自分で作っている壁を取り除き、ベトナムの環境に身を任せたからでしょう。どんなに不安でもどんなに逃げたくても、日本人メンバーと関先生の支えがあったことで私は目を背けず、コミュニケーションにおける弱い部分を少しずつ変えることができました。日本に帰ってきてからまたオープンになっていたものが狭まり始めているのを感じます。同じ人種、同じ言葉を使う人々との中ではそうなってしまうのも仕方がないとも思います。しかし、この経験を通して、やはり日本を出て自分

の全く知らない土地に行き、知らない人に出会うことは自分を本質から強くしてくれるものだと学ぶことができました。私を変えてくれたこのツアーに本当に感謝しています。そして、このツアーで学んだことをこれからの大学生活、また、人生において反映していきたいです。

「表面的なつきあいを超える国際交流って難しい」

立命館アジアパシフィック大学
アジア太平洋学部　環境・開発学科1年
町　ひなた

もともとAAEEという団体をなにも知らぬまま、リーダーの吉田梨乃から誘いを受けて参加することになったこのVJEPプログラム。スタディーツアーと一言聞いていてイメージしたものは、団体で現地観光をし、それを通して文化に触れ、歴史的背景などを調べて回るというものだった。しかし、実際に参加してみるとその内容は私の予測とは大きく異なり、2 週間のプログラムのあまりの濃さに驚いた。同時にそれはとても有意義な時間となった。ベトナムの道路をバイクで移動することも、ベトナム戦争の枯葉剤被害者ドクさんとお会いしたことも、クッキングコンテストを買い物からするところも、山奥での突然のキャンプも、何もかもが予想外で予想以上のもので、ベトナムの人々を身近に感じることのでき本当に貴重な経験になった。ベトナムも日本も過去に大きな戦争を経験したという点では共通しているが、ベトナムでは日本とは違い、都市部でありながら後遺症を患った人々を街中でよく見かけ、戦争の爪痕までもすごく身近に感じた。

ツアーが始まり前半、プログラムは順調に進んでいた中、自分はベトナムメンバーと言葉は通じたはずなのに、なぜかもう一歩近づけそうなところがあり、最初から親しく交流する他の日本人メンバーとは違う感覚で一線置いて接していた。そのことが心の中でわだかまりとなっていた。今までの海外での生

活やAPU（私の在学する立命館アジアパシフィック大学）での生活を通して、他のメンバーよりも同年代の外国人と関わる機会は長くあったが、そういった経験をたくさん積むほど、逆に日本人同士でいることの安心感や、心の奥底にひそむ外国人に対する薄い壁の存在に気づくようになっていた。それ故、短期間で文化と言語の違いを乗り越えて打ち解け合うことは困難であるという意識が、経験的に私の心に根付いていたのだと思う。初日からパーティーのように騒ぎ合い、日本人メンバーとベトナムメンバーがお互いに楽しく関わってはいたが、どこか表面的な部分があるのではないかと自分は思っていた。現に、お互いに何とか打ち解けようと元気に振る舞うことに互いに疲れる様子も見られ、バスの中では必ず同国人同士で座るなど、どこかで国同士で固まってしまう瞬間があり、英語を使うことで疲れを感じることもあった。

ダラットでのバイクツアー

プログラムの５日目、フィールドトリップで滞在したダラットでのバイクの小事故がきっかけとなり、それまでため込んできたお互いの蟠りや不安が一気に表面化した。「言っても状況判断や考え方も文化によって違うから、それは言っても意味がないんじゃない？」「きっとこれは文化的な違いだからしょうがない」「相手を不信な気持ちにさせるかもしれない」などと悠長なことを言っているわけにはいかない状況になってしまった。そしてその夜に、「本音で話す」という条件で両国メンバーによる大ミーティングが開かれ、涙を流すメンバーもいれば、揉めて不機嫌になり出すメンバーもいる中、納得するまで話し合った。

この話し合いは私にとって大変貴重な文化学習の場となった。なぜならば、ベトナム人メンバーの発言の中に「ベトナム人だからきっとそう考えるだろう」という予想を見事に外されることが何度もあったからだ。このとき私は、自分がこれまでベトナム人をひとくくりにステレオタイプ化してしまい、一人一人の人間性にまで心が及ばなかったことに気付いた。事故を起こしてしまったフンさんは、「ベトナムではよ

くあることだろうからベトナム人はそんなに大事だと思っていないだろう」という私の予想とは反対に、本当に落ち込んで、「もう私を一生信用なんてできないよね、本当に申し訳ない」とひどく自分を責めていた。また、ダー君が自分のバイクの運転が下手だとジョークを交えて言いいながら運転するのも、後ろに乗っていた日本メンバーを楽しませ、不安を与えないようにするためだったという。私の周りにはこれまで沢山の外国人の友達がいたが、このとき以上にお互いの文化、価値観を超え深く意見や思いを交わしあえたことはなかった。この夜のみならず、この二週間を通して理解したのは、異国間のメンバー同士で交流し、打ち解け合う中で「文化が違うからきっと考え方も違う」という予想や警戒心をもって関わることが、逆に余計な壁を作っていたのだということだ。

英語でのコミュニケーションについても考えさせられた。英語の会話というだけで自分と相手の間に壁を感じて疲れてしまっていたのは、英語コミュニケーション＝「勉強」「国際交流」という硬い認識であったからではないかと思うようになった。また、他の日本人の前で英語を喋るということの緊張感も違和感の原因だったということに気付いた。ただ、いずれにせよ、英語でのコミュニケーションばかりだと私はやはり疲れる。

そんなとき、私の疲れや緊張を解いてくれたのが歌や踊りやちょっとしたゲームだった。歌ったり踊ったりして自分の疲れを解放している内に、ようやく関先生にツアーの前に言われたことの意味がわかってきた。

実は、このツアーへの参加を決めた4月の段階では、このプログラムは勉強をするためだと思っていたため、みんなで一緒に踊ったり歌ったりする時間があるとは思っていなかった。だから5月に私がAPUで踊ったベトナムダンスをフェースブックで投稿した時に、それを見た関先生から「このダンスをベトナムでやってほしい！」というコメントが届いたときには、「この人は何を言ってるんだ？」と思った。関先生は日本出発当日にも空港に着くなり私を呼び出し、「大人でも、どんなに偉い人でも、お互いが知り合い、仲良くなり、心を許すようになるには踊ったり歌ったりして笑い合うことが必要。それはコミュニケーションなんだ。だから他のすべてのメンバーにそれを理解し感じてもらいたい。」とおっしゃった。関先生は、私がダンスが得意であることを知っていたから、私を個人的に話してくれたのだろう。でもベトナムに来る前には、いまいち実感が沸かなかった。

しかし、驚いたことに、大議論の夜にあれだけ深刻に互いの問題点を指摘しあっていた私たちが、翌日から踊りの練習を騒ぎながら始めた途端に、前夜のことは忘れてしまったかのように、皆の笑顔が増え、心理的な距離感があまり感じなくなっていることが明らかに見て取れた。

「踊りの力ってすごい！」

私は、このプログラムを通じて、私がこれまでに取り組んできたダンスやチア・リーディングの活動の意義をより深く実感することができた。

唯一カメラを見ているのが私、町ひなた

さらに、プログラム中、まほ、まり、爽太など、英語が得意・不得意に関係なしに、深くベトナムメンバーを理解し仲良くなった日本メンバーを目の当たりにした。彼らを見ていて、異国間同士の言語や文化の違いはそれほど大きな問題ではないのだということを感じた。むしろ言語や文化が違うから、という警戒心をもって彼等と関わっているようでは、いつまでも相手を理解することなどできないし、表面的な付き合いで終わってしまうのだと思った。実際このプログラムの雰囲気は良く、普段は日本語で話すメンバーの前でも英語を使うことに対して恥ずかしいという感情や、間違えてはいけないというプレッシャーはなかった。それほど日本人のメンバーも積極的で社交的な人が多く、明るく包容力もあった。なのに私は最初から自分で無いはずの壁を作っていたのだ。

関先生がおっしゃっていた、「本当にごちゃ混ぜに国や言語なんて関係なく混ざり込んでしまうほど打ち解ける」ということは今回のプログラムを通しても、私にはまだ出来なかったのかもしれない。表面的なつきあいを超える国際交流って難しい。しかし、プログラムの最後には、再び一緒にみんなで旅行に行きたいと話しが盛り上がるほど、お互いに仲良くなっていた。

最後に、全ての企画をベトナムの学生コーディネータが事前に足を運び調査をしながら準備をしていたということに感動し、彼らの実行力は本当にすごいものだと思った。このプログラムを通して本当にたくさんの気づきと学びがあった。今回このプログラムに参加できたことは本当に価値のあることだと思う。企画してくれた、関先生、ベトナムのコアメンバー、そして梨乃に感謝したい。

「ベトナムで知った自分の貧しさ」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科1年
櫻井爽太

右端が私、櫻井爽太

今回の VJEP は私にとって初の東南アジア訪問であり、プログラム前から不安と期待が入り混じっている日々を過ごしていた。いざ、プログラムが始まってみるとコミュニケーションツールが英語であるというストレス、朝早く、夜遅いというスケジュールや長距離の移動という怒涛の日々を過ごし一種のランナーズハイのような、疲れすぎて逆に空元気という日々であった。そんな中でわたしは様々なことを学んだ。しかし、その学んだことの大多数は海外だから学べたことというよりはむしろ日本にいても学べるが、海外というある種の異常な状況下にあるからこそより深く学ぶことができたことであった。また、海外だからこそ学べたことは無意識のうちに日本と比較して認識したことだということに日が経つにつれ気付くようになった。私たちの価値基準は日本での生活の上に成り立つものであると強く感じた。

今から私がこのツアーで学んできたことを記述していこうと思う。第一に笑顔の大切さである。ベトナム、日本それぞれの参加者がコミュニケーションを取る際に用いられる言語は英語であった。しかし、参加者(特に私を含めた日本人)の中には英語を不得手とするものが数名いた。しかし、英語が苦手であったとしても私たちはベトナム人と良好な関係を築いていた。それができた要因はやはり笑顔が大きいと私は思う。私の好きな歌の歌詞に「いま世界の共通言語は、英語じゃなくて笑顔だと思う」という歌詞があり、今まで私はその歌詞をポエム気質なキャッチーな歌詞でしかないと思っていた。しかし今回のプログラムで笑顔の大事さを認識した。もし英語でうまく言葉が出てこず支離滅裂なことを言ってしまったとしても、笑顔で接すれば敵意を持っていないことは相手に伝わる。また、相手が英語を話せない人の場合であってもほほ笑めば微笑み返してくれる。これは言語よりもっと原始的な人間の行う普遍的

なコミュニケーションでありどんな言語よりも早くかつ、深く交流することができることを可能にしている。アイデンティティの全く違う者たちが笑顔一つで距離を縮められるとは、とても素晴らしいことではないだろうか。無駄のない究極のコミュニケーションは笑顔であると強く感じた。

次に私が感じたのはアイデンティティの異なる相手の立場になって物事を考えることの難しさである。これは本当に私にとって難しいものであった。というのも、バイクでの小事故をきっかけとして開かれたベトナム、日本のメンバーがそれぞれの本音を話すミーティングで、一方が当たり前であり、慣れっこであるというものが、他方にとっては全くの未知のものあるいは非常識的な物であるということがあるというのを話し合いの中で感じることがあった。先ほども述べたが人間というものは己の価値観を日々の生活の上で成立させ、それに当てはまらないものに対しては違和感や嫌悪感を感じる。現に私もミーティングの中で違和感を感じることが数度あった。国際協力や国際貢献といったフィールドで物事を考える際にはもっと複雑なアイデンティティに関する問題がおこるのだろうと感じ、多国間で一枚岩になることがいかに難しいか、学生レベルの国際交流で相互のすれ違いが起きるというのだから国際機関のステージではより困難を極めるのであろうと改めて認識した。

そして、次に書く内容がこの報告書のメインになるのだが、私は裕福さ、貧しさ、先進、途上とは果たして一体何なのかを今回のプログラムを機によく考えるようになった。

日本は確かに、経済的な面で見た場合、先進国である。しかし、ベトナムはいまだ発展途上国という扱いである。そしてプログラム参加前の私はそのことを念頭に置いてばかりいた。発展途上国の現状を見るとかそんなことを考えたりしていた。しかしそれはあくまで国という評価基準に基づくものでしかない。その国にどういう人々が住み、どのような生活、光景が広がっているかなどというものは先進国とか途上国だとかという枠組みからはうかがい知ることはできないのである。

ベトナムの私たちが交流した学生たちはとても優秀であったし、向学心もとても強かった。果たしてそんな彼らに先進国だの途上国だのというものは何の意味があるのか？またそれと同様に先進国や途上国というものは何の意味があったのか？確かに町にはストリートチルドレンや物乞いがおりその面では日本との違いは見受けられた。しかし、現地の学生と交流する際にその国を評価基準としたものは全く何の意味もなかった。むしろそんなことを意識してプログラムに望んだ自分の心はとても貧しかったと思う。このような国際交流のプログラムはどこの国とどこの国の学生が交流するかという“国”に意識が行きがちだが、英語を介してしまえば国籍なんかは関係ない一個人同士の交流である。そこ

には先進国、途上国というクライテリアは意味をなさないということを強く感じた。優秀な人々はどの国にも存在している。しかし、そのような人々も一歩国から出れば○○人という括りにひとまとめにされてしまう。そんな現状がある中で自分は国籍や民族というものを超えた個人をしっかり見なくてはならないと強く感じた。

今回のプログラムは私にとってカルチャーショックの旅だったと言える。バイクでごった返す町、あまりにフレンドリーなホテルのボーイ、水シャワー、etc.…しかしそんな中で過ごした日々は具体的に私の何を変えたかと言われれば難しいが、しかし確実に私の何かを変えた。人とより深く触れ合うこと、言語の壁の克服。いかにそれらがこれからのグローバル化社会で重要なことであるかが肌で感じられたプログラムだった。

自分の貧しい内面としっかり向き合っていこうと思う。

「ベトナムに行ったことで私の中に起こった変化」

明治大学農学部農芸化学科
2年　三角真穂

左が私、三角真穂

このプログラムに参加して、自分の中で変わったことは大きく3つに分けることができる。
1つ目は、自分の英語力の低さを痛感し、英語を学ぼうと心に誓ったことである。
2つ目は、自分の中の途上国に対してのイメージの変化である。
3つ目は、見事に破壊されてしまった過去の私のスローガンである。

1、英語力について

実は、私は（今となっては恥ずかしい限りなのだが）このプログラムに参加する前、途上国の人というともっと貧しくて、能力が低くて・・・というのを失礼ながら想像していた。しかし、このプログラムに参加して、私の考え方が全く間違っていたことを知った。もちろん、今回出会ったようなベトナム人とは違う劣悪な環境で暮らさざるを得ない人々も多いということは知っている。ただし、途上国＝貧困、低い教育レベルというのは明らかにステレオタイプ的な誤った見方であるということを身に染みて感じた。

まず、このプログラムに応募したベトナム人が200人もいたというところから驚いた。合格倍率実に20倍。どれだけレベルの高い大学生が来るのだろうと思い、恐怖心を抱いていた。さらに、自分は英語も話せない日本の普通の学生なのに対して、一緒に行く日本人メンバーも英語が話せる人ばかりと知っていたからだ。私は恐怖心のあまり、事前にベトナムのコーディネーターに英語がうまく話せないと伝えて予防線をはった。また、関先生にも日本語の話せるベトナム人をプログラムに参加して頂くようお願いした。

実際、現地に行ってみて私の予想は当たった。空港を降りて、ホテルまでの移動のためにバスの前で待っていてくれたベトナム人を見つけた時、とっさに目立たないように日本人の間に隠れた。しかし、友好的なベトナム人はバスに乗るときに私に話しかけてきた。何を言われたのかよく分からなかった私はあいまいに笑ってごまかし、せっかく会えたベトナム人メンバーにも失礼な態度を取ってしまった。

私は今回のプログラムの間、いつも英語が話せないというコンプレックスを抱き続けて過ごした。自分のパートナーになったベトナム人の Nao には、いつも私がパートナーで申し訳ないと思っていた。他の日本人メンバーは自分のペアのベトナム人と普通の会話を楽しんでいるように感じたが、私はそれができなかったから。

一番英語が話せなくて悲しかったのは、夜にホームステイ（という名前のホテル）でした本音ミーティングである。モーターバイクの件や日本人の本当の気持ちは隠す点などについて話し合うという、いわゆる国際交流の真骨頂のような場であった。しかしながら私は、案の定皆が何を話しているのかよく分からなかった。日本人メンバーが日本語で何度も解説を挟んでくれたおかげで内容の半分くらいは理解できたと思うが、発言者やその発言に関係のある人の感情などをタイムリーに理解できなかった。自分にとって、深い部分での話し合いにおいて、言語の壁というのは本当に大きな障壁だと思った。英語が話せる日本人メンバーでさえ英語での議論は難しいと言っていたし、その上外国人であることで、その人自身がどういう考え方をする人なのかを判断する材料が少なすぎた。私には外国人と接した経験はほとんどないし、言葉も通じないから雑談レベルの会話さえ正確に理解はすることができない。

国際交流に興味がある以上英語が避けて通れない道だとは知ってはいたが、英語が話せないなら海外に興味があるなんて恥ずかしくて言えないほど、言葉というツールがどんなに大切なものか痛感した。通じる言語がないのに国際交流なんて論外である。たしかにパッションがあれば、と

かボディランゲッジでいける、なんてことを言う人もいたけど、その人達は絶対に言葉が通じなくて悲しい思いをしたことがない人たちだと思う。相手のことを理解したいと思ったり、相手に感謝の気持ちを伝えたいと思ったりした時、必要なのは言葉のツールだった。

実際、私は帰国前、お世話になったバディの Nao や、日本語が話せるからと私をサポートしてくれた Tu さんに自分の気持ちをきちんと伝えることができなかった。私が英語をうまく話せないのに、Nao がいつも私のことを気にかけてくれていたことやそのお陰で輪の中から離れずに済んだこと。また、Tu さんがいつも私のことを写真に撮ってくれて、最終日に私の写真ばかり写ったアルバムをプレゼントしてくれたこと。それがどんなに嬉しかったかを「Thank you」の一言とハグだけでしか表現できなかった。伝えたい感謝の気持ちはもっともっとたくさんあったのに。自分がプログラム中ずっと感じていた疎外感などいろいろな気持ちを伝え、その上であなたのこんな行動のおかげで救われたんだよ、とちゃんとお礼を言いたかった。

これから私はできる限り英語を学び、いつかこの時の自分の感情や感謝の気持ちをしっかりと彼らに伝えたい。

2、途上国に対してのイメージの変化

2つ目の途上国のイメージが変わった理由は、私が日本で見かける優秀な人々と優劣がつけ難いような優秀なベトナム人とたくさん出会ったことや、現地のベトナム人の感覚が日本人の私に似ていたことにあると思う。例えば、去年旅行でベトナムに来て私が最初に思った、トイレが汚いなどという感情は彼らベトナム人も持ち合わせていたし、路上で果物を買った時に中が少しでも変色していたら食べないで捨てる、といったような日本人の私と特に行動が変わらないことをしている彼らを見て、当たり前で失礼な考え方だとは思うが、途上国に住んでいるからと言って衛生状態が悪いことに慣れているわけではないんだ、という事実を知った。プログラムに参加したベトナム人が比較的裕福だったということもあるかもしれないけれど、そういったベトナム人がどうやらたくさんいるらしいと知ったことで、私の途上国の見方は大きく変わったと思う。

今までは、資料や日本の人の話しか聞いたことがなくて、実際に見ていなかったから現実をきちんと知らなかったのだとは思うが、曲がりなりにも国際交流に興味があると言っていたのに、実な現実を何にも知らなかったんだ、ということを思い知らされた。援助とか支援だとかいう言葉をよく聞くけれど、今回のプログラムに参加したベトナムメンバーに関して言えば、いわゆる「支援」をする要素はゼロだったように思う。国外留学など人生において大切だけれど死活問題ではないような支援は必要なのかもしれないが、物質的支援などはしなくても普通の生活ができる人々であった。逆に私は英語が話せないから、ベトナムにいる私は何かの役に立つ、というよりは周りの人に支えてもらってなんとかやっていける、という弱い立場だったように思う。

3、破壊されてしまった過去の私のスローガン

このプログラムに参加する前の私は、「食文化の国際交流を通じて、途上国の子供たちに世界のことを知ってほしい」と本気で考えていた。しかし、今となっては本当に恥ずかしいかぎりだ。例

えば、一緒に行った日本人メンバーは大学の学部まで「国際」や「外国語」を選考し、国際問題に真剣に学んでいる人たちばかり、彼らに比べると私には国際問題や外国語に本気で取り組む時間も覚悟も足りないし、何よりそんな生ぬるいことを言う前にクリアしなければならない関門が山のようにあると感じた。

まず、コミュニケーションが取れる外国語を習得する→次に支援が必要な人の生活をこの目で見て、世界の子供がどんな状況なのかを理解する→さらに子供の教育について学んで→…。そこまでして自分が本当に食文化の国際交流をしたいか、といったら、結局は「心に国境のない世界の実現」などという過去の私のスローガンは単に偽善でしかなかったように思えてきた。そんな簡単にできることじゃない！

世界とつながることは楽しいと感じるから、少しでも関わっていきたいと思うけれど、実際に見たわけでも感じたこともないのに、そんなに大それたことを言っていてはいけないと思った。去年もベトナムに旅行に行ったが、今回のプログラムで見たベトナムとは全く違っていた。実際にベトナム人と共に生活をしないと、ベトナムのことを知るのは不可能なのだと思った。観光で来ても、それは観光用の表面的なベトナムでしかなくて、実際に現地の人々が何を食べてどんな生活をしていて、何を考えて、というのを知ってこそ、ベトナムが一体どんな国なのかを知れるのだなと思った。

日本に戻ってきて日常に戻ったけれど、ベトナムに行く前の自分がどんな風に考えていたのか忘れてしまうほど濃い体験を夏にして、私の生活は心の意識レベルの中では大きく変わったと思う。これからどんなことをしていくのは、その方向性はまだ決まっていないが、きっとベトナムに行く前の自分とは違う選択ができるように思う。

「一員という意識と、学生交流の今後の可能性」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科2年
吉川　夕葉

はじめに、この AAEE 主催のプログラムは、アジアに住む学生同士の交流促進を目的として企画されたものである。それぞれ同じ人数の日本人学生とベトナム人学生が寝食を共にし、ベトナム国内を移動しながら2週間交流をはかるという内容である。さらに今回は「伝統産業を残すべきなのか、またどのように継承していくべきか」というテーマで、プログラム終盤に予定されていた発表に向けてリサーチを重ねる、というグループワーク課題が課されていた。

今回私がこのプログラムに参加した理由は、前回のネパールでのプログラムに参加した際に学生交流の大切さを実感し、もう一度体験したいと思ったため、そこから派生して人間同士のつながりに関心を抱いたため、の2点である。本稿ではこれらの動機に基づき、私がプログラムを通して考えたことについて述べたい。

まず、プログラム中に考察したことの一つが、社会の動きと人間の関係性についてである。プログラム中の様々な出来事から、人間同士のつながりで「社会」が生み出されるということを実感したため、このことについて考察した。プログラム中の出来事というのは、例えばメンバー同士で踊り、チームの雰囲気を盛り上げる、という場面があげられる。この場面において、当事者である各メンバーは踊るか、または手をたたくなどして盛り上がっている雰囲気作りに貢献する必要がある。メンバーである限り雰囲気作りに貢献することは義務であるといえるだろう。しかし誰かが盛り上げようと決めたわけでもなく、雰囲気を盛り上げなければならない状況になったわけでもない場合、この盛り上がっている雰囲気作りは自然と生じたものであり、いわばメンバー間で暗黙下での合意や目的の一致がなされ、それぞれが自発的に雰囲気作りに貢献している状態であると言える。そしてそれぞれの貢献する行動が積み重なり、雰囲気が盛り上がるという結果およびチーム内の雰囲気の変化へとつながっている。

つまりメンバーは、雰囲気作りへの貢献という義務を、義務だと認識することなく自然と行動に移していたことになる。また、メンバーとしての義務を果たしているということは、自分がメンバーの一員であるということを自覚しているともいうことができる。さらにその義務を無意識的に果たしているとすれば、無意識のうちに自らがメンバーの一員である認識していると考えられる。

このような一連の流れを社会という大きい規模に置き換えると、まずこの社会の中に生き、労働や消費活動などによって少しでも社会に影響を与えている私たちは、社会の一員であると言える。社会の一員である私たちは、社会の動きに対して、社会を動かしている一員であるという自覚をもち、当事者意識に基づいて社会を動かす活動に参与する義務がある。社会の動きはチームの雰囲気作りと同様に、社会を動かすための行動や、方向性が決められているわけではないため、一員である私たちの行動の積み重ねによって成立している。そして、当事者意識をもつということは、その社会で起こった出来事を自分事として捉えなくてはならない。チームの動きに比べ、社会規模では自分には関係ないと感じられることが多いだろう。規模が大きくなるにつれて自分事のように捉えにくくなるのである。その社会という規模がより大きくなった例が、世界全体である。どこかの国で戦争が起きていても、自分事のように捉える人は少ないだろう。日本国内でさえも、東京に住んでいる私たちにとっては北海道で起きた地震はどこか他人事のように感じるのではないだろうか。

しかし、なぜチームの動きだとほぼ無意識のうちに自分事のように感じて、チームの動きに貢献することができるのだろうか。この、規模の大きさによる差や自分事のように捉えることが難しくなる境界線は一体どこであるのだろうか。おそらくその境界線の位置は個人差があると推察できるが、その境界線の幅は経験によって変化するのだろうか。私自身がチームの動きにメンバーとして貢献するということが苦手であると感じているため、このプログラムを通じて他のメンバーが無意識に行動できている様子に強い関心を持った。これらの疑問に対する自分なりの結論を見出し、改善していきたいと思う。

上記のようなことを考えたのには、もう一つ理由がある。それは、ネパールでの学生交流活動とベトナムでの学生交流活動において、私の関わり方や見えてきたものが全く異なったことである。ネパールでの活動では、私は学生リーダーという立場であり、チームのことを主体的に考えていた。しかし、ベトナムでの活動ではいちメンバーとして存在し、振舞う必要があり、このメンバーとしての行動に非常に

苦難した。メンバーであるという意識を持つことにより、ネパールでの活動時よりもチームを内部から見つめることができたことは私にとって有意義な体験であったが、半年に及ぶ活動では、結局うまくメンバーとしてチームに貢献することができなかったと思っている。しかし、メンバーとして持つべき意識に気づけたことは、私がこのプログラムで得ることのできた大きな学びの一つであったと思う。

次に、グループワーク課題をこなしていく上で感じたことについて述べたい。

最初に述べた通り、今回のグループワーク課題は「伝統産業を残すべきなのか、またどのように継承していくべきか」というテーマに沿って、実際に伝統産業を現在も行っている工場などを見学した。リサーチ活動については省略するが、リサーチ後にグループとしての結論を出すために行った議論を通じて感じたことがある。それは、日本でもベトナムでも、考えている解決策は同じものである、ということだ。世界的には、日本は先進国、ベトナムは発展途上国であるという認識がされている。しかし、このテーマについて議論する際に出てきた意見は、ほぼ教科書通りであると感じてしまうほど同じであった。ここで考えたのが、先進国に住む学生も発展途上国に住む学生も同じことを思い浮かべるほどその解決策が普遍化しているのにもかかわらず、未だに解決されない問題が残っている、ということである。そうすると、その解決策はもはや良い解決策であるとは言えないか、もしくはその解決策をうまく実行できていないかのどちらかであると考えられる。グループ内だけではなく他の大学の学生とも議論する機会があったが出てくるのは同じ意見であり、新鮮味がまるでないように感じられた。その解決策についてさらに深く議論することでより良い解決策を見出すことができる可能性もあるため、今後の学生交流活動では、他国の学生同士が意見を交わす、ということに焦点を絞りすぎるのではなく、ある一つの問題や解決策についてより深く一緒に考察していくことが重要となるのではないだろうか、と考える。そうすることで、世界的な問題に対するより良い解決策を見出すことができるのではないだろうか。

これらの考察をまとめると、私は今回のプログラムを通じて、ある一員としての意識や社会に対する義務への気づきと、今後の学生交流活動ではより深く発展した議論が重要であるという2点を学び得ることができた。今回のプログラム終了後も社会の一員としての行動や、世界の一員である学生同士の交流の可能性について考えていきたい。

「このプログラムで得られたこと、必要だったこと」

中央大学商学部商業貿易学科2年
森　雄大

　このプログラムはほとんどの人がお互いを全く知らない状態で始まり遠慮した話し合いから始まると思いきや、皆積極的な議論を展開できるとても優秀なメンバーでした。
何よりも皆のすごいところは、厳しいスケジュールの中でも常に相手と話すときには明るく笑顔でいれることでした。一見他により重要なことがあるように思えますが、今回のプログラムの目的であった国際交流を行うにはそれは不可欠なことでしょう。そもそもこのプログラムでコミュニケーションをぞんざいにするようであれば国内の座学で事足りるからです。

ベトナム人メンバーも明るく積極的で、遊ぶ時と真面目にやるときの切り替えがうまく、何より日本人メンバーのことを常に考えてくれていました。ベトナムメンバーの人たちは普段は勉強で忙しいそうで遊ぶ機会が滅多にないそうです。そのため、プログラム中遊ぶ時には全力で楽しむ姿勢が見られ、限られた時間の中で如何にしてたくさんのことができるか、時間を有意義に使えるかを考えているのかがとてもよく感じられました。
そしてベトナムの国自体も活気に満ち、町中に溢れる車とバイクに建ち並ぶ海外企業のビルは圧巻で、その街中をバイクで走るなど興味を惹かれる楽しいことばかりでした。
しかし、予測していない事態が多く起きたこともありました。例えば思うように準備が進まなかったことや、現地での急な予定変更、ベトナムメンバーとの対立などがありましたが、この事態の中でも皆悩みながらも結果的には解決でき、トラブルは逆に良い成長剤になりました。予測不能の事態に直面した際の決断力や精神力は社会で求められる大切な能力の一つで、日常生活の中で

身に着けることはなかなか難しいと聞いたことがあったので良い機会でした。ただ、その事態をリーダーに任せきりになることが多く、リーダーの負担は許容量を超えるものとなってしまっていました。それの原因としてはメンバーとリーダーとの信頼関係がうまく創設されていなかったからであると考えられます。この原因の一因には自分にも大きな責任があります。団体としてすべき仕事を個人的なものとしたために不信感が生まれ、仕事を任せるに値しないと判断され仕事が個人に偏るという悪循環が生まれたことについては反省すべき点でした。
ところでその他にも自分個人の反省点がいくつかあります。一番の反省点は英語力の低さでした。ベトナムメンバーの人たちも国内で英語を勉強しているという点で自分と同一条件であるにもかかわらず、あれほどの英語力の差があることにベトナム人の学習意欲に驚かされるとともに自分の甘さに改めて気づかされました。他には前述した非協力的な姿勢は、途中まで自覚がなかった分余計に意識していかなければいけない部分だと深く反省しました。
しかしながら今回のプログラムはベトナムメンバーにとってはもちろんのこと、我々日本人メンバーにとって大変貴重な経験になったと思われます。それはただ新しい環境に置かれたからということではなく、例えば企業などの何かを得るために能動的に動く団体の中で行動できたからです。普段能動的に行動しているつもりであっても大学に通い、時給制で働いている学生には中々めずらしい機会であったと思います。このプログラムの特徴的な点は留学や学校などの様に金を払い「教えてもらい」にいくのではなく、自分で「学びに行く」ところにありました。実際には先生に学生には対応できない事態の際に、また自分たちの至らなさ故に起きた問題もフォローして頂きましたが、基本的に先生は責任者ではないという考えに基づき自己責任で行動することは、今までで初めての体験であった人もいるのではないかと思います。

結論として、今回のプログラムの様々な経験やアクシデントを通して学んだ中で特に重要なのは、礼儀、責任感、そして他者への気遣いなど社会に関わる人間としての基本的なことこそが、言語や文化の理解と並んで国際交流に必要だということ。それに尽きます。

「ベトナム学生交流で打破された私の先入観」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科１年
山森　美保

「ベトナム行くならボランティアのひとつくらいしてこいよ～」
これは私がバイト先の方に夏にベトナム行くと伝えた時に言われた言葉だ。なに言っているんだ、と思う一方でベトナムは途上国で先進国からの支援が必要であるという考えが先行する人は多くいるのだなと改めて思った。（たぶん私も心のどこかにもその考え方はあったと思う。）

１、先進国、途上国、支援

しかし実際にベトナムを訪問して思ったことは、「先進国」「途上国」と簡単には区分できない複雑さがあるということだ。確かに「途上国」としてのベトナムは、トイレの水洗機能がついていないところが多いことや、バイクの使用による大気汚染が進んでいるなどの問題を抱えており、街中で物乞いをしている人にも出会った。しかし、ベトナムで出会った学生たちは(トップ層の大学に通っていることも大きな要因ではあるが)、英語は私よりも確実に得意で、学習意欲も高く、その上仕事も早く、いわゆる「途上国」の「支援が必要な人々」ではないことは誰の目にも明らかであった。そして、ベトナムツアーが始まりほんの数日で「途上国の人々＝能力が低い、かわいそう」という固定観念が一気に崩れ落ちた。

右が私、山森美穂。左はダー君

またここで先進国からの支援という点についても考えさせられた。実際に「途上国」と言われるベトナムには、尊敬すべき素晴らしい伝統や文化があった。それを十分に理解しない人々が自国の発展した技術を(もしかし

たら自国の利益のために)途上国に押し付けるような支援はあってはならないと強く思った。その土地にあるもので、その環境に合わせたライフスタイルで暮らし、周りに大切な家族や知人がいて、それで幸せに生活できていること。これは、経済発展は十分に果たしたが、その一方で膨大な数の自殺者が生み出している日本と比べてどちらが本当の「幸せ」なのだろうと強く考えさせられた。ちなみに、ある統計によれば、人口10万人あたりの自殺者数は、日本が18.475人で、調査対象175ヵ国中18位。一方でベトナムは5,016人で125位だそうだ。(2012年の世界保健機関(WHO)のデータを元に世界ランキング国際各付けセンターが割り出した人数)[1]

2、他者への自己表現について

次に、自分の思っていることをどこまで相手に素直に言うべきか、という観点での学びもあった。私は中学・高校時代、主に部活動において自分の意見をかなり厳しく言っていたように思う。しかし大学受験期を経て言うことよりも考える時間が増えて、大学入学後は思ったことを素直に言うことは減った。本プログラム中に、自分も関わる互いの行き違いをきっかけに日本・ベトナム全メンバーが本音で議論する時間があった。その時も、ベトナムメンバーが嫌な気分をするなら正直に言う必要はないだろうと思い、自分から積極的に言葉を出さずにいた。自分の本音を言ったからといって必ずそれを相手が受け入れてくれて和解するとは限らないと考えていたし、またこのツアーを平和に終わらせたいという、ある意味の「逃げ」の姿勢が先行したことも否めない。ベトナムメンバーに真正面から向き合うことを避けたと言い換えることもできる。しかし、その後、周りの日本人メンバーから思ったことは伝えるべきと促され、結局自分の気持ちを正直に話した。案の定、伝えた日の夜は雰囲気が悪くなり、「あーあ、この後

のツアーどうなっちゃうのだろう。ここまで言う必要はあったのかな。」などと思った。ところが翌日自分のバディであるDaくんに呼び出され、二人きりで話し合った。すると彼は、前日の本音ミーティングの段階では表現しなかった本当の気持ちを直接言ってくれた。そして、そこから完全に打ち解けることができた。晴れ晴れとした気持になった。またプログラムの終盤では、Daくん以外のメンバーとも言葉や国籍の壁を超えて本当の友達になれたことが嬉しく、日本人メンバーと同じくらいにベトナムメンバーに対しても、心の底から出会えてよかったと思えるようになった。

3、挑戦心の大切さ

さらに、私はベトナム戦争で使用された枯葉剤の被害者、グエン・ドク氏の講演会の担当を任されたのであるが、これもとてつもなく貴重な体験であった。ドク氏は「ベトちゃん、ドクちゃん」として有名な方で、学校の教科書にも出てくるまさに歴史の証人である。今月10月には枯葉剤被害者代表として広島を訪問し、安倍首相と面談するほどの方だ。そのドク氏のご講演に先立ち、ご本人の前でプレゼンテーションをできたことは一生の財産である。実はこの任務は日本出国の直前に決まり、自分にこの大役を担えるのかという不安と、自分でやると立候補したからには絶対成功させたいというふたつの思いが交錯していた。ドク氏の講演会はプログラムの初日ということもあり、メンバーも互いに打ち解けてはおらず緊張感に包まれた中で行われた。私自身も直前までは緊張してがちがちであったが、いざプレゼンを終えると、今までにないほどの強い達成感を味わうことができた。この経験を通じ、積極的に挑戦することの大切さを学んだ。これまでの私には、自分の能力を自分で勝手に決めつけ、やれることを自分で狭めるようなことはしていたように思う。自分にもやればできる！このことは今後の生活の中でも活きていくことだと思う。

4、現場に行くことの大切さ

　私は高校生の頃からアフリカの児童労働問題を解決したいという夢があり、現在在学する上智大学総合グローバル学部に入学することを決意した。それは、「子供には子供らしく笑顔でいてほしい」という思いや「生まれた国が違うだけで、その子自身の人生における選択肢が極端に減ってしまうのは不条理だ」という思いから生まれる気持ちであった。しかし、ベトナムを訪れ日本より経済的発展が遅くとも、笑顔で幸せそうに暮らす人々を見たとき、現地に行ってそこで人々の実際に暮しを見ない限り本当のその国の姿は見えてこないし、メディアなどを通して先入観のように植え付けられてしまった「途上国＝かわいそう」という考えはぬぐえないのだと気づいた。

アフリカの中でも私はマラウイ共和国に関心がある。そこは世界最貧国の内の一つであるが、その一方でthe warm heart of Africaとの別名があるほど人々が親切で笑顔にあふれているという。今この国に行きたいと強く思う理由は決して「最貧国で衛生環境やインフラも整っていなくて可哀想だから」というものではなく、一人の人間としてその国の人々の暖かな人間性に触れてみたいと純粋に思ったからである。このように今までとは異なる視点から自分の関心のある地域、問題について目を向けられるようになったのも、ベトナムでの様々な経験があったからだといえる。

ベトナムから帰国し、一ヶ月以上がたった。今でもベトナムの土地の独特の空気感、におい、食べもの、そしてそこで出会った人々のことを写真や動画見て思い出し、戻りたいなと思う。これは、ベトナムの表層的な面だけでなく、現地の学生と二週間ずっと一緒に過ごせたことが大きな要因だと思う。もちろんうまくいかないこともあったが、それがあったからこそ単に観光旅行で行くのとは違う体験ができたのだと思う。

最後に、このような貴重な機会をくださった関さん、たくさん悩みながらもリーダーとして私たちを引っ張ってくれた、りのに心から感謝申し上げます。

「交流する」ということ

神奈川大学外国語学部
国際文化交流学科3年
夏坂　茉実

難民の支援をしたい。そう思ったのは高校1年生の時だった。たまたまテレビで観た難民キャンプの様子に、「何かしたい」と強く思ったのを覚えている。そして、それがきっかけとなり、大学に入学してからは途上国を訪れるようになった。メディアの情報だけでなく、現状を、現実を自分の目で見たいと思ったからだ。インドやカンボジア、フィリピンなど、ボランティアやスタディーツアーで訪れ、たくさんの現状を知ることが出来たし、たくさん考えさせられた。

しかし、そんな中で私はもどかしさを感じていた。支援をするためには、日本人の固定観念を払拭し、現地の感覚や常識に寄り添う事が必要になってくるが、私が関わってきたボランティアなどは外から見ることばかりで、生活には入り込

めないし、所詮お客さんであった。もっと生活に入り込んで、対等な立場で接したかったし、彼らの目線で問題に向かい合いたかった。

そんな時に声をかけられたのが、今回参加したベトナムのスタディーツアーであった。日本人学生とベトナム人学生で、現地の地域活性の問題について学び、話し合う。そんな、交流をメインにしたスタディーツアー。

しかし声をかけられたときには、現地の大学生と「交流する」ことにあまり価値を感じていなかった。わいわい交流して楽しいだけで終わってしまいそうなイメージがあったし、大学に行くことが出来ているような大学生は私が支援したい対象ではないので、そこに意義を見出せなかった。また、どちらかいうとボランティアをしたいという思いも強かった。それでも、今までと違う視点で途上国を見られるのではないか、新しいことに気付けるのではないかという期待と、ただ単にベトナムに行ってみたいという気持ちから行くことを決めた。紹介してもらった時に見せてもらった写真に写っていた建物が可愛かったのも、実は行くことを決めた一因だ。

実際に行ってみて、最初はなかなか交流ができなかった。人見知りをしてしまったり、なかなか英語で気持ちを伝えられなかったりした。しかし、徐々にみんなと話すことができた。ただ、やはり英語のボキャブラリー不足には足を引っ張られてしまった。うまく表現できずもどかしい思いをしたことが何度かあったので、これからは語彙を増やしていく必要があるだろう。

世間話だけでなく、お互いの不安や不満を正直に話すこともできた。ベトナム人学生が人を後ろに乗せてバイクを運転するのが怖い、というのを聞いたときはとても驚いた。ベトナムでは、後ろに人を乗せて走るのは当たり前のことなのだと勝手にイメージを押し付けしまっていたことに気付いた。トイレが汚いのでホーチミンに帰りたいという不満も正直驚いた。私たちは海外から来ているから「環境が当然だから、現地に対応しなければ」と思っていたが、彼らにとってはあくまでも国内のツアーである。だから、日本人以上に環境になじめない人がいたのではないのかと思う。ベトナムといえばパクチーだけれど、パクチーが

食べられない人もいて、事前に持っていたイメージとギャップのある面が多く、とても興味深かった。
そして、つねにベトナム人学生と一緒にいて、一緒に生活していく中で、少しずつ彼らの考え方や行動が見えてきた。一緒に現地の問題を考えていく中で、ベトナム人大学生の姿勢が見えてきた。なるほど、これが異文化交流なのか。異文化理解なのか。そこになって初めて、「交流する」ということの大切さに気づいた。実際に今までは、交流した気になって、挨拶程度の会話しかしていなかったのではないかと思う。それで、現地の現実を知ろうだなんて甘かったのかもしれない。

今回のスタディーツアーは、相手に向かい合って「交流する」ことの意味を教えてくれた。私は今まで日本でしか生活したことがなくて、日本人の考え方や常識に塗り固められてしまっている。だから、異文化を理解し、受け入れていくことは難しいと思うけれど、これから先、将来的に難民支援に携わることが出来たときに、きちんと彼らに寄り添った支援や考え方が出来るように、これからも様々な国、環境、立場の人と交流していきたいと思う。

「交流する」ということ

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科１年
桑原　大将

８月の約２週間、ベトナムでの学生主体の学生交流プログラム、VJEP（Vietnam-Japan Exchange Program）に参加した。私はこれまで海外はカナダには行ったことがあったがアジアの国に行くのは初めての経験だったので、とても期待をしていた。このプログラムでは日本の学生10人とベトナムの学生10人プラスベトナムの学生コーディネーターという構成で行われた。実際にスタディーツアーが始まるに向けて自分たちはベトナムの食文化から戦争の歴史など幅広く下調べをした上で臨んだ。

最初にベトナムの地に降りて思ったことは、ホーチミンのとても活気にあふれた街並みでる。同じアジアでもこうも違うのかと思った。翌日にベトナムメンバーとの顔合わせをした時にはさらに驚かされた。彼らは初対面であるにもかかわらずとてもフレンドリーに接してくれるのである。彼らの様子から、私たちとの出会いへの強い期待やこのプログラムへの意気込みを感じた。プログラムでは戦争記念博物館訪問する機会があったが、そこで感じた空気は自分が沖縄で感じたのと同じようなものであった。やはり戦争はその地域やそこに暮らす人々に深刻な影を落としてしまうのだと再認識した。またダラットでは農家に赴き現地の人々とキャンプファイアーをしてローカルフードを食べた。言葉が通じないにもかかわらず、食事と歌を通してお互いに通じることができた。

このプログラムは旅行会社の企画旅行ではなく学生主体であるため、スケジュールもすべて学生が話し合って組んだものである。そのため、スケジュール通りに行かなかったり、ミスがあったりもしたが、その時の情報伝達がうまくいかないことなどで混乱を生じてしまった。それがきっかけで、日本のグループ、ベトナムグループ全員での話し合いが行われた。お互いの本心を遠慮せずに言い合ったこの議論の場は、少し規模は小さいがまるで国際会議のようにさえ感じるほどであった。そこで改めて気付かされたのが日本とベトナムの考え方の違いである。

私が一番学んだのは時間の感覚に対する意識の違いである。日本人は日本の通勤電車からもわかるようにとても分刻みで時間に正確行動しようとする。プログラム中も、日本メンバーは事前

に配布されたプログラムを確認し、そこに書かれている時間を守ろうという意識が強かった。そのため、時間通りにプログラムが進行しないと不安になり、いらいらするメンバーもいた。一方ベトナムの人々とって予定はあくまで予定であって、それが変更されたところでその都度対応していけばよいといったような柔軟性のある考え方をしていた。確かにこの考え方にも一理ある。物事は思い通りにいかないこともある。プログラム進行中であっても必要に応じて軌道修正していく柔軟性は、時間を守ることと同じくらい大切なことであると思った。このことを、学生同士の話し合いを通して知れたことが、このプログラムに参加した一番の意義であったと思う。異なる文化や価値観をもつ二つの国の学生による2週間の共同生活が、ここまで様々な文化・習慣の違いによる出来事を伴うとは当初は思いもしなかった。こうしたことに気づくことができたのも、学生自身が主体的に行動するこのプログラムの特徴だと思う。

今、大学では国際協力を学んでいるが、今回のスタディーツアーを通じ、座学による知識習得と共に、それを実践する練習も必要なのだと実感した。今回私が一番強く学んだのは、主体性をもち、必要な時には自己主張をすることの必要性だ。とかく日本人は謙遜しがちなところがあると言われているし、私もその例外ではないが、言うべきときには自分の考えを明確に表明する必要がある。今回のプログラムにおいて、ベトナムメンバーは各個人がそれぞれの意見を主張し、議論によって個々の意見を戦わせながら物事を進めていた。一方で私を含む日本メンバーは、ベトナムメンバーに合わせて言われた通りに行動することが圧倒的に多かった気がする（ベトナムにおけるプログラムなので仕方のない部分もあるが）。

日本人としてのアイデンティティを保ちつつ国際人であることを自覚しグローバルに行動する。それは簡単なようで難しい。しかしそうした壁を乗り越えた時に真の意味での国際協力が実現されるように思う。

「失敗、そして学び」

上智大学総合グローバル学部
総合グローバル学科１年
吉田梨乃

前列左が吉田梨乃

「もう準備はおわった。」
プログラム初日、日本メンバーを乗せた飛行機がホーチミンに着陸する直前に私が放った言葉はこれであった。これから2週間の旅が始まるというのに、私の心はすでに疲労感となぞの安堵感で溢れていた。私は大学入学前からこのプログラムと関わり始め、準備期間を含めると半年近い期間をこのプログラム、VJEPに費やしてきた。労力とプレッシャーがかなり強かったので、「もう準備をしなくていい」という気持ちが私を安心させた。

さて、今回のプログラムは多くの学びや気づきがあり、自らを成長させる機会ともなった。今回、日本人学生リーダーとしての役割を果たすために、渡航前の準備期間はもちろんのこと、現地でももちろん力を発揮しなければならなかった。しかし実は私の心は失敗や後悔の念に駆られてい

る。本レポートではその苦悩や学びを述べるために、現地で起きたことも描写しながら主に2つのことに焦点を当て、記していきたいと思う。

まず、「人生初のカルチャーショック」について述べる。私はこの経験を通して、学び、気付いたことは二つある。一つ目は、リーダーとして自分の力不足を実感したことによる無力感である。プログラム中盤であるDa Latでの滞在時、日本人・ベトナム人の双方で意見交換をする時間が持たれたのだが、そこが私の人生初のカルチャーショックの舞台であった。意見交換の場を持つに至った原因は、お互いに異なる価値観が招いた誤解がいくつも積み重なっていったことにある。このまま不信感を抱いたまま過ごしていたら、お互いの誤解をさらに生むことになり、今後のプログラムの進行におおいに影響を与えるであろうと判断したため、皆が本心で議論する機会が必要だと判断によるものだ。これはもちろんお互いの理解を目指すための話し合いであったが、その雰囲気は必ずしも友好的なものではなかった。正直な感情を吐き出すことが鉄則であるがゆえにお互いに厳しい言葉も何度か飛び交い、異文化相互理解の苦悩を、私たち全員が何度も味わうこととなった。海外経験があまりない私にとって、まさに「人生初のカルチャーショック」であったことは間違いない。

話し合いの場にいる時は、なんとか誤解を取り除こうと感情を織り交ぜないように発言しなければならなかったが、私自身冷静な対応力ができたかといわれれば、そうではなかったと言えるかもしれない。さらにいえば、この話し合いの場を作るまでの過程でリーダーとしてもう少し周りに気配りをすることができていれば、両国の架け橋となる存在になり、問題発生を防ぐことができ、そもそもお互いに不信感など抱くことはなかったのかもしれない。この話し合いの場においても、たびたび自分の力不足を痛感した。

二つ目に、この話し合いがあったからこそ、異なる価値観がぶつかった際にその誤解を取り除く方法を学ぶことができたということである。異文化間で誤解が起きた場合に重要なのは、それを解決する「方法」を模索するよりもまずは、その事実に立ち向かう「姿勢」を見直すことであると感じた。ここで私が意味する「姿勢」とは、相手の心に寄り添い、寛容な心を持ち、自らの持つ価値観と相違することがあっても、許し認め合うことである。他者の価値観を敬う姿勢を忘れないことで、たとえ文化や意思疎通のための言語の壁があろうとも、誠意が伝わり誤解を解くことが可能なのではないだろうか。実際にこの話し合いの場では、緊迫した空気が流れ、問題自体が根本的に解決することはできなかったものの、お互いにこの苦難を乗り越えて友情を築きたいという誠意を持ってお互いに相手に接したからこそ、その後も今まで通り、いやむしろそれ以上の関係を築くことができたのかもしれない。

次に、「ベトナム人学生との交流」について述べる。このプログラムは学生交流型のツアーであることが特徴であり、互いの異なる文化や価値観を交流と言う形を通して学び、気づき、文化力を深めていく。先述したようなカルチャーショックはあったものの、私は非常に多くの学びを得ることができた。特に私はベトナム人学生コーディネーターとプログラム前から連絡を頻繁にとっていたのだが、彼女たちの英語力や思考力、判断力、リーダーシップ力にはいつも圧倒され、正直言えばプログラムが始まってからもついていくのに必死であった。他のベトナム人学生メンバーも、知性と陽気さに溢れていて、そのおかげで私たちはすぐに打ち解けることができた。彼らにはあり自分にはないものに気づくたびに、自分の弱さや欠点を知る場面が多くあった。

ベトナムは世界の中でも途上国に位置付けられていている。日本におけるベトナムのイメージは、経済発展を遂げてはいるが、未だ他の東南アジアの国と同様、途上国というものであろう。しかし、実際に私たちが交流した学生は先進国に暮らす私よりも、卓越した能力を持つ人々ばかりであった。もはや私たち学生の間に先進国、途上国の壁はなく、人と人としての繋がり、交流を深めることができたように思う。他国に対するステレオタイプ的なイメージを乗り越えることができたのは、交流を通してお互いの性格や人柄、さらに文化や価値観を共有できたからである。私は改めて国際学生交流の意義を問い直し、より価値を感じるようになった。さらに言えば、自分自身の弱さや欠点がベトナム人学生との交流を通じて明確になり、英語学習を始めとする様々なことに貪欲に立ち向かうモチベーションにも繋がることとなった。

ところで、私は物事を何でもマイナスに捉える癖がある。渡航前に感じた無力感、プログラム中に駆られた後悔の念など、前向きに捉えるのは困難であることがしばしばあった。しかし今思えば、このプログラムを通した経験はすべて「学び」であったことに変わりはなかった。Da Latで体験したカルチャーショック、ベトナム人学生との交流から気づいた自分自身の弱さや欠点、リーダーとしてお互いの架け橋になるようなことが思うほどできなかったことなど。悪く表現すれば、私は何度も失敗を繰り返し、その度に強い後悔の念に駆られていた。しかし、何かを失敗したと感じたとしても、失敗を生かして次に繋げることができれば、それは価値あるものとなり、ただの失敗ではなく成功の源となる。

このプログラムで犯した失敗の数々を次に繋げること。それが学生時代にできる最大の価値ある学びとなると私は考える。私はこのプログラムで「国際学生交流」という分野を通して失敗を経験できたことを大変誇りに思う。人と人との繋がりを大切していきたいと考える私は、今回のプログラムを通じて将来の国際協力体制に学生ながらも少しでも貢献することができたのならば本当に嬉しいことである。そして、決して完璧ではなくむしろ失敗ばかりのリーダーであった私のそばにいて支えてくれ、価値ある貴重な経験を一緒にすることができた素敵な日本人・ベトナム人メンバー、私に数々の壁と失敗を通しながらも成長する機会を与えてくださった関先生に感謝の気持ちでいっぱいだ。

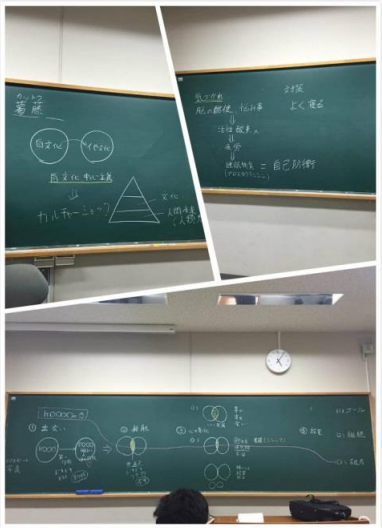
《Vietnam-Japan Youth Exchange》

Vietnam-Japan Youth Exchange (VJYE) 2016 は 14 日間、ベトナムへ行き、ベトナム人学生たちと SDGs についてのディスカッションなどで知識を深めて、様々作業に取り組み、交流を深めていきました。

~VJYE 活動~

~事前学習~

私たちは SDGs(持続可能な開発目標)Sustainable development goals の 17 ある項目の中からゼミ生が最も気になる項目を 1 人 1 つずつ選び、まず日本ではどのような問題があるのかを各自調べていきました。
そして、現地の学生と交流し私たちができることは何かを議論し、この 17 項目の中からいくつかの項目に焦点を当てていきました。



～関ゼミ夏合宿 2016@東経大武蔵村山キャンパス～

朝早くから集まり、まずは現地で行うベトナム学生に向けてのパフォーマンス作りに励みます。メンバー一人一人が意見を出し合いながら、長時間にわたり、構成、音楽、演出を考えていきました。

　その後は、夕方から夜にかけてまでパフォーマンスで取り入れる創作ダンスを３時間ぶっ通しで練習。暑さで体力がどんどん消耗されます。

　遅めの夕食を終え、夜明けまでの果てしないミーティング。様々な議論で盛り上がりました。

　そして､SDGs のパワーポイント資料を完成させ、１泊２日での夏合宿を終えました。

～現地での事前学習～

　私たちは SDGs について一人一つずつの目標について調べて深く考え、その結果を発表し討論しました。

●ベトナムホーセン大学の学生と SDG について話し合い。

～現状把握～

私たちはベトナムで街のゴミ拾いを行いました。そこで課題となっていることを身をもって把握することができました。

～実践～

先ほどのゴミ拾いでベトナムで課題となっていることを理解しました。その後、Talai でお金を寄付して、私たちとホーセン大学の学生と力を合わし現地の人の協力の下でて真夏のしたで汗を流して地面に数十か所に穴を掘りゴミ箱を設置し、当地に環境を守ってもらうような効果をもたらし、自分たちが住んでる地球に少しでも役に立ててあげたいと思い、これから環境問題に向き合い考えることができました。

～研修日程～

2016 年 9 月 3 日～9 月 16 日

9月3日	現地への移動
9月4日	現地学生と市内ウォーキングラリー
9月5日	ホーセン大学にてオープニングセモニー、文化紹介コンサート、グエン・ドク氏講演会
9月6日	スポーツ大会、「持続可能ナ発展目標（SDGs)」ニ関する講演受講（1）
9月7日	ベトナム竹細工工場にて伝統工具使用体験、ホーチミン工業大学にて交流会
9月8日	「持続可能ナ発展目標（SDGs)」ニ関する講演受講（2）」、市内公園のゴミ掃除
9月9日	市内レストランにて料理体験、フィールドトリップ中のダンス練習
9月10日	フィールドトリップ1日目（現地に移動、チームビルでぃんぐ活動）
9月11日	フィールドトリップ2日目（国立公園内サイクリングとウォーキング）
9月12日	フィールドトリップ3日目（貧困地域でのゴミ箱設置と交流）
9月13日	フィールドトリップ四日目（竹筏作りとレース、ホーチミンに移動）
9月14日	プログラム総括発表会、閉会式、お別れ会
9月15日	ベトナム学生と市内観光、夜ホーチミン発
9月16日	早朝成田着（全工程、一名のホーセン大学教員と9名のベトナム人学生が同行

≪参　加　学　生　報　告　書≫

「異文化交流で学んだ大切なこと」

上智大学総合グローバル学部１年
吉田梨乃

タンソンニャット空港で日本人学生メンバーの登場を待つこと4時間。私の心は、疲労感ではなく、期待感でいっぱいだった。日本人メンバーの中でわたしは唯一、東京経済大学の学生ではない上に、彼らとの活動歴が少なかったせいか日本で仲良くなる機会を作ることがなかなかできなかった。もちろん、溶け込めるか不安で仕方なかったわけだが、緊張感はあまりなかった。むしろ、これから始まる2週間のプログラムで日本人・ベトナム人を含め、どれだけの多くの人たちに出会えるのか、私自身楽しみでならなかった。空港で感じた期待感は、新しい出会いへの楽しみが疲労や緊張を勝った結果、そのものであった。

私は8月のAAEE、アジア教育交流研究機構主催の学生交流プログラムに参加していたため、早くからホーチミンに駐在していた。そのため、プログラム前からベトナム人学生メンバーと会う機会を設けることができ、早くから交流し、親睦を深めることができた。今回の9月のVJYE研修での私の役割は参加者であると同時に、日本メンバーをサポートすることであった。そのために、早くからベトナム人学生メンバーとプログラムの準備に関しての打ち合わせをしたり、どうしたらより円滑に日本人・ベトナム人学生がお互いに交流することができるかについての策を考えたりなど。私自身、多くのベトナムメンバーが優しくそしてフレンドリーに接してくれたことを本当に嬉しく感じた。本稿では、異文化の人と交流を通じて学んだ大切なことを自身の経験談を通じて気づき、学んだことを記すと同時に、ベトナムゼミ研修の活動報告としたいと思う。

第一に、私が学んだのは「笑顔の大切さ」である。笑顔は世界共通だ、そんな言葉がグローバル化における現代ではよく飛び交っているが、このプログラムが始まる前は、実は私はただの辛気臭い言葉と思い、全く信じていなかった。幼い頃から、インターナショナルスクールで英語を学んできた身として、英語ができなければ異文化の人と対話することは不可能であると信じていて、むしろ今まで最も重視してきたものは、英語力がどれだけ秀でているか、それだけであった。しかし、私は今回のVJYE研修でどんなに英語ができていても、笑顔がなければ異文化交流はうまくいくものではないと思い知ったのである。

実を言えば、私は昔から夜更かしが好きな上に、早寝早起きが大の苦手で、さらに表情が硬く、第一印象はいつも「怖そう」「話しかけにくそう」とマイナスなイメージしか抱かれたことがなかった。そのため、どんなに英語を話すことができようとも、積極的に外国人から話しかけられたことは今まであまり体験してきたことがなく、日本人だけに限らず、外国人にでさえ、怖がれることがほとんどであった。もちろん、そのことを自分でもよく理解していたので、私はベトナム人学生と交流する際、徹底していつでもどんな時でも笑顔で親しみやすい人でいるようにした。そうすれば、得意とする英語を存分に使う機会が増えるし、サポーターとしてプログラムを作るベトナムの学生と気持ちよくコミュニケーションが取れなければ役割を担うことなど到底無理だと考えたからだ。

さらに言えば、朝起きるのが苦手な私は、夜更かしをやめ、しっかりと睡眠と食事をとることで笑顔を作りやすいように努めてみた。すると、笑顔が増えた私に、気付いたらベトナムメンバーが話しかけてくれたり、親しみやすく気軽に声をかけてくれた。私は非常に単純なことだが、異文化交流をする際、英語の重要性の他に笑顔やどれだけ親しみを持ってもらえるように接するかが非常に大切になってくるのだということを身をもって学ぶことができた。少なくとも私が見る限り、多くの日本人は異文化交流を図る際、自らの英語力のなさに失望し、異文化交流には英語力がどんなに必要か思い知らされたと述べることがある。しかし、たとえ英語力がどんなに秀でていようと相手に自分とコミュニケーションをとりたいと感じさせる能力が足りない場合、異文化交流を気持ち良く進めることはとても困難になってしまうのである。もちろん、英語がしゃべれることは有利であるが、それはただの特権に過ぎず、むしろ英語力が秀でていなくとも、積極的に相手と笑顔で接し、気軽に話しかけやすい人である方が異文化交流において必要とされるのではないだろうか。

「ベトナム研修を通じて新たに学んだこと」

東京経済大学経済学部4年
石井　侑登

私は昨年関ゼミ生としてネパール・タイでの海外研修へ参加し、水道も電気もほとんどない山村に滞在する中で「英語に限らず相手に通じる言語の大切さ」と「相手の文化を尊重し、理解しようとする姿勢の大切さ」を学びました。2週間という短期間でし

たが、現地の学生と朝から晩まで行動を共にし、お互いの習慣や人格を尊重しながら交流を進めたことで、自身の異文化適応力を高めることができました。
今年のベトナム研修では、昨年学びえた上記のことを意識しながら交流をし、新たな気づきを得ました。

一つ目は、両国の学生たちがお互いの言語を教え合っていたことです。英語を介した交流がメインの本プログラムにおいては貴重な英語を話す時間が減少してしまいますが、お互いがお互いの言語に興味を持ち、さらにその知識を深めていこうとしている点では、異文化理解が出来ていたと思います。相手の言語を覚える際には、「ありがとう」や「こんにちは」などのありきたりな言葉も重要ですが、それよりも大切だと感じたのは相手が思わず笑ってしまうような言葉を覚えることです。その笑いから英語での会話が続いたことがしばしばあったからです。例えば「僕すごくかっこいいけど、さすがに知っていたよね？」。外国人が片言でこんなこと言ってきたら面白いですよね。

二つ目は、自分から話題を作り話しかける積極性が必要だということ。これは多文化交流に限ったことではありませんが、いくら英語が流暢な人でも発信しなければコミュニケーションはとれません。今回の私の反省点は、交流に関してやや消極的になってしまっていたことです。ベトナム人とも共有できるような話題を見つけることに苦労し、当初は自分から話しかけるということが他のメンバーと比べて少なかったです。それに2週間あればいずれ自然と打ち解けていくだろうと心のどこかで思っていました。話す人とは話しますが、話さない人とはあまり話さないという状態のままプログラムの折り返しに差し掛かったところで積極性の大切さを痛感しました。そこでなんとか話題を見つけようとして思い立ったのが、上記でも述べたように、面白いベトナム語を教えてもらい他のベトナム人メンバーに実践するということです。これは非常に効果的で、すぐに打ち解けることが出来ました。

三つ目は、ホーチミン市についてです。想像していた以上に高層ビルが多く、至る所で建設が進んでいました。地下鉄も数年以内に開通するそうです。日系企業も多く進出しており、今後さらなる経済発展が見込まれます。しかし、建設現場の労働者たちに着目した私は言葉を失いました。きらびやかに彩られた完成予想図の前で、それとは対照的に憔悴していた彼らは、顔や肌の色から推定し外国からの出稼ぎ労働者です。ここで事前に学習していたベトナムの経済格差を実感しました。今後はこの経済格差是正への取り組みも重要になってくると思います。私はセキュリティに興味があり、街中にいる数多くいる警備員に注目したり防犯カメラのタイプなど観察したりしていましたが、ホーチミン市を離れた村ではそのようなセキュリティをほとんど見ませんでした。セキュリティの需要について疑問を抱いたので、ベトナム人メンバーに通訳を依頼して村の家やお店に話を伺ったところ、セキュリティはあれば便利で助かるが、生活するのに精いっぱいで、導入するお金がないと答えてくれました。ここでも都市と地方間の経済格差を実感しました。

最後は、人のつながりの大切さです。研修期間中の自由行動時間を利用し、ベトナムに進出している日系企業のオフィスを訪問し、現地で勤務する日本人社員の方から貴重なお話を聞くことが出来ました。さらに同じベトナムオフィスで東京経済大学の卒業生が勤務しているとのことでその方を紹介してくださりました。そもそもベトナムで働く日本人社員の方を紹介してくださったのは、私がオーストラリア留学中に出会った方です。どこでどのような出会いがあるかわかりませんが、人との出会いは大切にしていきたいと改めて思いました。また、今回のベトナム人メンバーも今後私たちがベトナムについて知りたいことがあったときなどに協力してくれます。海外の情報は誰でもジャーナリストの記事から得ることが可能ですが、実際に現地に住んでいるネイティヴを友人に持つということは、より詳細な情報を得ることができ、特権です。

結論として、昨年のゼミ研修では発見しきれなかった新たな気づきを今回のゼミ研修を通して発見できたことで、多文化交流における自身の振る舞いや行動を見直すきっかけとなりました。私は 10 月からオーストラリアへ行きますが、この研修で学んだことを活かして異文化適応力をさらに高めていきたいと思います。

「“交流する”ということ」

東京経済大学経済学部2年

高橋 侑汰

今回、私は関昭典ゼミナールの一員として、VJYE2016 (Vietnam Japan Youth Exchange 2016)に参加しベトナム・ホーチミン市にて2週間、主に現地大学生との交流などの活動を行った。この研修は9月3日から同月16日まで行われた。

今回の研修は成田空港でのミーティングによりスタートした。ミーティングでは、到着後の予定、注意事項等を事細かに確認し、当ゼミ3年山田悠貴より編成された日替わりの責任者の発表もあった。日ごとに3人一組のユニットが組まれ、日替わり責任者の仕事内容は点呼、各場所を離れる際の忘れ物確認、翌日の責任者へ翌日程の情報伝達などというものだった。我々は成田にて万全の体制を整え、飛行機に搭乗したのであった。

機内では特別、研修についての話をすることはあまりなく、ゼミ生一人一人がリラックスし、それぞれの時間を過ごした。到着後に対面する学生たちに疲れた表情を見せないために、ということだった。機内で揺られることおよそ6時間、飛行機は無事、タンソンニャット国際空港に着陸し、我々はベトナムに到着した。

タンソンニャット空港にて初対面。まだ誰の名前も分からない。

空港を出ると、夜も更けて日付が変わっているにも関わらず、これから行動を共にするHoasen大学の学生メンバーがロータリーにて出迎えてくれた。そこで挨拶を交わし、彼らとバスでホテルへと向かった。まだ会話の少ないバスで不安と期待が交錯する中、およそ30分でホテルに到着した。私はホテルに到着し部屋に入るや否や、ベッドで眠りに入った。ここまで。まだ“交流”はさほどなされなかった。

朝起きてホテルで朝食を食べてからロビーへ降りると、現地学生メンバーが来ていた。彼らに案内され私たちは彼らの通うHoasen大学のビルに辿り着いた。そこで彼らは我々のために歓迎式を催してくれた。そこではまずメンバー全員が自己紹介をした。そして現地学生メンバーがパフォーマンスを披露してくれた。実は我々もパフォーマンスの準備をしていたため、そこで披露させていただいた。両方のパフォーマンスは共に自国の風土や伝統を表したものであった。“文化交流”がそこでは行われた。その歓迎式の後、我々は現地学生メンバーとともにコーヒーショップに行き、茶話会が開かれた。そこで我々は初めて真面に“会話による交流”が行われた。その後全員にバディが発表され、バディが街を案内してくれた。その間私はバディとたくさん話をした。会って間もないので、趣味、国についての話、大学の話、将来の夢の話、アルバイトの話、家族の話など話題はたくさんあったので会話が詰まることはなかった。
ホーチミン市内で公園の清掃活動や別大学への訪問など様々な活動を終えた後、我々は9月10日より3日間を人里離れた小さなタライ村という村で過ごした。そこでは、現地学生メンバーと様々な活動を行った。中でも村内のごみ箱設置活動は印象的である。現地学生メンバーと4,5人のグループを組み、村に共用のごみ箱を設置した。その過程では現地学生メンバーと協力して完遂することができた。またそこで現地学生メンバーがとても真面目であるという印象を受けた。
タライ村での3日間で現地学生メンバーとの心の距離がすごく縮まったと実感したのは、タライ村を出てホーチミンのホテルに戻る際のバスの中である。それまではバスに乗る際は日本人学生とベトナム人学生が隣同士で席に座ることはほとんどなかったのだが、そのバスでは、日本人同士が隣同士にはならず、かつ車内が会話で賑わっていた。

タライ村にて撮影。意図せずとも服の色が揃ってしまう一体感

しかし別れというものは惜しい時にやってくるもので、タライ村からホーチミンに帰ってきてはすぐに帰国準備に追われ始めそのときはすぐにやってきた。最終日、空港に向かうバスの中、またそれ以前のホテルを出る際にも、別れの惜しさに涙を流してしまう学生も少なくはなかった。そこで私は改めて、この2週間で築いた現地学生メンバーとの親密さを実感した。搭乗時間ギリギリまで空港のロータリーで会話をした。ベトナムへの名残惜しさを感じる時間であった。

別れの時。「また会おう」と皆で誓い合った。

日本に帰国した今も、彼らとは連絡を取り続けており、メンバーの中には再度ベトナムへ行く、またベトナム人学生の中にも、来日を予定しているという者もいる。この研修で出会ったVJYEベトナム人メンバーは今後も良き友人として大切な存在になることは間違いない。

研修を終えて

今回の研修で私は“交流”というものについて考えさせられることが多かったと感じている。今まで“交流”というのは、いわば会話することであり、その手段でもって相手のことを知っていくことだと思い込んでいたが研修を終えた今、“交流”は単に会話で相手を知ることではなく、体験、実経験でもって相手のことを知っていく、また自分のことを知ってもらうことも“交流”のうちではないかと思っている。会話がなくても“交流”はできる、ということを思い知らされた研修であった。

最後に、この研修に参加する機会を与えてくださった関昭典先生をはじめ、大学関係者様方、家族等に感謝したいと思う。

「研修を通じて変わったこと」

東京経済大学経済学部2年

池田 滉志朗

この12日間のベトナム研修は異文化交流と持続可能な開発目標（SDGs）について学ぶというものであった。これは私にとって初めての海外渡航ということもあり、期待よりも圧倒的に不安が勝った。それは、以前から興味を持っていた国際交流はどのようなものかという期待と、コミュニケーションと文化の違いに対しての不安だ。本稿では、研修を通して特に印象に残ったことと感じたこと、考えたことについて述べようとおもう。

はじめ、まだベトナムに来たという実感が湧かないまま10数名のベトナム人学生のいるカフェに案内された。私は国際交流が楽しみであったはずであるのに、いざ顔を合わせると不安でいっぱいになったのを覚えている。勉強してきたはずの英語もほとんど聞き取れず、周囲が楽しそうにコミュニケーションを取っている中、私は一人黙っ

ていた。すると、あちらからゲームをしないかと誘われた。私は思ったようにコミュニケーションが取れない相手とゲームができるのかと疑問に思ったが、笑顔で一緒にゲームをしていると、いつの間にか緊張はほどけて英語も口から出るようになっていた。以前から耳にしていたことではあるが、人それぞれのバックグラウンドに関わらず笑顔は共通のコミュニケーションツールであるということを、来て早々に体感できた。
そして、ベトナムと日本の文化交流が行われたときは、互いの文化の素晴らしいところを認め合うことができた。私達は文化や考え方の違いをストレスに感じるようなことは一切なく、その時間は異文化の背景や宗教について考え、知ることができて充実したものとなった。ベトナムの文化紹介の次は、私達が事前ゼミ合宿やゼミ授業の時間外での話し合いなどで修正に修正を重ね造り上げてきたパフォーマンスを発表する番となった。最初はそれがベトナムの人に受け入れてもらえるか不安だった。しかし、ベトナムの方々はただ観ているだけではなく、私達と一緒になって踊るなど、パフォーマンスを体験してくれたため非常に有意義な時間となった。異文化交流は互いの国の文化に興味を持ち、価値を理解し、共有し合うことに意味があると思った。

また、シティツアーの中で訪れたベトナム戦争の歴史を綴る「戦争証跡博物館」では、枯葉剤が与える影響などの、日本では目にすることのできない生々しい資料をみて、この研修で最も衝撃を受けた。後日、研修の一環としてグエン・ドクさんと食事をさせていただいたときも、ベトナム戦争が及ぼした甚大な被害について聞くことができた。相手の国の文化に関心を持たず、価値を無視した悲惨な戦争は二度と起きてほしくないと強く思った。

SDGsについても同じようなことが言えると思う。SDGsの講義を専門家から受け、私は、現在SDGsのことを認識し、関心を持っている人はどれだけいるだろうかと疑問に思った。社会の無関心は問題解決の先延ばしへとつながる。私は、全ての問題の解決に向けて最も重要なのは、関心を持ち続けることであるし、無関心は罪だと改めて思った。

そして、今回のベトナム研修で最も予測不可能で過酷であったのが、4日間のフィールドトリップである。それまでの活動範囲であったホーチミンを出て数時間後、私は周りを見渡して驚いた。コンビニは見当たらず、近くにスーパー等の施設が全く見当たらなかったである。ホーチミンでは感じなかったが、ベトナムは発展途上国であるということをそこで初めて実感した。そのような場所で過ごす日は、日本では想像できないものであった。しかし、このフィールドトリップが、面倒なことを避け、予測できる範囲内のことしかやらない私を打ち砕いてくれたと思う。この研修を通じて、予測のつかないことが起こったときでもベストを尽くし、最良の結果に導く努力と対応力を得ることができた。

今回の研修の反省点は、英語の学習が足りなかったことただ一つだけである。日本人とベトナム人と英語で1対1の会話をしたときも、会話は途切れ途切れだった。深い内容に入ろうとすると英語でどう伝えるべきかわからず、もっと話したいのに話せないという非常に悔しい思いをすることとなった。この思いは研修が終わるまで続くこととなった。これらの後悔の原因は全て英語力にある。英語力があったなら、さらに良い研修にすることができたであろう。このような思いを二度としないためにも、英語の学習により一層の力を注ぐことを決意した。そして、英語のレベルが決して高くはない私でもこのような充実した日々を過ごすことができたのは、ベトナム人のあたたかい心遣いと笑顔のお蔭だと今になって強く思う。これから先、どこの国に行ったとしても、相手の国の文化を尊重し、笑顔で交流していきたい。

「ベトナム研修報告書」

東京経済大学経営学部2年

金子　舞

私は、9/3から9/16で行われたVJYE（ベトナム研修）に参加し、約2週間ベトナムのホウセン大学の生徒たちと行動を共にした。私が、この研修で得たものはSDGsの更

なる理解の他に大きく分けて積極性、英語学習へのモチベーションだ。これらを得られた経緯をピックアップして述べたいと思う。

まずは、前期の授業を使いベトナム研修に向け学習、準備をしてきたSDGsの更なる理解についてだ。私たち日本メンバーは、SDGsの中でも環境に焦点を置いた日本における対策について、ベトナムメンバーはベトナムの環境問題について英語で発表を行った。

発表を聞く前は、発展途上国であるベトナムの抱える環境問題は、きっと日本にはない問題ばかりなのだろうと考えていたが、洪水などの水害は近年の日本にも見られる問題であった。環境問題は、その国ごとで原因、対策を考えることが必要であると共に各国が世界的に考え対策を練ることが大切だと感じた。

また、ホーセン大学に観光を学ぶ学科もあることから、観光に関するSDGsについてディスカッションをした。内容は、観光客が増えることによって起こりうるプラスの影響とマイナスの影響だ。グループごとに意見を出し合ったのちに、それらは全て影響を与えるのは環境、社会、経済のどれかに当てはまることが分かった。何事にもプラスとマイナスの面があるわけだが、もしかしたらSDGsの17個の目標のうち1つにはプラスの影響になるが、他の1つにはマイナスの影響を与えるということが起こりうるのではないかと考えると、この17の目標を達成するのは、容易いことではないと感じた。
私がベトナムの環境の面で感じたのは、モーターバイクと路上に捨てられたごみの多さである。私たちは大学周辺の公園でゴミを拾い、タライではごみ箱を設置した。これらのことは、とても大変な労働であったが、ベトナム全体から見ればほんの少しの変化だ。だが、これらを見た人たちの変わるきっかけになればいいなと思う。

次に積極性と英語学習へのモチベーションについてだ。実は私が関ゼミに入ったのは、この2つを得られるのではないかと思ったからだ。結果的には思惑通りとなったが、なかなか私としてはたどり着くまでは困難であった。私の考えとしては、伝えたい相手ができることで英語学習へのモチベーションが得られるというものだ。私の考えが正しいのかを調べるためには、まず伝えたい相手をつくらなくてはならない。もともと、人に話しかけるのが苦手な私は最初ベトナムメンバーとうまく話しができず、自然に日本人メンバーの横に行くようになっていた。ホーセン大学での講義の日、日本人メンバーの横に座った時に、これでいいのかという思いが残り「ベトナムメンバーの横に座れば良かったかなぁ」と口に出していた。すると「今からでもいけるよ！Let’s try!」と横の先輩が言ってくれた。そして私は背中を押されベトナム人メンバーの横に座り話しかけた。これが自分からの初めての行動だった。これをきっかけに話をたくさん出来るようになったし、この時話しかけたサラとは一番仲良くなれたと私は思っている。一歩を踏み出すのは、なかなか勇気がいるが、そのあとは以外にも簡単なのだなと分かった。これからは、もっと様々なことに挑戦できるのではないかと感じている。

私がこのプログラム中に自分の英語学習不足で聞き取れない、伝わらないということはたくさんあった。ディスカッション、ゲームの説明、課題への話し合い、本当に何回ももどかしい思いをした。いきなりみんなの前で話せというものも私の英語能力は明らかに不足していた。でも、日々のコミュニケーションは簡単な文や単語を使いベトナムの友達と話せていたし、楽しかった。しかし別れは必ずやってくる。別れのとき、思い返すと2週間は本当に2週間なのかと疑うほどに濃い時間を過ごしていた。泣くなんて思ってもいなかったのに、この楽しい時間がこれで終わりだと感じたら自然と涙がでた。2週間で1番今の気持ちを伝えたいと思った。でも、私の英語力では、その時の複雑な気持ちは英語にできなかった。それがとても悔しかった。しかし同時に、そこで私は伝えたい相手ができたのだと感じた。海外の友達は、私の英語学習へのモチベーションだ。次に、またベトナムの友達に会うときは、再会の喜びを英語でうまく伝えたい。

私は、この研修でたくさんの良い経験をしたと言える。強く印象に残ったのはタライである。ジャングル、たくさんの虫、蚊帳の中で寝る、蠍、水のシャワー、筏つくり。すべてが初めての体験であった。だが、特に印象に残ったのは、ゴミ箱設置の時一人になるシーンがあり、その時にベトナム語しか話せない地元の人に話しかけられたことだ。私の目を見て私の知らない言語で話しかけてくる。本当に初めての経験だった。英語を使って海外の人と話すと自分の世界が広がったように感じていたが、英語を話せる人としか会話は出来ないと気づかされた。日本語と少しの英語しか話せない私の世界はひどく狭く感じた。だから私は、英語をもっと完成させた後、他の言語も習得したい。

「発見」

東京経済大学経済学部２年
曽　子傑

　ついに待ちに待った人生初の海外研修を迎えることになり、期待半分、不安半分でこの研修に臨みました。期待というのは、初めてベトナムに訪ねて、本格的なベトナム料理を食べられることです。不安というのは、果たして今まで勉強してきた英語は100%出しきれるのかのというものと、ベトナム人と友達になれるのかというものです。９月３日から16日までに14日間も亘るベトナム海外研修を終え、大きく分けて二つのことに気づきました。

一つ目は英語の重要さを改めて感じることができたことです。今までは何となく英語は言われるままに、はっきりした目的もなく勉強してきました。しかし、今回の研修で言葉の大切さを知ることができました。私たちが訪れたのはホーチミン市です。ベトナムの空港に着いてからは、日本語を書かれている看板などが一切なく、ベトナム語と英語しかありません。現地の人で日本語を分かる人はもちろんおらず、コミュニケーションをとる手段はもう英語しかないのです。今回の研修ではベトナム人メンバーはおおよそ１２名おり、私たちの共通言語は英語しかないので努力して英語で会話していました。そこで私が思ったことは、ベトナム人学生は全員、日本人メンバーより英語がはるかに上手だということです。なぜ、私たちは彼らと同じく小学校や中学校から英語を勉強してきていたのに、こんなに大きな差があるのかと疑問を抱きました。日本人は確かに英語に対して苦手意識を抱える人がとても多いです。今、日本では小学校五年生から英語を学び始め、高校までの8年間ずっと授業を受けています。しかし、その結果、実際どれぐらいの人が英語を喋られるのでしょうか。自己紹介や簡単な単語ぐらいは大丈夫と思いますが、いざ外国人と英語で話す時にしっかりとコミュニケーションを取れる人はどれぐらいいるのでしょう。日本の学校では文法が中心となっている授業が多く、読み書きに特化してインプットに力を入れるのが日本の英語教育の主流です。確かにインプットした知識は持っているが、それを口に出して人に伝えるアウトプットの訓練が不足している気がします。それに加え、日本は島国であるので日本語だけでも就職に困らないことが多いです。一方ベトナムはまだ発展途上国ですが、彼らにとって英語ができない場合には他に高いスキルを持っていない限り良い仕事が見つかりません。彼らは生活がかかっているので、日本と比べてプレシャーが違います。

私は昔から読み書きが不得意ですが、スピーキング力だけには自信あります。初日は自己紹介をし、そのあとベトナム学生と日本学生一人ずつでペアを組んでホーチミン市を観光しました。その間、私とパートナ―はずっと英語で些細なことから深い内容のことまで話し続けていました。しかし、何度か会話を続けていくうち、もう日常的な話題や、知っている単語も使い切ってしまい、それ以上の話はできませんでした。もっといろいろなことを話したい気持ちはありましたが、今、自分の英語力ではまだ伝えることが難しかったのです。今回の研修でグローバル人材になるにはまだまだ英語力が

全然足りないことに気づきショックを受けました。しかし、きっとその悔しさはこれから勉強するための良いエネルギーになったと思います。

二つ目に気づいたことはベトナムの発展です。普段日本ではあまりベトナムについて触れる機会がなく、授業でベトナム戦争を勉強したのと、物価が安いこと、あとは料理がおいしいということぐらいしか知りませんでした。空港から出て外の町を見たとき、高層ビルや整備された街並みが目に入ってきて、以前ベトナムに対して抱いていた貧困のイメージが全部ひっくり返されました。ホテルからすこし歩けば、日本でも有名な高島屋やマルイなどの大きなショッピングモールもあり、高級ブランドの専門店も数々ありました。

ベトナムは発展途上国ですがASEANに加盟して海外への輸出にも力を入れています。ベトナムの平均月収は二万円程度で、日本の十分の一以下です。人件費が安いため、日本からも味の素、富士通、キャノンなど多くの大企業がベトナムに進出をし、工場を置いています。ホーチミン市ではファミリーマートとコンビニエンスストアも見かけました。ベトナム人の主な交通手段は車とバイクですが、町中にトヨタとホンダの車とヤマハのバイクが使われているのを見ました。ある日メンバー全員で夜ご飯を終えてシティーのナイトツアーがあり、町を歩いていたら目の前にある工事現場に英語でVietnamとJapanの旗の模様が貼られておりました。そのことについてベトナム学生に聞いたら、それは日本が支援してベトナム政府と一緒に地下鉄を作っていると教えてくれました。ホーチミン市ではあちこちに日本の影響を受けているところが見られました。

時が経つのはあっという間で、皆がやっと仲が良くなってきたばかりですが、もう別れを告げる時が来てしまいました。この12日間、肌で現地の雰囲気や民族性などを感じることができました。いろいろ貴重な体験をさせていただき、多くの発見をすることができました。日本にはないにぎやかさと元気があふれていて、毎日新しいことを発見できることに生きがいを感じ取れました。しかし、もうここから離れると考えると非常に残念な気持ちでいっぱいになりました。ベトナム学生のリーダーはこう言いました

“it’s not goodbye, this is start of something new!”

これは終わりではありません、きっと私たちがここで出会えたのは一つの縁であり、それをきっかけにお互いの文化や言葉を知ることができた、これからもお互いのことを励まし合い成長し、また次会えるのを楽しみに待っています。

「かわる」

東京経済大学経済学部2年

木立　卓

蝉の鳴き声が消えかけ、夏が終わりを告げる頃、私達、関ゼミ生は青天の下に集まり、ベトナムへ旅立った。私にとって、今回の約二週間のベトナム研修は初の海外であった。この研修の中での私の感情の変化とともに、考えたことについて書いていく。

「楽しみ」3割、「不安」7割で旅立ち、ベトナムの空港につきベトナムメンバーと会った時は、まだ先が見えず、「不安」10割になっていた。バスに乗りホテルへ向かった。道路は、テレビで見たのと同じく、バイクが魚群のように走っており、交通整備はあまりなく、クラクションは鳴りっぱなし。真夜中であるのに、『静寂』という言葉を知らないかの如く、夜は過ぎていった。

次の日、コーヒーショップの中で日本、ベトナムメンバーが集まり自己紹介や、様々な会話が飛び交った。非常に楽しい時間であったと同時に、悩まされてもいた。それは、発音の違い。私自身の実力、勉強不足が露わになった。このことについては、最終日の前日には、慣れることができ、成長を実感することができた。数時間をこの場所で費やし、我々は、歩きで町を味わった。この時、私の中にあった「不安」は、「高揚

感」、様々な事に対する「好奇心」で覆いつくされていた。良い感情である。この研修中で、三回大きく感情が変わったときの一つである。

その中の二つは、三泊四日で行った村で起こった。この村は、ホーチミンとは空気や、雰囲気、建物や景色が非常に異なっていた。牛のフンの匂い、泥道。ホーチミンでは聞こえなかった虫の音。良い意味ではなく、マイナスの意味である。そんな中、二日目にサイクリングをした。道のない道、水たまりや石の上を走っていった。景色は綺麗だが、少しよそ見をすると転倒する。私は、このような道を走るとは予期しておらず、真っ白のスニーカーを履いていった。泥は、スニーカーの色を悪くしただけでなく、私達の心も徐々に負の方向へと蝕むのであった。不安や楽しみの感情は消え、「嫌悪」という新しい感情が生まれた。ただし、村での生活が少しずつ終わっていくのと同時に、この感情は消えていき、今となっては、非常に価値がある良い思い出となった。

もう一つは、ベトナムメンバーの一人と夜に話した時だ。最初は、たわいのない、ふざけた会話から始まったが、話が進むにつれ、彼はある「悩み」を話し始めた。ベトナムメンバーは、どういう感情で話していたのかは分からない。しかし、それは、私の中の何かを大きく動かし、「哀しい」という新しい感情が生まれた。内容は、[他の国から大勢の人がベトナムに来る。他のアジアの人達や、ヨーロッパの人達。これは非常に良いことである。だが、ヨーロッパの人達は、背も高く顔もかっこいい。尚且つお金もたくさん持っている。彼らがベトナムに来て、大勢の女性を連れて行ってしまう。僕らはどうすれば良いのか]。この問いに、私はただ相槌を打つだけで答えることができなかった。何とも言えない「哀しい」気持ちになった。外国人が観光に来て、よく聞く問題は、[マナーが良くない、ゴミを堂々と路上に捨てていく、物を盗む]などがある。しかし、今まで、このことについて考えたことも、聞いたこともなかったと思う。これから、考えていかなければならなく、問いに対する答えを見つけなければいけない。

村での私達の活動として、地面に穴を掘り、そこに柱を設置し、コンクリートで埋め、ゴミ箱をいくつも設置した。関ゼミの一つのテーマである、SDGsの為の活動だ。今までは講義を聞き、どうすればSDGsの17の目標を達成できるかを考え、話し合うだけであった。このように行動に移し貢献したのは、今回が初めてであった。初めて行動に移し分かったことは、極めて小さなプロジェクトにもかかわらず、非常に体力的に大変だということだ。しかし、このような小さな取り組みを止めることなく、今後のこのゼミが続けていけば、周囲も徐々に影響され、取り組みに参加する人々も増えてくるかもしれない。一人ではなく、二人、三人と、烏合の衆ではない軍団ができれば、より発展していく。このことが、もしかしたら私達のゼミの取り組める「持続可能な開発」のもう一つの目標かもしれない。

村を出て、ホーチミンへ戻ってからは、時が経つのが早かった。ホーセン大学に戻り、入院していたゼミメンバーの退院「記者会見」（記者役は我々とベトナムめんば

ー）。そして、一人一人のスピーチ。時間は、台風のように進路が決まっており、決して戻りもせず、過ぎていった。
　結果的に、プログラムは成功へと導かれ、空港での涙の別れとなった。この時の感情は「悲しい」であったとともに、「幸せ」でもあった。メンバー全員が、この時は同じ気持ちであったと思う。

　最後に、一つ。私は一人のベトナムメンバーに(いつも笑っている)と、笑顔で言われた。６月に関ゼミが開催したネパール支援家垣見一雅(OKバジ)氏の講演会で、垣見一雅氏は、《The surest way to be happy is to make others happy》とおっしゃっていた。この人を幸せにする方法の一つとして、自分自身が常に笑顔でいることだと、この研修中で理解することができた。

「入院生活」

東京経済大学経済学部２年
新井　徳郎

はじめに
　私たち関ゼミは９月３日から9月15日の約2週間ベトナム研修を行いました。私個人としては初めての海外旅行だったので、最初から最後まで刺激的な出来事の連発でした。中でも最高に刺激的だったのは、初めての入院生活です。結果からいうとただの胃腸炎でしたが、初めての海外旅行だった私は高熱が出た時点で死を覚悟していました。おそらく数年前に東南アジアの伝染病について頻繁にテレビで取り上げられていたことが原因だと思います。そのことから無意識に”東南アジアで熱出たら死ぬ”という固定観念を作ってしまったのだと思います。それに加えて日本人の病院の概念を覆すような病院に連れていかれたことで普通の精神状態ではなかったです。
　ベトナムでの入院生活は大変なことがたくさんありました。しかし、そんな過酷な５日間を過ごしたことで私は私自身の成長を実感できました。以下では二週間の研修を終えて考えたこと、学んだことを明らかにすることを目的とします。

入院中

９月９日の夜に発熱しました。先生とタクシーで向かった最初の病院は、見るからに医療ミスの発生しそうな病院というのが最初の印象です。あと英語が通じる人が少なかった気がします。ベッドに寝かされて数時間後、深夜二時頃、関先生がホーセン大学の先生と交代していなくなった時、パニック状態だった私は病院のすべてに疑いを持っていました。点滴の薬を間違えてないか。毒が混入していないか。本当に彼らは医者なのか。そんなことばかり考えていると眠気がなくなってしまい、結局ほとんど眠れないまま朝になってしまいました。朝になると関先生が来てくれて、怒られた後の日本人メンバーの反応（関先生に内緒でベトナムメンバーとコーヒーショップに行ったのがばれた）のことを話してくれたので少し落ち着きました。先生のおかげで、少し眠くなったので寝る準備をしていると、清掃員のようなおばさんが車いすを引きながら現れました。その清掃員らしきおばさんはベトナム語で話しかけてきて、おそらく身振りから察するに”座れ”と言っているようでした。看護師ではなく清掃員だったのでどこに連れていかれるか心配だったのですが、清掃員の圧力に負けて乗ってしまいました。連れてこられた病室は戦争系のドラマでしか見たことのないような病室で、その病室に入った時点で眠気は一切なくなり、またパニック状態に戻りました。私がベッドに横になってソワソワしていると、隣のベッドのおじさんがベトナム語で話しかけてきて、点滴の薬の量を調節するところを触り始めました。今考えるとたぶんおじさんは私の点滴に血が逆流していることを指摘して、血の逆流を止めてくれようとしたのだと思います。しかし、パニック状態で、医師のことも全く信用していない僕にとって同じ患者に点滴を操作されることは死に直結する大事件でした。必死に”STOP”と連呼して、ナースステーションに逃げ込みました。しかしまたあの清掃員のおばさんにすぐに病室に戻されてしまい、私にできることは寝て現実から離れることだけでした。その日のお昼頃、先生から病院を移ることを知らされて、そのまますぐに次の病院へ向かいました。

次の病院はWi-Fiも通っていて、英語も通じる、掛布団も枕も平らな床のある、前の病院と比べると天国のような場所でした。ただ1つだけ、ご飯が想像を絶するほどまずいという欠点を除けば。特にチキンのおかゆとキャロットスープ。においだけで吐き気がして食べられませんでした。しかし、天国とは言っても全くやることがなく、体の動きは制限されるのでスマートフォンをいじることしかできず、退屈で無意味な時間を過ごしてしまったことを後悔しています。救いだったのが、ベトナム人メンバー２人がお見舞いに来てくれたことと日本人メンバーとのラインです。ベトナム人メンバーは二日間もお見舞いに来てくれて、面会時間のギリギリまでたくさんベトナムのことを教えてくれました。日本人メンバーは、ビデオ通話や私が入院中の出来事の写真をたくさん送ってくれました。

退院

退院日、病院を出発してそのままホーセン大学に直行しました。実は数日前から体調が絶好調だった僕は、やっと退院できた！と喜びでいっぱいでした。関先生と大学に到着すると、驚きの「記者会見」が待ち受けていました。記者役は日本、ベトナムメンバーで、「偽」記者会見でしたが、ホーセン大学の方々も協力してくれ、偉いお客さんが来訪した時にしか使わない部屋を貸し出してくれたと後に聞きました。みんなは、相当に準備したらしく、事情を知らぬ人からすると、明らかに本当の記者会見にしか見えず、とても緊張してしまいました。皆との再会を待ち焦がれていた私は、興奮してしゃべり続け、司会から話を止められる一幕もありました。

その日、みんなと夕食を終えた後、自分の部屋で前の病院での出来事について思い出していました。前の病院での生活は確かに大変でした。でも結果私は健康に生きていました。それはつまり、両方の病院の医師の施術が間違いではなく、最良の施術だったことの証明です。それに、車いすで私を運んでくれたおばちゃんは、ただ私を病室まで運ぼうとしてくれただけで、点滴を操作しようとしたおじさんは、私の血の逆流を止めようとしてくれただけでした。冷静になった私は入院中に出会った人すべてが、私を助けようとしていてくれたことに気が付きました。それと同時に、そんな親切な人たちに、疑いの気持ちを持って接してしまった自分の愚かさにも気づきました。

まとめ

私が今回の入院生活で学んだことは2つ。1つ目は、ベトナム人のやさしさです。本報告書では、病院で出会った人のことしか書きませんでしたが、入院する前や、退院後のベトナム人学生との交流の中にも優しさを感じることはたくさんありました。個人的に、そこら辺にいる日本人よりも優しいと思います。2つ目は、固定観念は捨てるべきだということです。そのせいで無駄に神経をつかい、恩人たちに悪態をついてしまいました。日本に戻った今でも後悔しています。

ベトナムで感じた後悔は入院生活以外でもたくさんありました。ですがそれ以上にうれしいこともありました。個人的に一番うれしいことは友達が増えたことです。出発前はほとんど日本人だけだったFacebookの友達がいまでは日本人と同じくらいベトナム人の友達がいます。中には今でもメッセージをやり取りしている友達がいます。いつかまたベトナムに行って友達に会うことが私の新しい目標です。

「夢のような2週間」

東京経済大学経営学部3年

侯 怡康

わずか二週間の夢のようだったベトナム研修を終え、6時間かけて東京に戻った。期待と不安を抱いたままこのプログラムは始まり、最後には涙を流しながら手を振って別れを告げて終わった。嫌な時や楽しい時もあった。驚きと感動もあった。そして、全員の協力と努力のおかげで、忘れることができないプログラムにできて、非常にいい経験になった。

そもそもなぜ私は関ゼミに入り、VJYE(Vietnam Japan Youth Exchange)プログラムに参加しようと思ったかというと、理由は二つある。一つ目の理由は、ベトナムを見てみたいと思ったからである。なぜなら、私にはバイト先や、私が以前日本語学校で勉強していた時に知り合ったベトナム人の友人がおり、彼らの優しさや、人とのコミュニケーションのうまさに非常に感心したからである。一体ベトナムはどのような国なのだろうと思い、非常に興味がわいた。二つ目の理由は、今まで学んだ英語を実際にコミュニケーションの中で活用してみたいと思ったからである。

今回の研修は様々なことを感じたなかで、主に3つのことを学ぶことができた。それは、環境への適応能力、コミュニケーション能力、チームワーク能力である。これからこの3つについて述べていきたい。

はじめに、環境への適応能力について話そうと思う。私達が到着した時は深夜で、周りは暗くて見えないが、中国の南の方のような気候を感じた。次の日の朝、外へ出

ると、ベトナムの雰囲気はまるで中国の南の町に似ており、特に違和感を覚えず、すぐに慣れた。しかし、辛い食べ物が食事によく出るので、時々お腹が壊れてしまった。このことから、外国で食事する時には自分の体の調子によって、何を食べられるか食べられないかを自分で判断することが非常に重要であることがわかった。食事だけではなく、気候によって水分を適度に補給することも忘れてはいけない。可能な限り速やかに環境に適応することは、それ以降のプログラムをうまくいかせるためにも重要だ。早めに環境に慣れないと悪循環に陥る可能性があるかもしれないので、十分注意することが大事である。

次にコミュニケーション能力である。初日から1日中ベトナムのメンバーと英語で話した。ホテルに戻ると非常に疲れを感じた。なぜなら、今まで1日のほとんどを英語で話したという経験がないため、まず相手が伝えたいメッセージを受け取り、理解して、そして自分が相手に伝えたいメッセージを頭の中で英語に翻訳して話すという流れを1日中繰り返すこととなったからである。ベトナム人とコミュニケーションを取ることは楽しかったが、この一連の作業は非常に疲れた。しかし、時間が経つにつれてその流れをだんだん簡略化することができるようになり、最後には相手の話す英語を受け取り、英語で相手のメッセージを考え、英語で話すという一連の流れに慣れていた。いくつかの単語や文法などを覚えることはもちろん重要だが、それよりも今まで学んだ知識をどうやって使えるかがもっと重要なことだと思う。これからも、自分の活動や、他人とコミュニケーションをうまく取るために英語の学習に励みたいと思う。

3つ目は、今回のプログラムの中で学んだ一番重要な能力、チームワーク能力である。私たちが披露したパフォーマンスや、ベトナムの田舎の村にごみ箱を設置する活動、Ta Lai Longhouseでのいかだレースなど、チームワークは様々な活動の中で必要になった。チームワーク能力は、人々が互いに協力し合うための試練を与えることである。チームの中で役割がどうやったらうまく分担するか、あるいは人の苦手な部分をどうやって互いに補いあうか、これは無視できない非常に重要なことである。それに加え、チームワークの中では、リーダーシップ能力も必要である。人々はチームワークの中で自分の得意な分野を活かすか、リーダーを担当して、活動が円滑に進むように努力する。チームワークと皆一人一人がリーダーシップ能力を発揮することで私たちのゼミ研修はスムーズに終えることができた。VJYEプログラムのおかげで、わずか二週間だが、様々な経験をすることができ、何人ものいい友達にめぐり合い、私たちにとって大学生活の中で最も素晴らしい時間となった。

「ベトナム研修を終えて」

東京経済大学経済学部3年

村上　弘明

9月3日から二週間の海外研修に参加した。今回のベトナム研修は、私にとって二回目となる海外渡航で不安もあったが、とても多くの事を学べたと思う。これから、私がこの研修で学んだことや感じたことを述べたうえで、私の今後の在り方について述べていく。

まずは、私が二週間ベトナムに滞在して気づいたことについて述べていく。私が気づいたのは日本とベトナムの関係性の良さだ。学生交流をしている時も、日本が好きで日本語を話すことができる生徒、日本のアニメやキャラクターを知っている学生が多かったように思う。大学でも日本語を教わる機会があるそうで、世界的に見たら役に立たないはずであるのに、日本語に興味を持っていてくれて嬉しかった。

また、ベトナム戦争の背景を学んだ時に、日本とベトナムの今の関係性がとても深いことが分かった。現在は、ベトナムと日本は非常に親睦が深いが、ベトナム戦争の最中は、直接的に敵対していたわけではないが、今ほどの友好関係はなかったであろうと思う。しかし、枯葉剤の被害を被って生まれてきた子どもたちをみた日本人の医者が、人道的観点から救済を試みたのがきっかけで少しずつ関係性が改善されていったのだと学んだ。ベトナム戦争の写真が展示されている博物館では、枯葉剤がもたらした最悪の被害の写真を見てとてもショックを受けた。また、今回の研修では被害を受けた子どものひとりであるドクさんとお会いできる機会もあり、ベトナム戦争の悲惨さを生で聞くことができた。人は過ちを犯さないと気づかない生き物で、平和の重要性についても改めて考えさせられた。

次に、私が学んだのはコミュニケーションの取り方と英語の最重要性である。これはベトナムに渡航する前から分かっていたことだが、日本にいるのと現地に行くのとはまるで違い、ベトナム人が話す英語にはベトナム人の癖やイントネーション、日本人が話す英語にも日本人のそれらがあると分かった。しかし、外国人とでも英語を使えばコミュニケーションが取れることに喜びを感じた。英語は本当にすごいと感じた。中には困った場面もあった。まるっきり違う発音があって、意思疎通に困難が生じるような癖もあった。これは逆に、ベトナム人学生にもいえることで、私の英語が通じない場面が多々あったように感じた。また、ベトナムと日本は同じ、英語を主言語としない国であるにも関わらず、ベトナム人学生のほうが私たちより流暢に英語を使いこなせて

いたような気がした。しかし、このことが俄然私をやる気にさせた。同じ主言語としない国の人たちでもこのくらい話すことができるなら、自分ももっと勉強してやろうという気持ちになることができた。

また、学生交流のなかで話すネタがないというようなことに陥ることはなかったが、話を深く掘り下げることができないという点で悔しさを感じた。ベトナム人学生はとても面白くて頭もよくて、もっと深く語りたかったが、深い話になるとただ、頷いて聞いているだけになってしまっている自分がいた。しかしながら、意思疎通ができなくても、笑顔があれば乗り切れることも学んだ。日本人学生の中にはノリでその場を乗り切ってしまえる人もいてうらやましく思った。私ももっとノリや笑顔を大切にしようと思った。

HUTECH大学での交流

もう一つ、印象に残ったのが、「持続可能な開発目標（SDGs）」における活動である。持続可能な開発とは、現在だけではなく、これから先将来も、世界中の人々が安心して、自分の能力を十分に発揮しながら、満足して暮らせるようにするために、国連が掲げた目標である。私たちは中でも、主に環境問題に焦点を当て、現地に訪れる前に各自でパワーポイントを作り、それを発表した。スライドの内容は、17のグローバル目標のうち、各自が選択した課題と、日本における環境問題の解決策について示すものであった。発表の際には緊張しすぎ、原稿に目が行ってしまった。また、その後の講義では主に、ベトナムについての環境問題が話されていたが全容が聞き取れず質問することができなかった。ここでも自分の勉強不足を思い知り、専門家である講師の先生に失礼なことをしてしまったと思った。しかし、村でのごみ箱づくりの活動はとて

も達成感があった。学生たち全員で協力して、村にリサイクルボックスを設置した。暑い中いくつも穴を掘り、何度も往復しセメントを運んだ。村には都会とは違った雰囲気の人々が住んでいて、村の子どもたちもずっとその活動を見守っていた。村の人々はホーチミンとの格差も感じたが、みんな楽しそうに見えた。

村の子どもたちとの写真

最後に、ベトナムでこれらの貴重な経験ができて二週間本当に充実していたと思う。日本に帰国後も私の英語学習に関するモチベーションは依然高いままで、ベトナム人学生とも今も連絡を取り合ったりしている。また、英語学習時間がベトナムを訪れる前に比べて確実に増えたと思う。今回の研修を経て、私の海外に関する関心がさらに深まった。これまで、私の将来の夢や目標は漠然としたものであったが、英語を使っていろいろな人々と交流できるような仕事に就きたいと強く思うようになった。英語学習に関しても前に述べた通り、ベトナム人学生だったからこそ切磋琢磨できた部分もあったに違いないと思う。

ただし、この研修では私はベトナムのほんの一部を知ったに過ぎない。ベトナムが発展途上国と言われる、その理由の部分について詳しく知ることができたわけではない。これから、さらに英語能力を向上させるとともに、ベトナムについてもっと関心を寄せていきたい。

「大切なもの」

東京経済大学経済学部3年

山田　悠貴

私は、このゼミ研修で訪れたベトナムが人生で二回目の海外になりました。しかしアジアの国に訪れるのは今回が初めてのためこれからどのような生活を送り、今までの生活と違う所はどこなのかなど多くの期待を抱いていました。今回の研修では、実際に現地の学生と交流しながらプログラムを進めていくという内容であったため、初めはもし彼らが内向的で話かけてもらえなかったらどうしようという不安もありました。しかし、彼らも私たちと同じ気持ちでいるのではないだろうかと考え、顔合わせの際に自ら積極的に話しかけてみようと私の中で決意し実行してみました。すると数分後には、初対面という感覚からすでに知り合いであったかのような仲になることができ、ベトナム人学生のフレンドリーさに驚きました。これを機に壁が一気になくなりトランプやUNOをするようになりました。そんな中一人その輪の中に入っていないメンバーがいたため私は彼を誘いに行ったのですが、彼には断られてしまいました。その時に言われた言葉が、「自分は親に二つのことを禁止されている。一つは飲酒、もう一つはカードゲームなんだ。」と彼は言っていました。このことを受け、後日違うベトナム人メンバーに親をどう思っているか聞いてみたところ、彼らは口をそろえるかのように同じことを言いました。「私たちは親のお金で食べ物に困ることなく暮らせている。だから親とした約束は守るし親を悲しませるようなことはできない。」このように言われ、今までそ

れが当たり前だと考えていた自分の恥ずかしさを知ることができました。当たり前のことが当たり前でなくなっていたことに気づかせてくれた彼らの性格を、このことからさらに知りたいと思いました。

次に、私たちは彼らと一緒に今年のゼミのテーマでもある「持続可能な開発17の目標（SDGs）」の講義を受け、そこで事前に調べていた世界で起きている現象、日本で実際に取り組まれている内容をプレゼンテーションという形で発表し、現地の大学教授から幸いにも高い評価をいただきました。また、実際に市内でゴミ拾いを行い持続可能な開発に関わることも経験しつつ、ベトナム人学生と苦労をともにしながら話すことでよりお互いを知ることができました。ベトナムではゴミ拾いのボランティア活動をすることが非常に珍しいことであるらしく、なぜ日本人がここまで快く引き受けるのか、と何度も質問されました。ベトナムではゴミが路上に落ちているのは当たり前のことで多くの場所で綺麗にしようという気持ちがないと言っていました。そんな中、話の内容をシェアしたことで彼らがより日本が好きになったと言ってくれた時はとても嬉しかったです。

後日、私たちはベトナム南部のTa Lai村という場所にいき、そこに定住している民族の文化に触れました。そこでは民族独自の織物や狩猟のため昔使われていた武器、そのほかにもネックレスやイヤリングなどがあり、まるで自分がテレビの中に来ているような感じがしました。このような文化を実際に体験させていただいたこともあり、私たちはこの村の役に立てることがないかと考え、村をきれいに保ち文化を伝えていくためにこの村全体におよそ22個ものゴミ箱を設置しました。朝一番にいくつかのグループに分かれ、あらかじめ決めていたポイントに道具を持っていき、穴を掘る作業を行いました。深さ、高さ、幅がおよそ50センチになるよう交代制で掘り続け、それが終わると一度集合場所に戻り、その場で砂、石、水からコンクリートになるものを作りました。そのコンクリートとゴミ箱を設置するための支柱を掘っていた数か所の穴に持っていきそれをコンクリートで固めました。乾くのに1日待ち待ちましたが、その後無事ゴミ箱を設置することができ、すべてが完成しました。ゴミ箱に鍵をかけ設置した際の達成感はとても大きく、現地の人の満面の笑顔と同じくらいかけがえのない思い出となりました。ベトナム人学生メンバーと私たちが行ったゴミ箱設置がその村で今後役に立ち続けていってもらいたいです。

この研修を通じ、ベトナム人の文化、歴史、生活などをベトナム学生から直接学び、互いのことについて伝え合うことで、小さくても海外と繋がるネットワークができました。ここで学ぶことのできた知識は私の考え方を変えさせてもくれました。いただいたネットワークを大切にしていきたいと思います。

ベトナムと日本の友好関係の懸け橋になったと言われている枯葉剤の被害者、ドクさんから直接ベトナム戦争のお話を聞いたときにはとてもショックな気持ちになりました。日本がその戦争に関わっていたこと、被害を受けた人々の子孫がいまだ枯葉剤

の影響を受けていること、そして何よりも戦争がもたらす被害の大きさを改めて知りました。このような詳しい内容もベトナムに来たからこそ知ることができたのであり、このようなネットワークを広げていきたいと思っています。

多くの体験をこの短い2週間の中でさせていただきましたが、一番大切なことを最後に述べさせていただきます。それは笑顔です。初めてベトナムメンバーと話した際、笑顔があったからこそ友達になれました。Ta Lai村で写真を撮った際、子供たちは英語を理解できず僕はベトナム語が理解できないため、言葉ではコミュニケーションをとれませんでした。そのため笑顔で彼らの目を見ながら手招きをしたことによって彼らとも写真を撮れました。ドクさんもプレゼンテーション後には笑顔で写真撮影に応じてくださりました。何においても笑顔があることによりコミュニケーションが取れ、初体験の不安や、悲しみから救われることができるとこの研修を通してわかりました。これからも笑顔を大切にして、ここで学んだことを私の生活に生かしていきたいです。

「異文化を超えて」

東京経済大学現代法学部３年

穴田　麻由佳

最初に私がVJYEプログラムに参加したいと思った理由は、もともと異文化交流には興味があったものの、これまで日本以外に訪れたことのなかったアジアの国に訪れ、現地の学生との交流をする機会なんてこの先滅多にないだろうと思ったのがきっかけだった。私は東京経済大学の関昭典ゼミでゼミ長になり、この研修でリーダーとして務めることになった。この時はまだ、この研修でどんな体験をするのか想像もつかなかった。

9月3日、ホーチミンに着いた時には、既に夜の12時を回っていた。ホーチミンに来てまず驚いたことは、バイクや車の通りがものすごく多いことだ。道路を渡る時にも容赦なく左右から迫ってくる。ホーチミンはとても暑かった。

9月4日、ベトナムメンバー全員と対面する。そこでベトナムメンバーの1人とバディを組むことになった。私のバディはタンという女子学生だった。何を話せばいいのか悩んだが、タンは積極的に話しかけてくれた。彼女はとても親切で、私が初めて仲良くなったベトナムメンバーだった。

ベトナムメンバーとはスポーツやナイトツアーなどを通してさまざまな交流をした。小学校から大学まで訪問し、ベトナム戦争で使用された枯葉剤の被害者であるドク氏と食事をし、ご講演を聞くという貴重な時間も過ごした。

ベトナムでの日々は1日がとても長く感じた。充実した毎日だったが、楽しいことばかりではなかった。1日中日本メンバー・ベトナムメンバー全員でずっと一緒にいるため、自由時間はほとんどなかったし、英語を話し続けると疲れてしまい、つい日本語で話してしまうこともあった。また、リーダーとしての責任や仕事の負担も大きかった。何をすればいいのか誰よりも考えなければならなかったし、上手くいかないことも多くて、リーダーというだけでこんなにも苦労するものとは思わなかった。1人ではどうしようも出来ず、周りの助けも必要だった。違う環境で過ごしながら、リーダーとしての仕事をすることに精神的に疲れ果てていた。

そんな中、私が最も印象に残ったタライでの4日間が始まった。ホーチミンからバスで約4時間走り、タライに到着した。景色は所々で建物や人が見えるくらいで森と道しかない。今までに見たことのない光景だった。やがて私たちが住むロングハウスへと到着すると、私は小屋の中や周辺を探索した。虫がそこら中にいて、シャワーはほぼ水であった。小屋の中は薄暗く、蚊帳付きの布団がずらりと並んでいた。その時私はすでに帰りたいと思った。唯一の救いは、Wi-Fi環境があることと美味しいご飯だけだった。

タライでの4日間は本当に過酷であった。2日目は朝からサイクリングをし、ジャングルの中を歩いた。雨が降った後のサイクリングだったため、泥道と水たまりの中を1時間以上にもわたり走った。通るたびに泥がはねるため、靴も服も泥だらけになってしまった。ジャングルの中はとても酷いものだった。ヒルに噛まれるかもしれない恐怖の中、一歩間違えれば転びそうな急な道を歩き、大量の虫が気持ち悪くて自然と足早になった。サイクリングで疲れた後にこんなジャングルを歩かされて、正直散々だと思った。3日目はグループに分かれて町の中にゴミ箱を設置するために地面の穴掘りをしたが、私は力が足りずに全く役に立てなかった。最終日にはグループに分かれていか

だ作りをし、川でレースをした。いかだを漕ぐのは想像以上に大変だった。私のグループのいかだは全く進まずに、その上私は途中で川に落ちてしまい、その時ばかりは本当に泣きそうになった。

しかし、つらいことばかりではなかった。夜にはみんなでトランプや、音楽を流しながらバンブーダンスやゲームをして楽しい時間も過ごせた。私がくじけそうになったり疲れていた時でも、メンバーのみんなが一緒にいたから何度も助けられたり励まされたりもした。つらいことも楽しいこともみんなと一緒に体験してきた。いつの間にかタライに行く前の疲れはすっかり消えていた。そんな場所であったためか、最初はあんなに帰りたいと思ったのに、タライを去る時はなんだか少し寂しく感じた。

タライでの日々を終えて、日本へ帰る日も迫っていた。最終日にはベトナムメンバーと一緒にショッピングをした。初日にバディになったタンも一緒で、服や日本へのお土産一緒に選んでくれた。服を選んでいる時、私はタンにアドバイスをもらったりして、その時は普段友達と話しているような感覚でとても楽しかった。夕食をとるためにホテルに戻った時、私は急にふと寂しい気持ちになった。やっとみんなと仲良くなったところなのに、もう日本に帰るなんて信じられない、

そう思った。明日も明後日も、またいつものようにベトナム学生と一緒に過ごす1日が始まるような気がしていた。フロントに戻り、外を見ると、ベトナムのメンバーが涙を流しているのに気づき、私は少し驚いた。別れが寂しいのは私だけではなく、ベトナムのメンバーも同じ気持ちでいたということがわかったからだ。私はそこでタンから、私は空港まで見送りに行けないから、ここでお別れと言われ、思わず涙を流せずにはいられなかった。今日一緒にショッピングできたことが本当に嬉しかったし楽しかったと伝えたら、彼女も目に涙を浮かばせて、またいつでも連絡してベトナムにも来てねと

言ってくれた。空港に向かうバスから見えるいつも見ていたホーチミンの景色は、とても悲しく感じた。空港に着いて、そこで待っていたメンバーと再会し、また涙がとめどなく出てきた。ここでみんなと過ごした時間は私にとってとても思い出深いもので、別れが来てしまったことが本当に悲しかった。

この研修を通してわかったことはまず、リーダーになるというには決して簡単ではないということ。失敗も多かったし、周りからの助けがなければこの役目を果たすことも出来なかった。また、異文化を体験し、文化の違いを乗り越えていくことは決して簡単なことではないということ。異文化を超えて人と関わるということには嬉しいこともつらいこともある。しかし、同じ時間を共に過ごし、同じ体験を共にすることによって、一緒にいることが楽しいと思えたり、別れが寂しいと思えたり、同じ感情を持つことができる。それは違う国で生まれ違う環境で育ったことなどは関係なく、そこで共に過ごした経験は思い出深いものであり、そこでの人との関わりは、何にも変えることのできない価値があるものだと思える。

「現場の大切さと日本の誇り」

東京経済大学経済学部3年
北野 宏晃

今回の研修で最も印象的だったことは、ベトナム先生で使用された枯葉剤の被害者、グエン・ドク氏の講演会である。私は小学生の時、環境問題に関する図鑑を読み、そのとき、私は幼少期のベトさんドクさんを見つけ、強い衝撃を感じたのを覚えている。今回、ドク氏本人と間近でお話を聞く貴重な機会をいただいた。この講演会を通じて得たことが2つある。

1現地の方から戦争を理解する大切さ
2ドク氏が個人的な面と経済的な面で日本に強い感謝の気持ちを抱いていた

ドク氏のお子さんのために寿司ゲームをプレゼントしました（右がドク氏、左が北野）

1　講演会の時、ドク氏が訴えていたものはベトナム戦争の悲惨さであった。パワーポイントを使用しながらの講演であったが、スライドの内容は、戦争の被害に関する写真が多く占めていた。私は中学・高校時代歴史が得意だった。もちろん、ベトナム戦争についても学んだ。だから、私は講演会が始まるまで、ドクさんがお話しされるベトナム戦争について完全に理解できていると思い込んでいた。しかし、それは私の傲りであった。出てきた写真は、学校の教科書に載せるのが困難なほど、残酷なものばかりであった。その写真のほとんどが初めて見たものであり、あまりの衝撃に私の脳の処理が追いつかなった。

分離手術前の故ベトさんとドクさん

　ベトナム戦争は、私が想像していた以上に非人道的だった。そして、残酷なのは当時の写真だけではない。現在でも、ベトナム戦争（主に枯葉剤）の影響で障害を持った子どもが生まれているのだ。その確率は3%にも及ぶという。形式上ベトナム戦争は終わったが、40年以上経過した今でも痕跡は残っている。つまり、ベトナム戦争はまだ終わっていないという驚愕の事実を知った。私はあっけにとられていた。

　現地の方から戦争を理解する大切さ。この講演を通じて学んだことの1つである。

　前述のように、私は、教科書等でしっかりと学習したにも関わらず、衝撃のあまり「脳の処理が追い付かなくなった。」「あっけにとられていた」そのような瞬間があった。つまり、私は表面的にしか理解できていなかったということだ。教科書や、文献で知識や原理原則を理解する。ただ、それだけでなく「現場で見て学び理解する」「現地の人から現状を聞き、理解する。」この2つも付け加える事が最重要だと感じた。今回、ドク氏の講演会のように現地の人から現状を聞いて理解することで、より戦争の悲惨さを学んだ。そして、この講演で、一つの結論が導きだせた。「戦争が起こる原因は、相手をわかろうとせず無理解を引き起こして衝突するパターンだけではない。戦争を起こす者達が、戦争の悲惨さを知らないことである。」まずは、自分達が戦争の悲惨さを十分に理解し、それを後世に伝えることこそが、我々にできることではないかと考える。また、それが戦争のない平和への第一歩とも考える。

2 「分離手術には、日本の医師が協力しただけでなく、募金などのサポートもあったから成功できた。だから、日本に強い感謝の気持ちがある。今後も日本とベトナムの友好を継続するために、多くの人の関心を集めたい。こういう訳で、ドク氏の双子の子どもにサクラさんとフジサン君と名付けた。」このエピソードを聞いて、私は感銘を受け

た。また、ドク氏のように、日本の行いに対して強く感謝してくれる方に出会ったのも初めてであった。だから、目の前で感謝の意を述べられ、更に、子供の名前に日本の象徴を使ってくれたということに、日本人として誇りを感じた。

そして、ドク氏は自分のことだけでなく、ベトナムの経済発展も日本が大きく貢献していると称賛していた。事実、市街地を歩くとそれは実感できる。例えば、コンビニはサークルKやファミリーマートが多く存在していた。即席麺もACECOOKが手掛けており、人気を博していた。また、今回我々が利用したタンソンニャット国際空港も、日本政府からの円借款を受けて作られたものである。このように、ベトナムでは日本企業や直接投資でたくさんの恩恵を受けている。ドク氏の講演だけでなく、実際に現場に行ってこのようなことが感じられた。

日本、ベトナム、私の将来

今後、ベトナムはさらに発展し続けるであろう。なぜなら、ベトナム人はハングリー精神旺盛で、勤勉かつ平均年齢も28歳と若い。その一方で、日本に対して危機感も感じた。日本は、裕福で恵まれた国である。故に、余程のことがない限り飢え死にすることもない。だから、ハングリー精神が感じられない。また、ベトナム人の多くの学生は、朝7時から夕方5時まで必死に勉強するが、日本の大学ではそれがあり得ない。そして、日本は平均年齢が46歳と高く。今後も少子高齢化の影響で国内市場も縮小するであろう。

今の私にできることは、ベトナム人に負けない位勉学に励み、今回学んだ「現場に行って理解すること」を大切にして、見識を深めるつもりだ。そして、将来日本、ベトナムだけでなく、多くの国や人に貢献できる人財になれるよう今から精進する。

ドク氏を囲んで記念撮影

「VJYE プロジェクト　ベトナム研修から学んだ事」

東京経済大学経済学部3年
竹下 翔

今回、私は大学のゼミの一つである「関昭典ゼミナール」の研修生の一人として、2週間のベトナム研修に臨んだ。海外自体は初めてではなかったが、ベトナムに行くのは初めてだったので緊張もしつつ、何よりわくわくとした感情が自分の心の中に渦巻いていた。

以下に私がベトナムで2週間学んできた事を具体的に記す。

まず初めに、本レポートのタイトルともなっている「VJYEプロジェクト」について説明する。これは略称であり、正式名称は「Vietnam Japan Youth Exchange」である。初めて授業内でこのプロジェクトの正式名称を聞いた時は、私の脳内でただ単純に日本語に訳しただけであったが、今にして思えばこの名称には何かを考えさせられる、そのような力をひしひしと感じる。とりわけ「Exchange＝交流」について、その重みを経験を通じて強く感じるようになった。

持続可能な開発目標（SDGs）からの抜粋

次に、そもそも何故私達が海外研修を企画したのを記していきたい。今回私達関ゼミはSustainable Development Goals（持続可能な発展）略称してSDGsという国際連合が掲げた目標に向けて実際に自分達で行ってみようということで始まった。SDGsには計17個の目標があり、その中に：

・目標 15. 陸域生態系の保護・回復・持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・防止および生物多様性の損失の阻止を促進する。

・目標 17. 持続可能な開発のための実施手段の強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

という二つの目標がある。今回のベトナム研修で、この項目に重点を置いた活動を行い、少なからず貢献できたように思われる。この二項目に焦点を当てて研修中に印象に残ったことを記していく。

私達がベトナムに降り立ったのは、だいたい夜の１２時ぐらいだった。そこでこれから2週間ずっと行動を共にしていくこととなるHoasen大学の学生メンバーのリーダーたちと出会った。やはり最初はお互いに何を話せばよいかわからず気まずい様子が伺え、この調子で本当に何か学べるのかと私はずっと疑問に感じていた。

次の日にとある喫茶店でVJYEメンバー全員と初めて顔を合わせた。そして私は少し壁を感じてしまった。というのも、やはり会話手段が英語しかないという事である。私は今まで、英語を使う機会をこのベトナム研修以外に見つけようとしていなかった。そのため英語の重要性をあまり理解していなく、実のところ英語の学習を怠っていて、その結果、あちらの学生と上手くコミュニケーションをとることが出来なかった。ただその経験は無駄ではなかったと思う。というのも、おかげで英語の重要性を強く認識できた。日々の英語の学習を大事にしていこうと考えた。

ゴミ箱20個設置

ベトナム研修の中盤ぐらいであったか、私達は、Hoasen大学で日本の四季に関するパフォーマンスを行った。このパフォーマンスは、ベトナム研修前から一生懸命練習していたものである。練習の成果もあり結果的には大成功に終わった。私はこのパフォーマンスをきっかけにVJYEメンバーとの距離が近くなった様に思われた。そしてこの時点で、SDGsの目標17にやっと足を踏み入ることが出来たのではないかとひしひしと感じた。 次に、SDGsの目標１５への貢献について述べる。VJYEメンバー全員で行った公園でのゴミ拾いとタライという村でのゴミ箱設置がそれに当たる。タライという村で行ったゴミ箱設置は、穴を掘りそこにゴミ箱を引っ掛けるための棒状の物を入れて、最後にコンクリートを流し込むという、作業自体は単純なものであった。単純ではあるが地味に体力を使う作業であったため疲労してしまった。しかし、あちらの学生と村の住民と一緒に行ったゴミ箱設置は非常に楽しかった。

ゴミ拾いは、ホーチミン市にある公園で行った。日本と違ってやはりゴミがたくさん落ちていて、ほとんどきりがないように思えた。ただ、それもゴミ箱設置と同様に、あちらの学生と行ったのでわくわくしながらゴミ拾いを行うことが出来た。

しかし、これを読む方々の中にはゴミ箱設置やゴミを拾っただけで何をそんなに過大評価しているのだと思われる方もいらっしゃるだろう。現に私もそう考えていた。しかしながらそれは違っていた。世界に大きく影響した行動だけが称えられるのではない。1つ1つの影響は小さくてもそれを続けていくことで、それは塵も積もれば山となるのではないだろうか。

SDGsを意識しながら行ったこのゴミ拾いを私は一生忘れることはないだろう。

そして最も印象に残った出来事は、あの有名なグエン・ドク氏のお話を聞けたことである。我々の世代でベトちゃんドクちゃんのエピソードを詳しく知っている者は少ないだろう。私も詳しく知っていたわけではなく、実際にお話を聞いてみて、彼らが体験してきたエピソードを知らずに生きてきた私が非常に恥ずかしく思えた。

グエン・ベト氏はすでに亡くなっていて、グエン・ドク氏が私達に彼らの体験談をお話しして頂いたわけだが、ベトナム戦争で最も恐怖されていた「枯葉剤」が、日本で作ら

れたものを使用していたという事実に大変哀しみを覚えた。この事実は絶対に忘れることのないよう生きていかなければならない。

そしてお話の最後に、グエン・ドク氏がおっしゃっていた
「あなた達が世界に平和を広げていってほしい。」

この言葉に私は非常に感銘を受け、世界中の人々が実現させなければならない目標であると再確認することが出来た。

以上、私が2週間の研修中で特に印象に残ったことである。他にも多くの経験をさせてもらったが、長くなってしまうので省略とさせて頂く。
さて、ベトナムに研修に行き、何を学べたか、何を感じ取ったか、その経験を今後どのように実行していくかをまとめていきたい。
SDGsを目的に行ったVJYEプロジェクトであったが、私達は一定の成功を収めることができたと考える。まず、SDGsの目標15に関しては、公園でのゴミ拾いとタライでのゴミ箱設置で貢献できたであろう。そして、目標17にも貢献出来た。というのも初めは、ぎくしゃくしていた私達であったが、最終日にはお別れが悲しくて号泣している人もいたほど仲良くなった。それは、この2週間という短い間でもお互いがお互いを思いやり、そして同じ目標に向かって行動していった結果ではないだろうか。

この経験は確実に私を成長させた。これから私がどう行動し何をなすべきかは明確的ではないが、「SDGsの掲げた目標を軸にこの世界がよりよくなるよう行動していくべきだと」とまとめ、本報告書を終わりとさせて頂く。

「絶望から得たこと」

東京経済大学経済学部２年
畠山涼介

当初、私は9月3日から始まる2週間のベトナムの海外研修に参加する予定だった。しかし、ベトナム入国に必要なパスポートの有効期限が足りないことが、出発の3日前にわかった。授業中に関先生に再三確認するように伝えられていたので、自分のことが情けなくなった。このことをすぐさま先生に伝えた結果、ベトナムの大使館でビザを取得するよう助言をいただいた。
次の日、私はベトナム大使館へビザを発行してもらうために向かったが、大使館の職員からの説明を聞き、ビザを発行するのに2週間以上かかることがわかった。つまり、今回のベトム海外研修が参加できないことがこの時点で確定した。この時の私は

頭が真っ白になり、30分ほど何も考えられなかったが、とりあえず、先生とゼミ生、親に報告した。
報告後、私は、自分の確認の甘さに腹が立つ思いと計画をしてくれたゼミ生やベトナムの学生、関先生、また支援してくれた両親などに迷惑をかけてしまったという思いの両方で心がいっぱいだった。だが、私はその日の夜にある結論に達した。それは開き直りである。いつまでも過去のことを引きずらず、今できることをやっていこうという開き直りだ。この開き直りによって、自分にはまず、何ができるのか、なにをすべきかを冷静に考えられるようになった。

結果、まず出発までの準備のサポートを積極的にやっていくことにした。自分の担当であるメディア系の仕事はもちろん、ゼミ生で揃えるTシャツ選びなどを積極的に協力した。今思うと、この時の私は、ゼミ生のためというよりも自己満足のためにやっていたのだろう。

出発当日、私はゼミ生のお見送りをするため、成田空港へ向かった。その時の写真がこれだ。

実のところ、見送りをするのは少し抵抗があった。ゼミ生が私を軽蔑するのではないかという不安があったからだ。しかし、みんなに会ってみるとそんな不安は一気になくなった。いつも通り、楽しく会話をし、出発まで一緒に行動してくれ、ゼミ生のことを以前より好きになることができた。そこから私は、自己満足でサポートするのではなく、ゼミ生全員のためにサポートしていこうという気持ちに変わった。それから、お見送りをして、もう一ついいことがあった。関先生からのありがたいアドバイスである。メディア担当だから、みんながベトナムで撮ってきた映像を編集し、学内の賞を目指してみたら？という助言をいただき、私の中で目標ができた。学内の賞を目指すことだけでなく、ゼミ生の心の中に一生思い出に残るような映像、また他の人にもわかる、かつ頭から離れられないような映像を制作しようという目標が成り立った。

この目標が成り立つまで、たったの 4 日間しかなかったが、時間をたくさんかければ目標ができたり、考えが変わったりするとは断言できないことが今回わかった。自ら行動を起こすことによって、考えが変わるような出来事があったり、目標ができるような出来事や助言があったりするのだと気づいた。私はこのゼミに入ったことにより開き直ることを得ることができた。本来ならば、ベトナム研修に参加して開き直りとは違ったことを得るはずであり、すごく残念である。しかし、このゼミに入ったからこそ起こりうる出来事であり、私の人生の中で一番の絶望を味わうことができた。そのおかげで、これからの人生でも役に立つようなことが得られたと思う。

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016 (10) Mỹ Huyền "My dear friends in Japan"

My dear friends in Japan.

How time flies!!! It is just only a month that we were together but nothing can be out of my mind. Right from the first day we met, I was impressed because I had heard that Japanese people are quite hard to get closer but you were not. You were very enthusiastic that made us, Vietnamese friends, so happy. It was like the motivation for us to want to show you interest things in Saigon immediately. We had some drinks then took part in the City Tour. It was the longest that I have taken but I did not feel tired. We just wanted to show you guys all the famous landmarks in Ho Chi Minh City and told you more stories about our city, our country. Sometimes, we could not understand each other but we tried to make it easier to understand by body languages, by writing, by paiting,… That was very funny, we laughed a lot. We were like brothers and sisters who had not met for a long time. Too many things to share, too many stories to tell, too much feelings in that moment.

The culture day is the day I miss the most. We had plenty of opportunities to learn, to share to each other from Japan and Vietnam. Your Japanese performances were so awesome. We could understand you guys had prepared very hard. We hope that our performances can help you learn more about Vietnamese culture, people and ceremonies. And of course there were some

mistakes in the performances but it did not matter. The important thing is what we have got after that. Looking back all the photos that we took, it's like the yesterday. All the feelings always stay in our hearts.

I just join in several activities of VJYE2016 because I did not have much time. I was quite sad but I believed that you had the greatest time in Vietnam. My friends, you came back to Japan, some continued the study, some moved to other places to make your dreams come true. I give you guys all the best wishes. Don't forget us and keep in touch. I hope that when we meet up again, we will have more unforgettable memories together. You are always welcome in Vietnam, my friends.

I am very grateful to Mr. Seki and Tokyo Keizai University in Japan, Ms. Thuc and Hoa Sen University in Vietnam for giving us opportunities to connect Vietnamese and Japanese friends together and to learn from each other, to improve ourselves to be better, more mature. We wish that the AAEE organization is always growing sustainably and developing broadly not only in Asia but also all over the world. And VJYE is going to be the annual program between 2 schools, between 2 countries.

Me – us - once be friends, forever be friends. I wish you have successes in study, future career and in your life. Of course, taking care yourselves guys.

Miss you so much, remember to keep in touch.

Love,
My Huyen.

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016 (9) Cao Trần Trúc Quỳnh

I have a chance to meet interesting and talented people, I am motivated by them. At first, we were a little bit shy and stepped back from the conversations, from sharing. Through diverse activities such as the City Tour, the Vietnam Cooking class, Sport day, Hutech field trip… we got to know each other, overcame our shyness and we stared the conversation, shared the feeling, what happens in the day… like we are friends, not like a stranger anymore. Each Japanese will be the buddy of each Vietnamese but it does not mean the border. We can talk and be friend with everyone in the program. I can see what they think, how they act in some certain situations and in one way or another learn from them.

I remember the first day I met them on a coffee shop, everyone introduced about ourselves and we went around SaiGon, visited famous places. In spite of the heat and long walk, we still enjoyed the view, the traditional food and the history of Vietnam. In the cooking class, we learned and made the Vietnam spring roll. The easy way to connect people is through food. I like the Culture day, I have seen many spectacular performances from both Vietnam and Japan. The way they introduced Japan culture was very creative, funny and the performance really catch everyone's attention. Moreover, we tough them to how to say some sentences in Vietnam and in return we learned some in Japanese. If somebody say the whole sentence in the right way, they have a big triumph. And in the last day at the airport, the tear when we say good bye say it all about the project.

And to the Hoa Sen team, you guys are the funniest, coolest, the most "talkative" (in positive way) team ever and I am proud to be part of this team. For me, one of the importance purposes of an exchange program is to learn, understand and respect the differences of a new culture. I want to say thanks to Hoa Sen University, Tokyo Keizai University also AAEE for bringing us together. Thanks Ms. Thuc and Mr. Seki for creating the greatest time for us. Thank you so much.

The unforgettable memories are taken by my heart, good friendships are built and the lessons are learned. In the end, when I remember it all, it is definitely a treasured memory that will last till the end of my life.

Don't cry because it's over
Smile because it happened.

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016
(8) Huỳnh Nhật Trường

Through the time, we have learnt many things from our friendships, our life also from our experiences. In the casual life, every day is a happy day. We could learn from the university the knowledges, learn something from lectures and friends also we learn a lot in our life. In this September, it has been nice for ourselves to join and become an organizer, a host also a friend of Japanese students from Tokyo Keizai University in Vietnam – Japan Youth Exchange 2016. During this time, I studied not only the way to organize and prepare an education event but also about Japanese cultures through some cultural activities. Vietnam – Japan Youth Exchange 2016 gave me more than I can say.

First of all, I learnt about how to communicate with the Japanese and their cultures. In Vietnam, we learnt a lot from Hoa Sen University about cross-communication with many cultures in the world. VJYE has just gave me a chance to practice them. In the very first moment, I've felt it hard to become close friend with them because of the culture shock. Thanks to their cooperation, we have been closer and understood each other more.

Besides that, VJYE 2016 also gave the big chance for me to become a group leader. I gained more and more experiences for my future career also for myself. I still remember my buddies – Hiroaki Kitano and Yuki Yamada – thanks for letting me know more about Japanese cultures also becoming my close friends. So far so good, I also got for myself new friendships, from Japan also Vietnam.

They helped me to have another look about Japanese also had many memorable times together. Through many and many tours, activities also Ta Lai trip, we had a connection together and also gained for ourselves many skills we didn't practice or learn it before.

Everything always has good aspects also bad aspects. During the program time, I knew myself need to be more gentle and patient. My major is Travel Management so I need to be careful and pay more attention for my tourist also for myself. Also I needed to be thoughtful when I built the events. They taught me how to fix that as soon as possible and manage them carefully. Sometimes, it was failed but I tried to fix those problems. Thanks to Ms. Doan Thuc also Mr. Akinori Seki for giving the advices to fix those. The leader role wasn't easy thing but I was satisfied with this. Maybe I had many mistakes, but they were my challenges which I had to pass. This program was a time for us not only discover the new culture but also experience the new thing like an organizer.

Thank to Hoa Sen University, Tokyo Keizai University and Asia Association of Education and Exchange for making the chance for us to do something new. And after the program, I got for myself many new things, new experiences also new friendships. Thanks you so much, my friend. I want to say thank to Mayuka Ananda and Rino Yoshida for cooperating with me. Besides that, I want to say thank to my buddies - Yuki Yamada and Hiroaki Kitano also Hou Yikang, Sho Takeshita, Koushiro Ikeda, Hiroaki Murakami, Yuta Takahashi, Mai Kaneko, Zijie Zeng, Yuto Ishii, Suguru Kidachi for making the good memories together. Thank you so much.

"Best friends are the people in your life that make you laugh louder, smile brighter and live better"

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016
(7) Nguyễn Thị Kim Gấm

Hi guys! It was nice meeting you!

It was my honor to go in for VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) program. Already a month since I met you when you have arrived in Viet Nam. Time so fast! Every time I look at our photos, I miss all guys so much. When I joined this program, I have learned many interesting things about Japan culture and spent many happy time with you guys. To be honest, in the beginning I am too shy and afraid to talk to others using English. I cannot felt confident when I communicating with others. I was worried that I could not complete the work and do not make you feel comfortable in there.

Time goes by pass the two weeks makes me more open and very happy to stay with these guys. Because all guys are so kind, so friendly and open with me. When I see you smile, I also feel very happy. Though sometimes we can't 100% express our mind but we use eyes to interchange and use heart to communicate with each other. I really miss the time when we learned about tourism in the classroom, made the Vietnamese cuisine hand have experienced many trips together. I remember when you taught me to speak Japanese. I also taught you a little bit of Vietnamese and you said to me that “Em oi em dep qua!”

I remember when we ate meals together every day and you love Vietnamese traditional foods especially Pho, pancake, Raw shrimp

and vegetables,... In Ta Lai long house, we did a good teamwork to set rubbish box in the local village and made bamboo boat in the lake, we were dancing together, drinking wine and playing games. We have encountered many difficulties but we have been together solved in the best way. We have shared many stories and understand each other more. Especially some of you are so funny. I was laugh a lot. It is a precious memory for me and I think that you too.

Finally, I want to thank Hoa Sen University has make a conditions for me to join this program and thank Asia Association of Education and Exchange (AAEE) for bringing us the best moment in 2016. I also want to say thank you all guys in VJYE. Your guys make me stronger, more open and more confident, I will keep going and welcome you to Viet Nam once in anytime. I wish I could see all guys again. Keep in touch and talk anything to me if you need, my friends.

Once again, thank you for all!

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016 (6) Trần Thị Kim Trinh (Mymy)

This is the first time I participated in the program, it's from AAEE and Hoasen University organized. Especially, organizer is Mrs. Doan Thuc and Prof. Seki. At first I didn't know this program, then one of the members invited me to take part in this. Before it started, I thought the program was so bored because it just an activity about exchange between Vietnamese students and Japanese students. But it happened not as in my imagination, it was better than I thought. In the City Tour Day, also the first day we met each other so I was very nervous but I didn't mind that thing, I tried to calm down and got into conversation with everybody. Everyone introduced about him/herself and got acquainted with our buddy. I was so shy, therefore I didn't know how to talk with my buddy, and I hoped he could understand me.

After that we had a Culture Day, toward Vietnamese students we were proud of our items. When we enjoyed the shows of Japanese students. It was interesting and we loved it so much. We prepared thought you would wondering, Further those things made us happy. In sport Activity Day, when everybody enjoyed the games, it made everyone feel comfortable and funny though, both of us were very tired, I knew Japanese students felt joyful and open their mind. In the afternoon, we had a class each other to talk about environment, when the class started just had little Vietnamese students. We didn't know Mrs. Doan Thuc must stand the pressure, we felt guilty to mix the mistake and didn't make less things.

The best day felt wonderful and marvelous is the day when went to Hutech University. I was a shy girl and very few words but when joined in games between Tokyo Keizai University, Hoasen

University and some students in Hutech University I felt to need open my heart and I could learn a lot of things. It made me grow up and more convenient than I had ever enjoyed that. I felt I was very talkative with friends. That all memories I wanted you and me to keep in mind. Thanks for Hoasen University to make us have a relationship closer. Thanks for AAEE and Tokyo Keizai to give me a lot of best friend and taught me somethings about Japanese Cultural, language food or the others. I love it very much thus I hoped to see Japanese friends again and I never forgot you.

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016
(5) Hoàng Ngọc Đan Thanh

Hello everyone, my name is Thanh, I'm a final year student in Hoa Sen University. My major is Management in Restaurant.

When I first saw the hiring supporter attention of VJYE on Hoa Sen's Facebook, I just thought this could be a good mark for my Job application in the future. I wasn't really exciting until the program started.

The first day I met the Japanese members I felt a little bit distance and nervous, because I didn't know what should I do if we were

misunderstanding or had nothing to talk to. Luckily, AAEE had created a lot of chances for both students' sides to communicate. They are from Tokyo Keizai University and they were so friendly. Each of students had one to two bodies to take care. And my bodies are Mayuka and Kitwe was at the Trung Nguyen café and introduced to each other. Then we went on the city tour by walking.While walking, we talked a lot, we shared about each of our life. It was an interesting time! We visited the Ho Chi Minh post office, Notre Dame Catheral, the War Remnants Museum. We ate lunch at the Heritage. There were so many delicious food that we were too full. What's more, I made friends with all Japanese members, and gave Facebook contacts together.

The second day was the culture day. Student from both side had to have several variety of traditional performances. So I was in the Vietnamese dance group performing "Gam Hoa". After that was the Japanese performance. And I was very impressed by them. They were really talented. Some of them can play instrument very well, some of them can dance and so on. I felt a little of inferiority. But I overcame it because I was given the task to be the leader of the final dance performance for student from two sides. Due to the language distance, it was difficult to explain how to dance like this or line-up like that. Such a memorized experience ever! It was more difficult than I thought, because I had to explain how to dance like this and line up like that. So I just used all my body language and English. Fortunately, we did it very well.

The day and the following day, we did a lot of things together such as playing sports and games, studying. We also ate together, hang out and go shopping.

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016
(4) Đinh Bảo Ngọc

This was the first time I participate in school's program, so I was so nervous, but the time I and my friends prepared for VJYE2016 that was great time. I learned more the way to organize the program. Joining VJYE2016, I could get more experiences, it would be a chance to my career in the future. The first day, when our group met Japanese friends, I was so worried because I did not know how to open conversation with them, I scared my English skill that was not good and they could not understand. However when I met them, my feeling was changed, I felt more confident but I didn't know why. I just thought, I was the owner, I need to help them. Besides that, Hiroaki Kitano was so enthusiastic to ask me about Vietnamese life, so he helped me easy to talk with him. Although at first, I could hear clearly what he was talking about, but after I tried to hear and he tried to explain more, we could have a good conversation. We talk about the Vietnam food and I was so excited when he told he was so love Vietnamese food. He also wanted to learn Vietnamese, so I was interested to teach him. With me, this first meeting was good. After meeting, we had a city tour, in this tour I would go with one Japanese friend, I was a little bit nervous because this was the first time I took a tour. However I tried to share with my buddy about the daily life in Ho Chi Minh City and everything was better I thought. In the afternoon, we had a welcome lunch together, I was so comfortable to introduce traditional food for them, and taught them how to eat. After the first day, I felt more confident and was expectant the next days. During program, I studied more about Japanese cultures, improve my English skill.

Thank for Hoa Sen University, Tokyo Keizai University and AAEE give me the chance to join and get more experience than study at university. We was from strangers to become close friend,

we overcome language barriers, culture shock and make more memorable time together. I am not only make friend with Japanese friends, but also make new friend with Vietnams friends who from other majors. We were the same family, we ate together, worked together. The time when Japanese friend went back to their country, I cried, I didn't know why because in my mind, I always thought they like my clients, so it is so normally to drop – off clients. However when I said good bye, I could keep calm. I hope they did not leave and I did not know when they became my friends, not clients anymore. Finally, I want to say thank with my buddy, he was the one who help me improve my English and shared more information about Japan's culture to me. I could forget one time when I told him the next day I must take final exam, but after our tour I thought he would go back to hotel but he returned and he wish me to do the best for the exam, I felt so surprise and thank him too much. I was so happy when he was my buddy and make friend with Japanese friends.

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016
(3) Nguyễn Thị Nhật Linh

This is the first time that I participated in a student exchange program. At first, I was very nervous. I was thinking a lot about how to communicate with Japanese students and what topic I should talk about to keep the conversation go smoothly. On the first meeting day with the Japanese students, all Vietnamese talked to each other about what they are going to talk, about how nervous they are. But when we met and talked with Japanese members, I was able to catch up on a conversation with them easily and I felt that they are interesting. I have gradually started thinking that we will have good time together. Days after, we spent time together doing sport activities, presentation, having dinner together and going on field trip together. During those time, there were happy memories and also sad memories. I've once feel between Japanese students and Vietnamese students have a big distance that we cannot talk and have fun together as the first day we met. But through the field trip I think the distance has been shorten thanks to all the social activities we've done.'

In the field trip, I've had a chance to experience a country life that I've never thought of before. When we arrived at the Longhouse, I was thinking that I wanted to go home immediately because there was dirt and mosquitoes everywhere, how can a person that use to be a city life can manage to live 4 days in this place. But then through all the meals together, all the games we played together, all the activities we've done together, my bad thoughts was completely changed and I felt such lucky to able to experience this trip along with all my friends. We had had such good memories together and I will never forget those memories.

Through VJYE program, I've become more matured. Before attending this program, I was a shy person and I've had to struggle a lot with communication. But after this program, I've gained more confidence and I've learned how to work as a team with other

people. I didn't know any of Vietnamese members when I joined in, but time past by and now we are best friends. Also with Japanese members, at first, I thought that when the program is over, we will forget about each other. But Japanese members still keep in touch with us and we talk a lot. We plan to meet again someday. I hope that day will be not so far away.

I want to send my best regards to Hoa Sen University because I was very lucky to be Hoa Sen student that I can have opportunities to attend such meaningful programs. And I also want to send my appreciation to Tokyo Keizai University and Asia Association of Education and Exchange for having organized the VJYE program that brought me great memories, experiences and most important is friendship. I hope that in future, I will have opportunity to attend more interesting program like VJYE.

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016
(1) Võ Phước Minh Triết

I had a wonderful memory. That is the most beautiful memory I will never forget. I felt very lucky to be selected to this program. At the beginning, I was very nervous because this was the first time I made a program for foreign students. However, the thing which

attracted me was the Japanese students from Tokyo Keizai University in Vietnam – Japan Youth Exchange 2016 (VJYE 2016). So, this was a good opportunity for me to study and cultural exchange with you.

For me, VJYE 2016 gave me many experiences and useful things. We learned, worked and supported together in 10 days. Only 10 short days, but we've had the pleasure and sorrow together. But after all, the most important thing is that we had gained the knowledge about life, people and culture of the two countries. In spite of many difficulties we had to face due in language and culture gap, we could understand and maintain a good relationship together.

The most impressive thing for me is that you are very talented, each person had individual strengths. In Orientation day, I had been conquered by your performances. Through the performances, I knew more about Japanese culture. The most unforgettable memory for me was a trip to Ta Lai Longhouse. That is a great trip. I did a lot of good work for the society with the Japanese students. There were a lot of hard work in Ta Lai, I used to think we could not complete work because we were accustomed to live in urban, a modern life. But when we arrived in the village of ethnic people in Ta Lai, we had to stay in the jungle, walked on the muddy road and did social activities that mainly use people's physical power. Difficulties were a lot but we had overcome.

Beside that works, we had good memories together in Ta Lai. The experience that I had in this trip is the ability to group work, assigning work for each member and solving the problems occur at work. In addition, I also learned many useful things from your country. At school, I only learned about the culture of some country through Cross Communication subject. But when I joined in the VJYE 2016 program, I studied more cultural knowledge through communication and your performances. Besides, we organized various activities such as taking lectures about sustainable development goals (SDGs), sports activity, cuisine class and field trips. Through those activities we could learn each other's ways of

thinking and cultures.

After I had taken part in the VJYE 2016, I got the experience about how to manage a program and communication skills. I would like to thank Ms. Thuc and Mr. Seki (and AAEE) for giving me good advices and necessary sharings for me more resilient when implementing the program. I would like to appreciate Hoa Sen University, Tokyo Keizai University and Asia Association of Education and Exchange (AAEE) for giving me a chance to participate in this program. Thank you very much. I want to say special thanks to Mai Kaneko, my lovely buddy. Maybe I cannot talk with you much but I always remember the first day we met. Thanks you Yuto Ishii, the swimming talent and first Japanese friend talked with me. Mayuka Anada, a strong girl with Snow White face. Besides that, I want to say thank you to Hiroaki Kitano, a great Taiko player also Hou Yikang, Yuki Yamada, Hiroaki Murakami, Koushiro Ikeda, Zijie Zeng, Suguru Kidachi, Sho Takeshita, Yuta Takahashi and Rino Yoshida. Thank you very much. “Friendship is not limited”, Cinderella from Vietnam.

Reflection on VJYE (Vietnam-Japan Youth Exchange) 2016 (2) Huyền Tôn Nữ Như Ý

Time passes so quickly. It has been a month since you came to Vietnam. When I remembered the moment that you stayed here, I had many emotions with excitement but scare.

Now, I have also such a mixed mood. Although the program has ended, when I wake up in the morning, I hope to go to school early to welcome you here and participate in many social activities with you again. I used to be so scared that I couldn't adapt your new culture quickly and became your good friends. Until now, I have never forgotten that moment.

I am not a member in VJYE program for the first days. After you had visited my family and we together made the salad, cooked curry and beef noodle, I became a member of this program thanks to Ms. Thuc's introduction. I was really happy that you praised my mother for cooking well. I was moved and delighted when you thanked my mom and told me if you came back to Vietnam, you would visit my family and enjoyed my mother's delicious dishes once again.

It has been a week since we participated in VJYE. It is not the long period of time but I consider the program as my second family - the family consists of nearly twenty Japanese and Vietnamese students. In only a week, you helped me more mature, more confident and stronger.

At first, I had many things to worry such as I didn't know what to say with you as well as I could understand what you said to me. However, when I met you for the first time, I was really surprised to see the friendly and warm atmosphere from you - friends from Tokyo Keizai University. My anxiety was no longer. My friends and I learned many things about Japanese culture through your introduction. Now, we can speak a little Japanese and understand much about your culture.

Since I participated in program, I have been more confident and active. I was no longer shy. I learned many useful things such as how to arrange my sandals and other good habits.

I will never forget experiences that I had with you. For me, VJYE2016 brought me a wonderful trip. I did many useful things for my society that I never thought about it before. I feel very happy to know you who help me learn many things. In spite of having many difficulties in languages and culture, we can understand each other and maintain a good friendship. This trip is so meaningful to me. I hope we will have many useful trips like that in the future. Thank to Hoa Sen University, Tokyo Keizai University and Asia Association of Education and Exchange for making the chance for us to do something new.

Once again, I would like thank you so much, especially Mr. Seki and Ms. Thuc for all things that you did with me and my friends. I couldn't find any words to express my gratitude to you.